鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(17)

宮之浦港改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

火ノ上山遺跡

1996年3月

鹿児島県埋蔵文化財センター

序　文

屋久島は，1993年に自然遺産として世界遺産リストに登録されたように豊かな自然に恵まれた島で，昔より多くの人々が生活を営み，文化を育んできました。その結果，多くの有形・無形の文化財が残され，埋蔵文化財につきましても多くの遺跡が確認されています。特に，一湊松山遺跡につきましては，昭和26年より数回の調査が行なわれ，多くの成果が得られています。

今回調査を実施しました火ノ上山遺跡は，熊毛郡上屋久町宮之浦にある遺跡です。調査は，宮ノ浦港改修工事に伴う新設道路建設に係る緊急発掘調査で平成５年・７年と二度にわたり実施されました。その結果，屋久島・種子島特有の上能野式土器を中心に多くの遺物が出土しました。新たな成果が得られ，それらを本書にまとめました。本書が，広く活用され，県民の皆様の埋蔵文化財に対する関心とご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが，本書の刊行にあたり，文化財保護の主旨をご理解いただき，本遺跡の発掘調査に多大なるご協力を賜りました上屋久町教育委員会をはじめ各関係者に対して心より感謝の意を表します。

平成８年３月

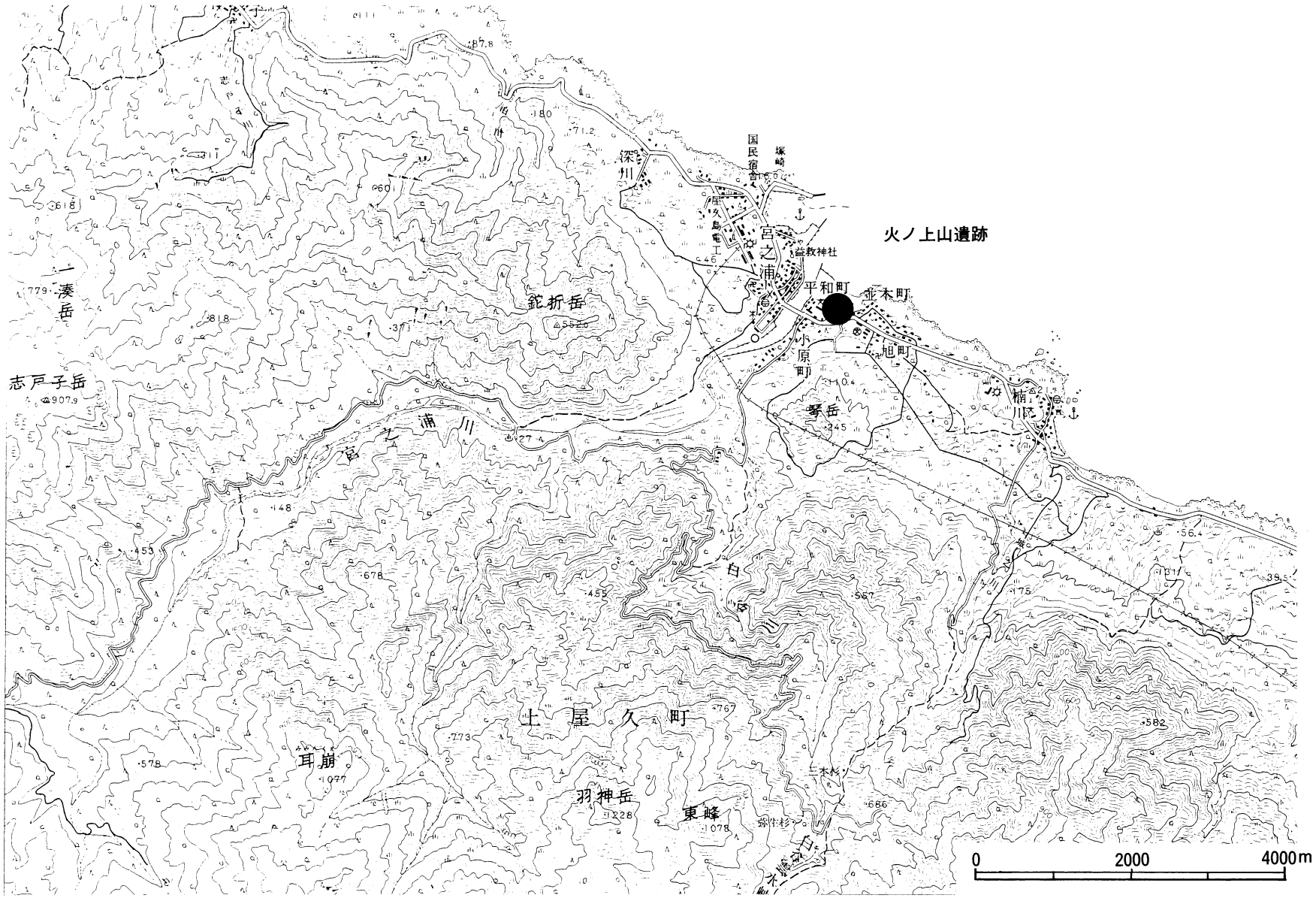
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　内村　正弘

報告書抄録

ふりがな	ひのかみやまいせき
書名	火ノ上山遺跡
副書名	宮之浦港改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	17
編著者名	倉元良文
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－56　鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地　TEL0995－65－8787
発行年月日	西暦1996年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
火ノ上山遺跡（ひのかみやまいせき）	鹿児島県熊毛郡（かごしまけんくまげぐん） 上屋久町宮之浦（かみやくちょうみやのうら） 火ノ上山（ひのかみやま）	465038	82－14	30°25′30″	130°34′19″	19930607～ 19930706 19950829～ 19930928	445	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
火ノ上山遺跡	包含地	弥生～古墳		入来式土器 山之口式土器 成川式土器 上能野（かみよきの）式土器 石皿　すり石等	


火ノ上山遺跡
平和町
並木町
旭町
小原町
宮之浦
益救神社
国民宿舎
塚崎
深川
鉈折岳
琴岳
湊岳
志戸子岳
宮之浦川
白谷川
上屋久町
耳崩
羽神岳
東峰
0
2000
4000m

第１図　遺跡位置図

例　言

1　本書は，鹿児島県熊毛郡上屋久町宮ノ浦の宮ノ浦港改修に伴う新設道路工事に係る緊急発掘調査報告書である。
2　本調査は，鹿児島県土木部の依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
3　遺物番号は，本文及び挿図・図版の番号と一致する。
4　発掘調査における測量・実測・写真撮影は，倉元・下薗が行なった。
5　本書掲載の出土遺物の実測及び浄書・遺物写真撮影・編集は，倉元が行なった。
6　遺物に関する指導・助言は，河口貞徳氏に依頼した。
7　本遺跡の出土遺物・図面・写真は鹿児島県立埋蔵文化財センターが，保管し，活用する。

目　　次

序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言
目次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 7
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 7
　第２節　調査の組織 …… 7
　第３節　調査の経過 …… 8
第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 …… 10
第Ⅲ章　平成５年度の調査 …… 12
　第１節　調査の概要 …… 12
　第２節　遺物 …… 18
第Ⅳ章　平成７年度の調査 …… 22
　第１節　調査の概要 …… 22
　第２節　層序 …… 27
　第３節　遺物 …… 27
第Ⅴ章　まとめ …… 62

挿図目次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡周辺・トレンチ配置・グリッド配置図 …… 11
第３図　１Ｔ・２Ｔ土層断面図 …… 13
第４図　３Ｔ・５Ｔ・６Ｔ土層断面図 …… 14
第５図　９Ｔ・10Ｔ・11Ｔ土層断面図 …… 15
第６図　トレンチ出土遺物(1) …… 16
第７図　トレンチ出土遺物(2) …… 17
第８図　トレンチ出土遺物(3) …… 18
第９図　トレンチ出土遺物(4) …… 19
第10図　トレンチ出土遺物(5) …… 20
第11図　Ⅱ層遺物（土器）出土状況 …… 23
第12図　Ⅲ層遺物（土器）出土状況 …… 24
第13図　Ⅳ層遺物（土器）出土状況 …… 25
第14図　Ⅱ～Ⅳ層遺物（石器）出土状況 …… 26
第15図　基本土層図 …… 27
第16図　調査区出土遺物(1) …… 28
第17図　調査区出土遺物(2) …… 29
第18図　調査区出土遺物(3) …… 30
第19図　調査区出土遺物(4) …… 31
第20図　調査区出土遺物(5) …… 32

第21図　調査区出土遺物(6) …… 33
第22図　調査区出土遺物(7) …… 34
第23図　調査区出土遺物(8) …… 35
第24図　調査区出土遺物(9) …… 36
第25図　調査区出土遺物(10) …… 37
第26図　調査区出土遺物(11) …… 38
第27図　調査区出土遺物(12) …… 39
第28図　調査区出土遺物(13) …… 40
第29図　調査区出土遺物(14) …… 41
第30図　調査区出土遺物(15) …… 42
第31図　調査区出土遺物(16) …… 43
第32図　調査区出土遺物(17) …… 44
第33図　調査区出土遺物(18) …… 45
第34図　調査区出土遺物(19) …… 46
第35図　調査区出土遺物(20) …… 47
第36図　調査区出土遺物(21) …… 48
第37図　調査区出土遺物(22) …… 49
第38図　調査区出土遺物(23) …… 50
第39図　調査区出土遺物(24) …… 51
第40図　調査区出土遺物(25) …… 52
第41図　調査区出土遺物(26) …… 53
第42図　調査区出土遺物(27) …… 54
第43図　調査区出土遺物(28) …… 55

表　目　次

第１表　トレンチ一覧表(1) …… 18
第２表　トレンチ出土土器観察表(1) …… 20
第３表　トレンチ出土土器観察表(2) …… 21
第４表　トレンチ出土石器観察表 …… 21
第５表　トレンチ一覧表(2) …… 22
第６表　調査区出土土器観察表(1) …… 56
第７表　調査区出土土器観察表(2) …… 57
第８表　調査区出土土器観察表(3) …… 58
第９表　調査区出土土器観察表(4) …… 59
第10表　調査区出土石器観察表(1) …… 59
第11表　調査区出土石器観察表(2) …… 60
第12表　調査区出土石器観察表(3) …… 61

図 版 目 次

図版１　発掘作業風景他 …… 65
図版２　遺物出土状況他 …… 66
図版３　出土遺物(1) …… 67
図版４　出土遺物(2) …… 68
図版５　出土遺物(3) …… 69
図版６　出土遺物(4) …… 70
図版７　出土遺物(5) …… 71
図版８　出土遺物(6) …… 72
図版９　出土遺物(7) …… 73
図版10　出土遺物(8) …… 74

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部は，熊毛郡上屋久町宮之浦において宮之浦港改修工事に伴う道路建設を計画し，工事区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課に照会した。この結果，工事区内が火ノ上山遺跡の範囲内であることから，県土木部と文化課の協議がもたれた。その結果，県土木部からの受託事業として緊急発掘調査を実施し，記録保存の処置を講ずることとなった。調査は県教育委員会が企画し，県立埋蔵文化財センターが調査責任者となって実施することとなった。

第2節　調査の組織

平成5年度

事業主体	鹿児島県土木部		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　長	大久保忠昭
	〃	次長兼総務課長	水口　俊雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	繁昌　正幸
	〃	〃	倉元　良文
調査事務担当者	〃	主　査	成尾　雅明
	〃	主　事	中村　和代

平成7年度

事業主体	鹿児島県土木部		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　長	内村　正弘
	〃	次長兼総務課長	河原　信義
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	倉元　良文
	〃	〃	下薗　昌三
調査事務担当者	〃	主　査	成尾　雅明
	〃	主　事	追立ひとみ

なお，当遺跡の出土遺物については，鹿児島県考古学会会長河口貞徳氏の指導助言を得た。また，発掘調査にあたっては上屋久町教育委員会及び地元の方々の協力を得た。

第３節　調査の経過

発掘調査は，平成５年６月７日から７月６日までと平成７年８月28日から９月22日までにそれぞれ実施された。以下，調査の経過については，年度毎の日誌抄をもってかえる。

【平成５年度調査】

平成５年６月７日　発掘機材搬入。諸準備。

８日　作業員への調査内容説明及び安全についての注意。雨のため午後作業中止。

９日　雨のため作業中止。

10日　１～８Ｔ設定。３～８Ｔ重機による表土除去。１～２Ｔ掘り下げ。３・４Ｔ遺構遺物なし。土層断面写真撮影，実測，埋め戻し。

11日　２Ｔ清掃，土層断面写真撮影，実測。５・６Ｔ掘り下げ。７・８Ｔ重機による掘り下げ，土層断面写真撮影。２・７・８Ｔ埋め戻し。

14日　９Ｔ設定。５・６・９Ｔ掘り下げ。

15日　10Ｔ設定。９・10Ｔ掘り下げ。

16日　９Ｔ掘り下げ，土層断面写真撮影，実測，埋め戻し。１Ｔ拡張，掘り下げ。

17日　10Ｔ土層断面実測。１Ｔ掘り下げ。

18日　１Ｔ掘り下げ。

21日　１Ｔ掘り下げ。11Ｔ設定，掘り下げ。

22日　１Ｔ掘り下げ。

23日　１Ｔ掘り下げ。

24日　５・６・11・12Ｔ清掃，写真撮影。

28日　５・11Ｔ掘り下げ。６Ｔ清掃，土層断面実測。

29日　６Ｔ埋め戻し。１・５Ｔ掘り下げ。11Ｔ土層断面写真撮影。

30日　５Ｔ清掃，土層断面写真撮影，実測。１・11Ｔ掘り下げ。

７月１日　１・11Ｔ土層断面写真撮影，実測。

２日　１・５・11Ｔ埋め戻し。後片付け。

５日　現地協議。

６日　平成５年度の調査終了。

【平成７年度調査】

平成７年８月29日　発掘機材搬入。環境整備。作業員への発掘調査の内容説明及び安全についての注意。12Ｔ～14Ｔ設定，掘り下げ開始。

30日　防護フェンス設置。12Ｔ～14Ｔ掘り下げ。

31日　12Ｔ～14Ｔ掘り下げ。15Ｔ設定，掘り下げ。遺跡遠景写真及び作業風景写真撮影。

９月１日　12Ｔ～15Ｔ掘り下げ。15Ｔから土器（上能野式）出土。12Ｔ～14Ｔ土層断面写真撮影。

4日　12T～14T掘り下げ。営林署宿舎跡地付近の表層を重機で除去。

5日　営林署宿舎跡地付近の表層を重機で除去及び残土処理。1T～3T清掃。

6日　10mグリッド設定。A－1・A－2・B－1・B－2区掘り下げ。12T～14T位置図作成，写真撮影。

7日　A－1・A－2・B－1・B－2区掘り下げ，清掃。写真撮影。遺跡範囲図作成。A・B－3・4区瓦礫除去，掘り下げ。

9日　A－5・B－5区瓦礫除去。A－3・A－4・B－3・B－4区掘り下げ。

11日　A－3・A－4・B－3・B－4区掘り下げ。

12日　A－2・B－2区掘り下げ，石組み検出。A－3・B－3区遺物出土状況写真撮影。

13日　A－3・A－4・B－3・B－4区掘り下げ。A－4・B－4区出土遺物平板実測，遺物取り上げ。石組み検出状況写真撮影。

14日　A－3・A－4・B－3・B－4区掘り下げ。

18日　A－4・B－3・B－4区出土遺物平板実測，遺物取り上げ。A・B－3・4区掘り下げ。

19日　A－5・B－5区掘り下げ。A－3・A－4・B－3・B－4区出土遺物平板実測，遺物取り上げ。

20日　A－3・A－4・A－5 B－3・B－4・B－5区掘り下げ及び遺物出土状況写真撮影。

21日　A－3・A－4・B－3・B－4区掘り下げ，出土遺物平板実測。遺物取り上げ。A－4区遺物出土状況写真撮影。

25日　A－3・A－4・B－3・B－4区掘り下げ，出土遺物平板実測，遺物取り上げ。

26日　A－3・A－4・A－5 B－3・B－4・B－5区掘り下げ，出土遺物平板実測，遺物取り上げ。B－4区遺物出土状況写真撮影。

27日　A－3・A－4・A－5 B－3・B－4・B－5区掘り下げ，出土遺物平板実測，遺物取り上げ。B－3・B－4・B－5区南側断面写真撮影及び実測。

28日　後片付け。発掘機材搬出。調査終了。

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境

第１節　遺跡の位置

屋久島は，佐多岬の南方約70kmの東シナ海に浮かぶ東西約28km，南北約24km，周囲約105km，面積約500km²のほぼ円形の島である。面積では，佐渡・奄美大島・淡路島・天草下島に次ぐ島である。地形は，海岸線から急峻な山々へ連なり平野部は少なく，亜熱帯から亜高山帯までの植物垂直分布が顕著である。中央部には宮之浦岳をはじめとし，永田岳・黒味岳など1500ｍ以上の山が30以上も続き，霧島屋久国立公園となっている。屋久島のまわりには黒潮が流れ，この影響で平地では平均気温が21℃と温暖な気候であるが，高山部では冬期には氷点下10℃以下にもなる気候変化に富む島である。また，海の水分を多量に含んだ空気は，山にそって上昇し雨雲となり，平地でも年間4000mm近くの雨量を観測する。従って，河川の流量も多く，高い山々より一気に海岸へと向かう瀑布も数多く存在する。1993年12月に世界遺産委員会で，世界的に貴重な自然遺産として日本で最初に世界遺産リストに登録された。

火ノ上山遺跡の所在する上屋久町は，屋久島の北半分と口永良部島からなり，南は屋久町に接し，他は海に面している。

史料に見る屋久島は，「日本書記」推古天皇24年３月条，「続日本紀」文武天皇３年秋７月辛未条に「掖玖」の記載がある。中世の前半においては屋久島は島津氏の支配下に置かれるが，15世紀に入ると種子島氏の支配を受けることとなり近世にいたる。そして，明治22年宮之浦・楠川・小瀬田・吉田・一湊・志戸子・永田・口永良部の８ケ村が合併し上屋久村に，昭和33年に上屋久町となった。

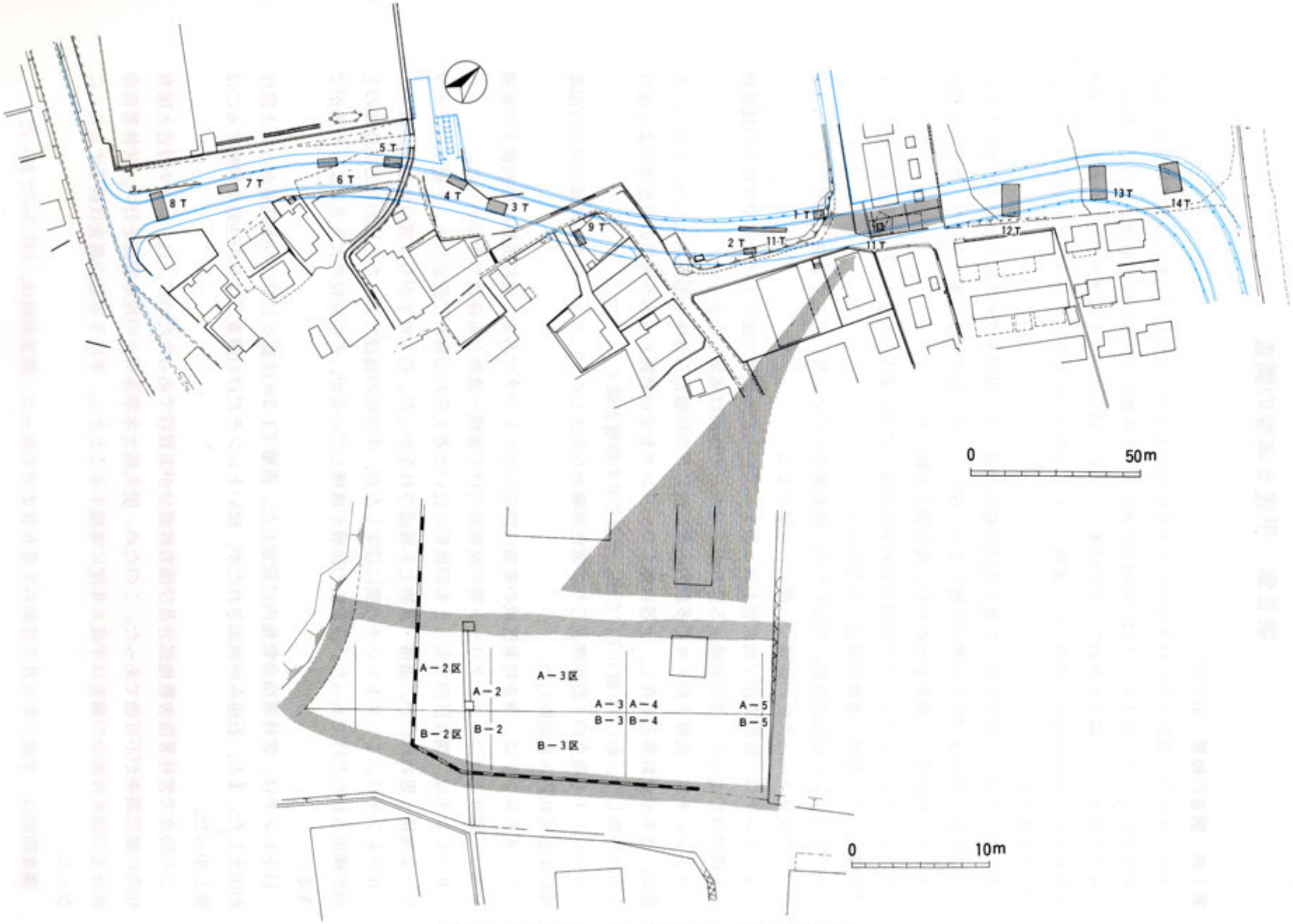
上屋久町の遺跡は，鹿児島県市町村別遺跡地名表によると平成７年３月現在66箇所の遺跡が知られている。特に，一湊松山遺跡は，昭和26年以来数回の発掘調査が行なわれ，縄文時代後期の松山式土器と一湊式土器の標式遺跡である。一湊松山遺跡をはじめとし，縄文時代の遺跡は34箇所，弥生時代の遺跡は本遺跡を含め19箇所が知られている。

平成３年には岡遺跡の調査が行なわれ，15～16世紀の小舟の係留地と考えられる溝状遺構が検出され，青磁・白磁等が出土した。平成６年には永田の叶遺跡の調査が実施されている。

本遺跡は宮之浦川の右岸にあり，現海岸線まで数十メートルという砂丘の後背地にある。市町村別遺跡地名表の宮之浦遺跡（82－14）がこれにあたる。昭和50年代の宮浦中学校体育館建築や校庭の造成の折りには土器が多量に出土したとのことである。したがって本遺跡の主体部はすでに破壊された可能性が強い。また，昭和61年に鹿児島大学法文学部考古学研究室と上屋久町教育委員会による町内の遺跡分布調査が行なわれ，本遺跡で採集されたという土器が紹介されている。

参　考　文　献

「一湊松山遺跡」	上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書	1981	上屋久町教育委員会
「日本地名大辞典」		1983	角川書店
「上屋久町の埋蔵文化財」	上屋久町埋蔵文化財調査報告書　第２集	1989	上屋久町教育委員会
「岡遺跡」	上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書 第３集	1992	上屋久町教育委員会



第２図　遺跡周辺・トレンチ配置・グリット配置図

第Ⅲ章　平成５年度の調査

第１節　調査の概要（第２図）

平成５年度は，調査区内に11本のトレンチを任意の大きさで設定し，必要に応じては拡張しながら調査を行なった。各トレンチは，砂地のため1.5～２ｍ掘り下げると壁が崩壊するので，概ねこの深さを基準とし，調査を進めた。その結果，５・６・11トレンチから遺物が出土したが，いずれも攪乱もしくは流れ込みと判断した。遺構についても検出されなかった。次に各トレンチの状況について記述する。

１トレンチは，宮浦中学校への進入道路の脇に設定した。現道を含め３回の嵩上が行なわれていた。地表から約80㎝で砂と小礫の互層となる。深いところで約２ｍまで掘り下げた。数点の土器が出土したため拡張して調査を進めたが，攪乱層と判断した。

２トレンチは，１トレンチと同様に道路脇に設定したが，約1.5ｍ掘り下げた時点で水道のパイプを確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

３～８トレンチは仮設道路に設定したが，砂利敷きのため必要に応じて重機で掘り下げた。３トレンチの表層下は白黄色の砂層で，礫との互層になる。

４トレンチは，仮設道路で地表面が固く締まっていたため重機で掘り下げた。中学校の旧建築物の基礎部分であった。壁が崩壊する恐れがあったため断面は実測しなかった。

５トレンチは，表層下約１ｍで多数の円礫に混じりの砂層から弥生土器が出土した。しかし，土器は，流木や金釘等と混在し，土器自体もローリングを受け磨耗しており河川の氾濫等による流れこみと判断した。約1.8ｍ掘り下げたが，礫混じりの砂層が続く。

６トレンチも数点の土器が礫混じりの黄色砂層から出土したが，５トレンチと同様に河川の氾濫等による流れ込みと判断した。

７・８トレンチは，調査対象区域の東側に設定したトレンチである。仮設道路の砂利敷きで重機を使って掘り下げた。コンクリート等の廃棄物だけで遺構・遺物とも確認できなかった。

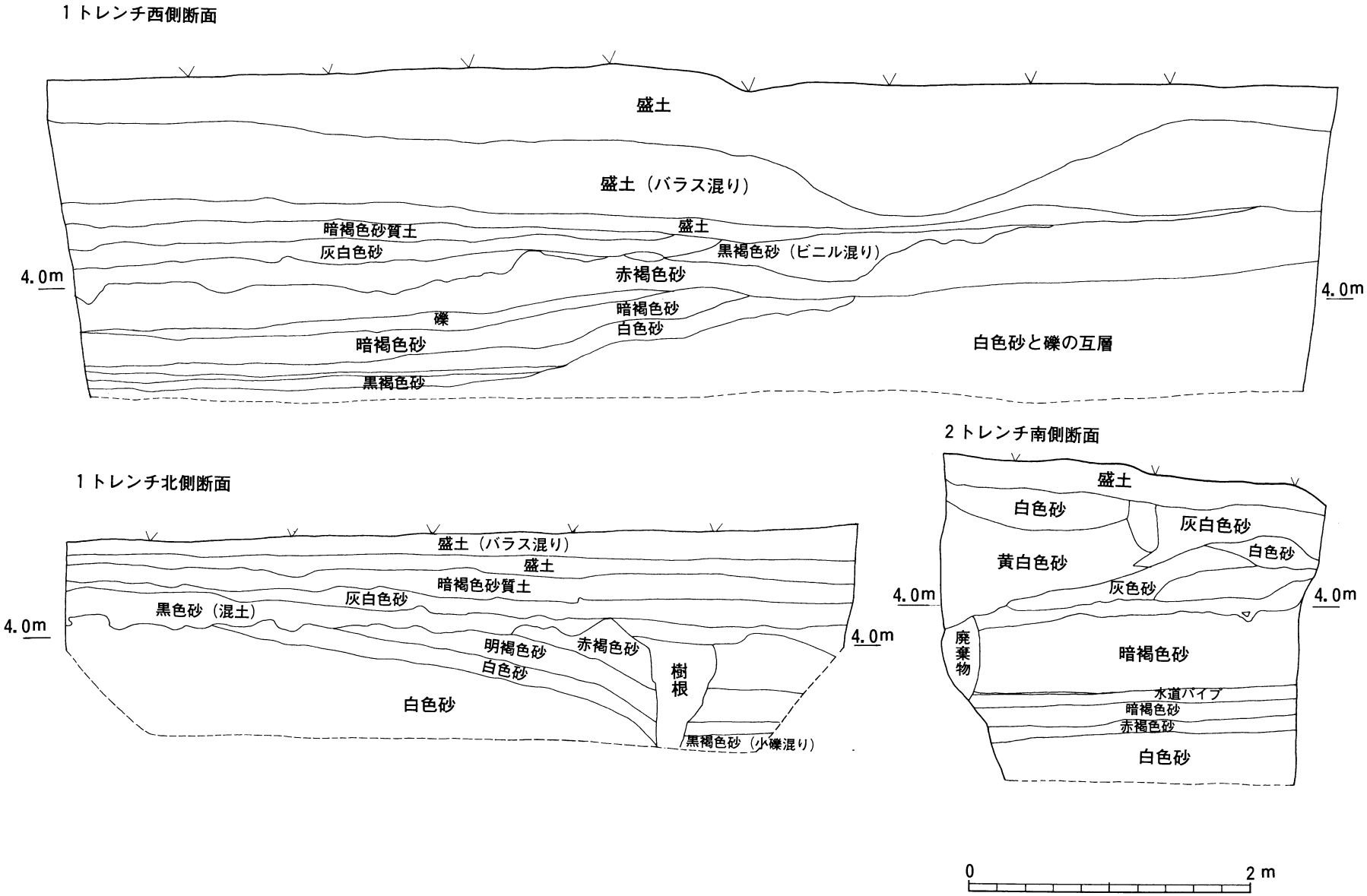
９トレンチは，調査区内でもっとも旧地形に近いと考えられる場所に設定した。土層もプライマリーな堆積と思われたが，遺構・遺物とも確認されなかった。約１ｍ下からは黄白色砂層が続く。

10トレンチは，１・２トレンチの間に設定したが，中学校の施設であったと思われる高鉄棒の土台が検出されただけであった。浅黄色の砂層が堆積しているが，その砂粒の大きさにより分層ができる。

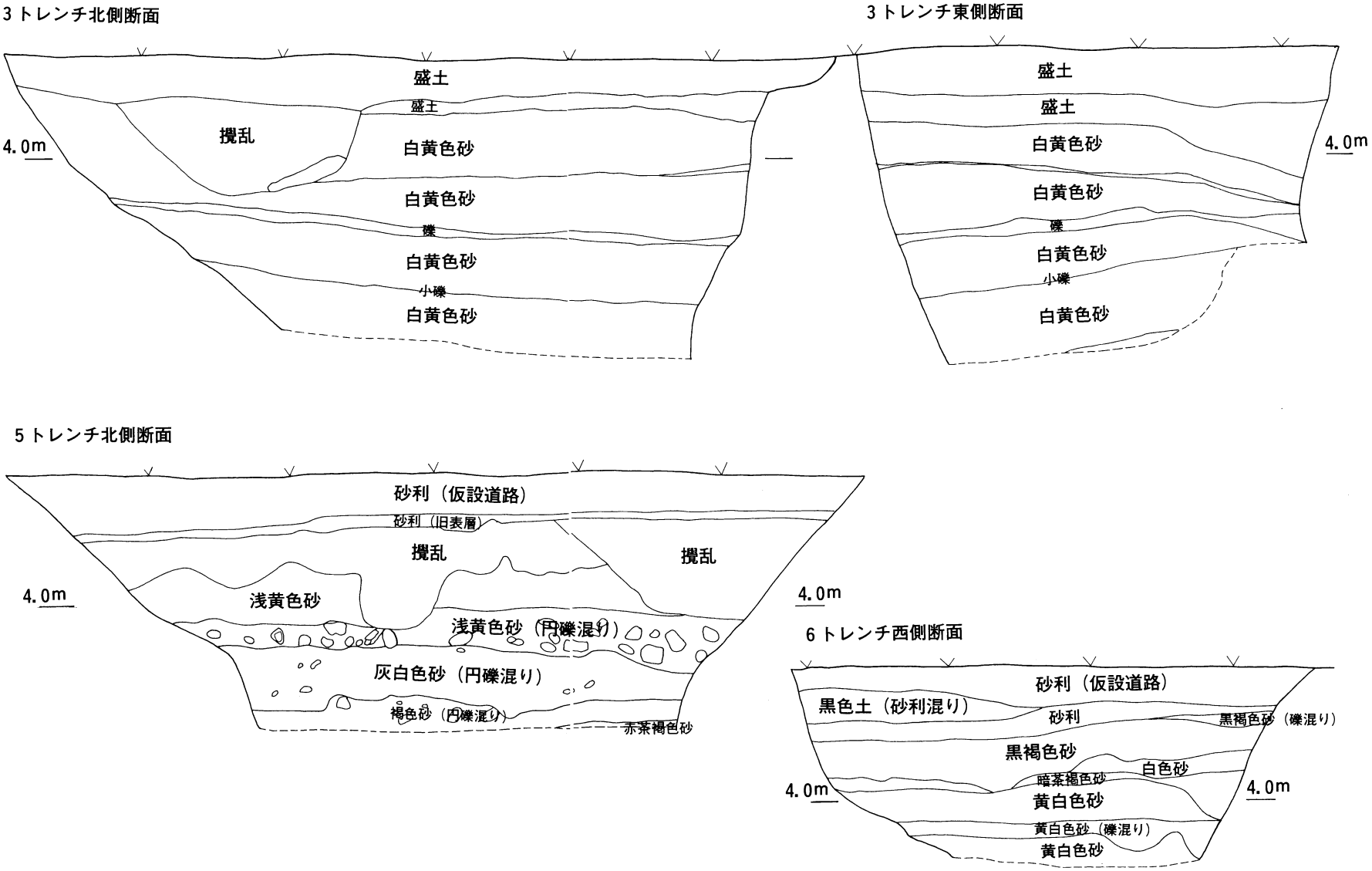
11トレンチは，営林署宿舎敷地内に設定した。表層下1.5ｍは盛り土でこの攪乱層からは土器片が出土した。また，石組みが検出されたが，狭いトレンチだけの調査ではその性格を判断するには難しかった。

この時点で営林署宿舎敷地部分及び国有林部分が未買収であったために，11トレンチ付近と国有林内の確認調査が不可能であった。このため，屋久島土木事務所との現地協議を行い，営林署宿舎部分及び国有林部分の調査は平成６年度に実施することとし，平成５年度の調査は終了することになった。

調査期間は，平成５年６月７日から７月６日までであった。調査面積は，167.5㎡であった。



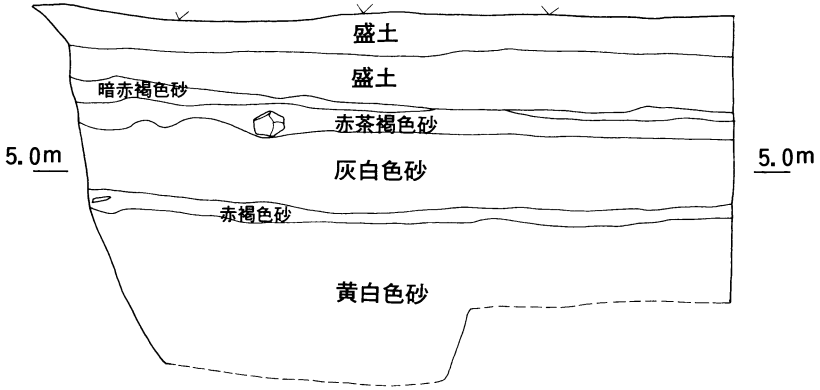
第3図　1T・2T土層断面図



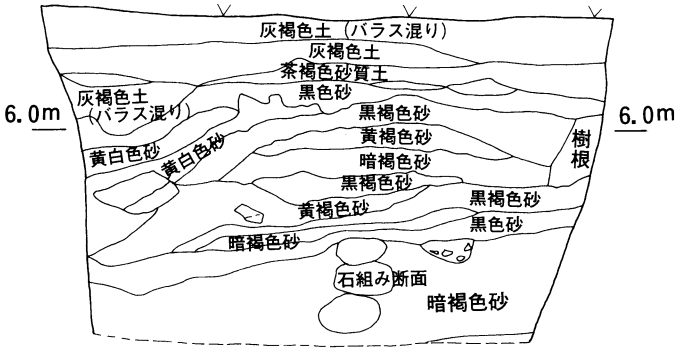
第4図　3T・5T・6T土層断面図

0　2m

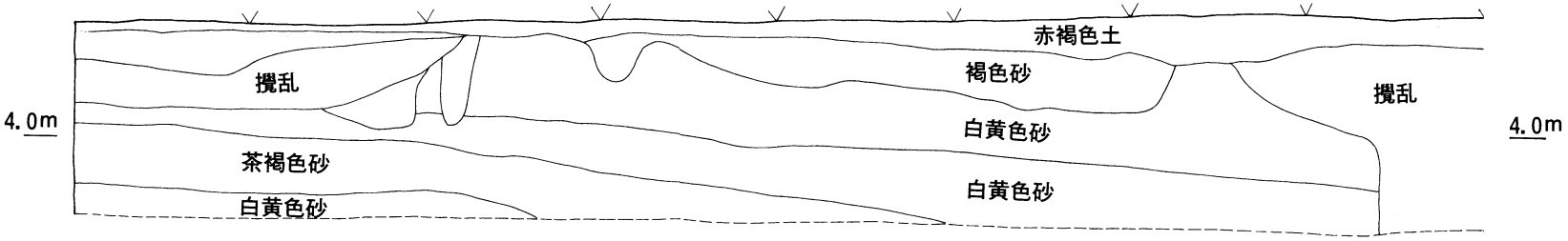
9トレンチ南側断面

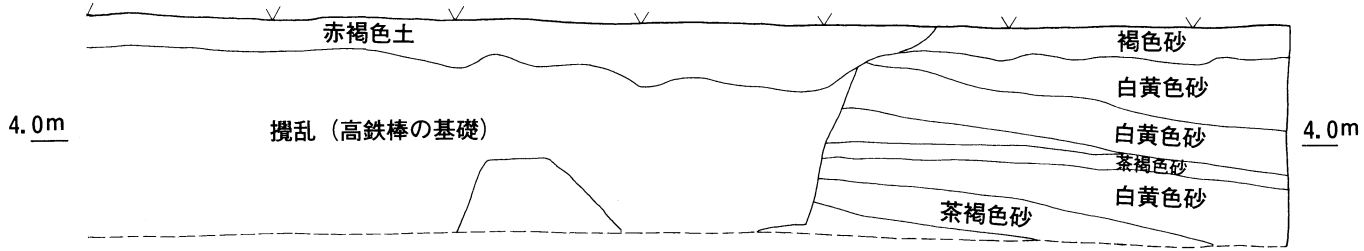


11トレンチ南側断面



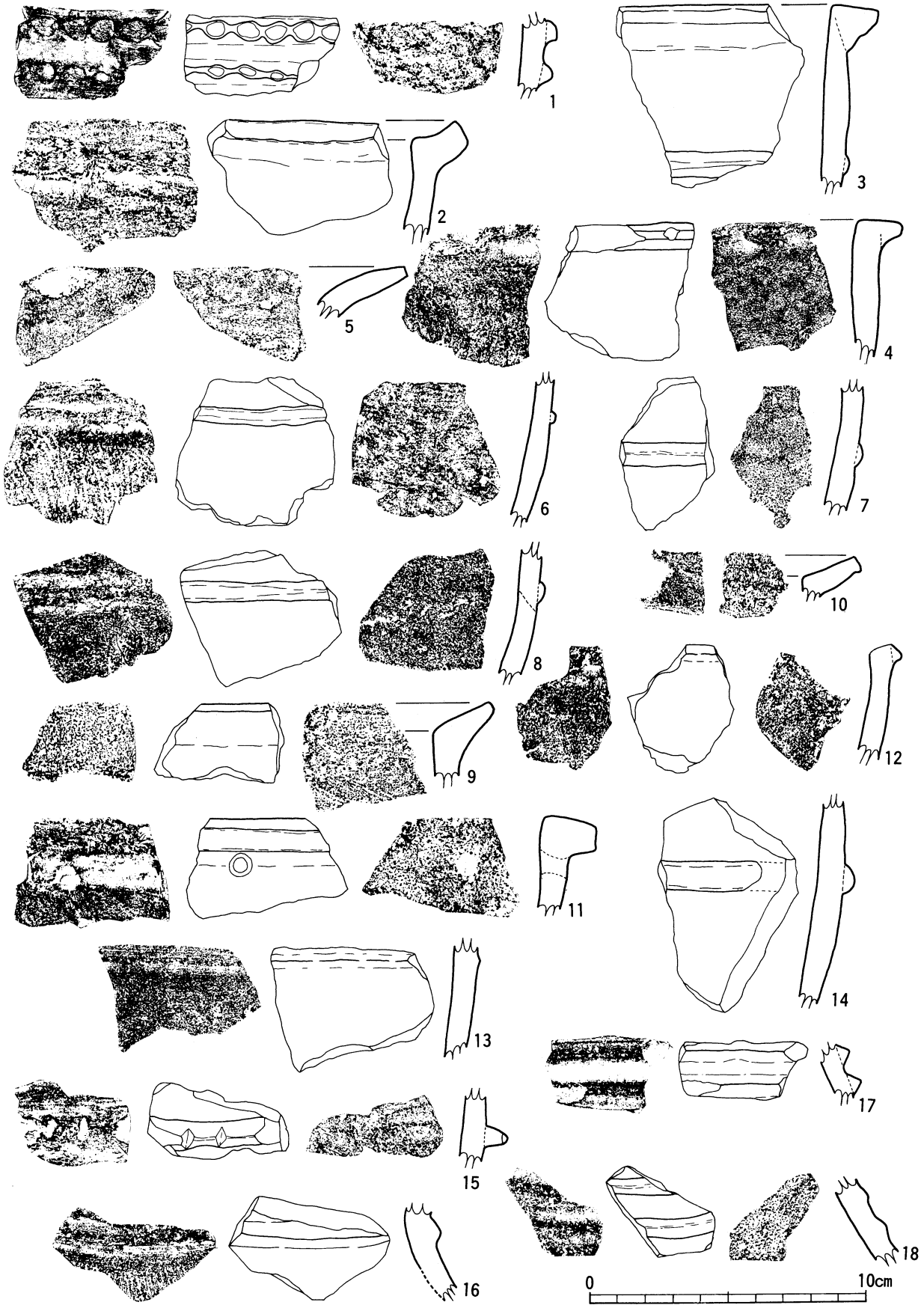
10トレンチ東側断面



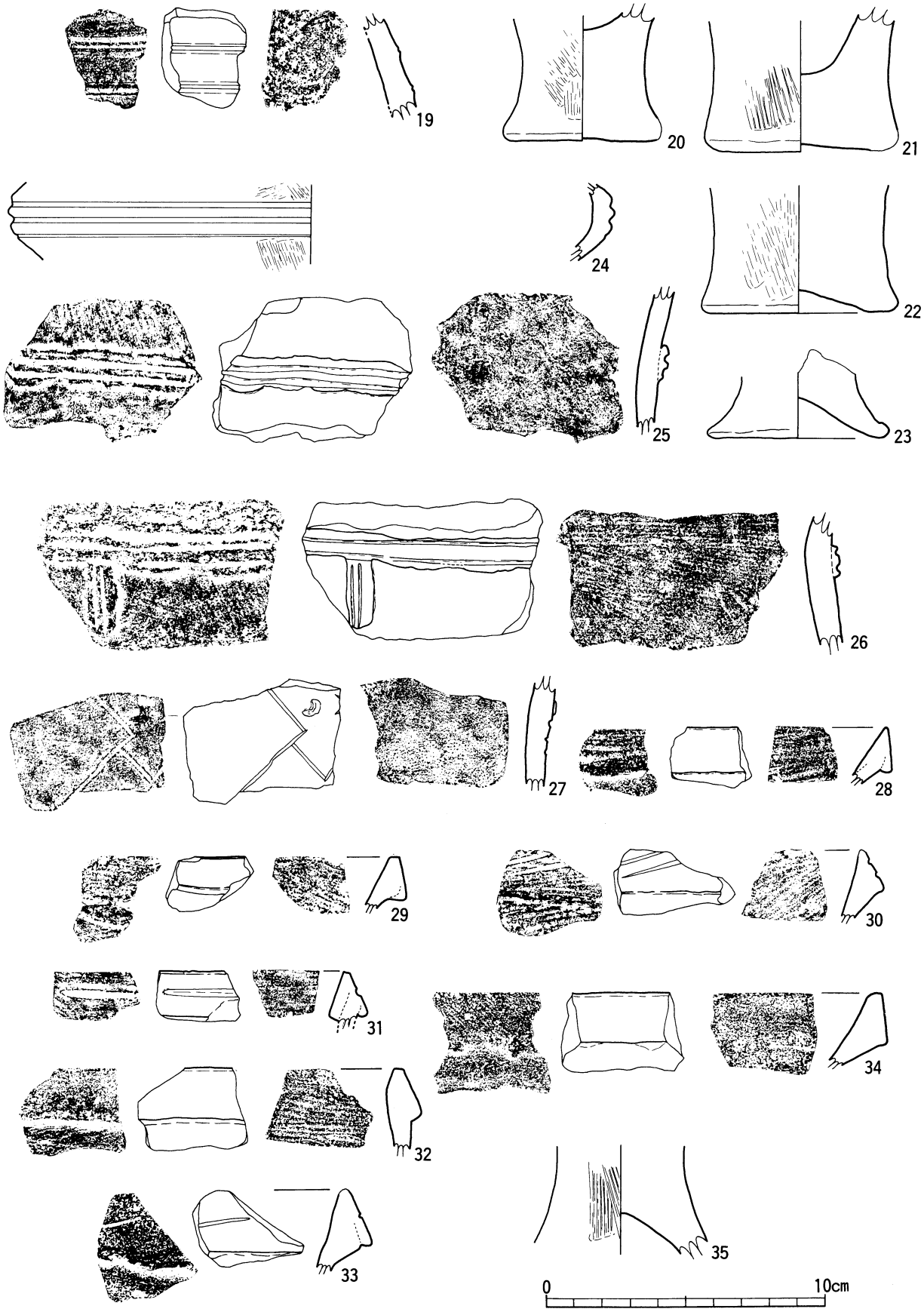


0　2 m

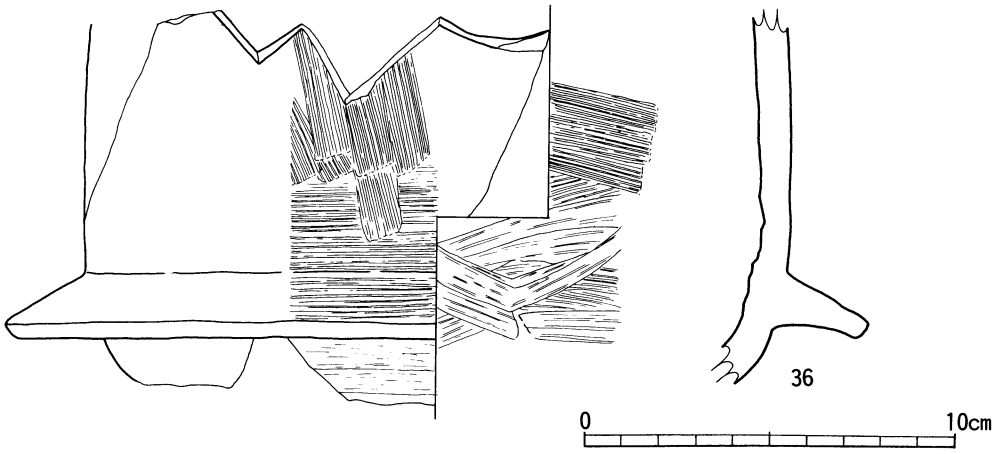
第５図　９Ｔ・10Ｔ・11Ｔ土層断面図



第６図　トレンチ出土遺物(1)



第７図　トレンチ出土遺物(2)



第8図　トレンチ出土遺物(3)

第1表　　トレンチ一覧表(1)

トレンチ番号	調査面積㎡　(m)	遺構の有無	遺物の有無	備　　考
1	7.5　(2.5× 3.0)	無	無	茶褐色砂層から土器出土。拡張して調査したが攪乱。
2	6.6　(2.0× 3.3)	無	無	表層下は浅黄色砂層。
3	19.8　(3.6× 5.5)	無	無	仮設道路砂利敷きの下，約2m確認。
4	18.0　(3.0× 6.0)	無	無	宮浦中学校旧校舎基礎部分。
5	19.25 (3.5× 5.5)	無	無	多量の円礫の中に土器・流木・かな釘。川の氾濫等による流れ込み。
6	13.75 (2.5× 5.5)	無	無	5トレンチと同じ。
7	21.0　(3.5× 6.0)	無	無	約2m砂層を掘り下げ。
8	31.68 (3.6× 8.8)	無	無	約2m砂層掘り下げ。
9	11.27 (2.3× 4.9)	無	無	約2m砂層掘り下げ。
10	14.5　(1.0×14.5)	無	無	宮浦中学校旧高鉄棒基礎以外は砂層。
11	4.14 (1.8× 2.3)	有	無	石組み。地表下約1.5m時代・性格等は不明。

第2節　遺物（第6～10図）

出土した遺物はすべて攪乱及び表層からの出土である。1は，2条の突帯に刻みを施したものである。焼成もよく，在地の土器のものとは違う。

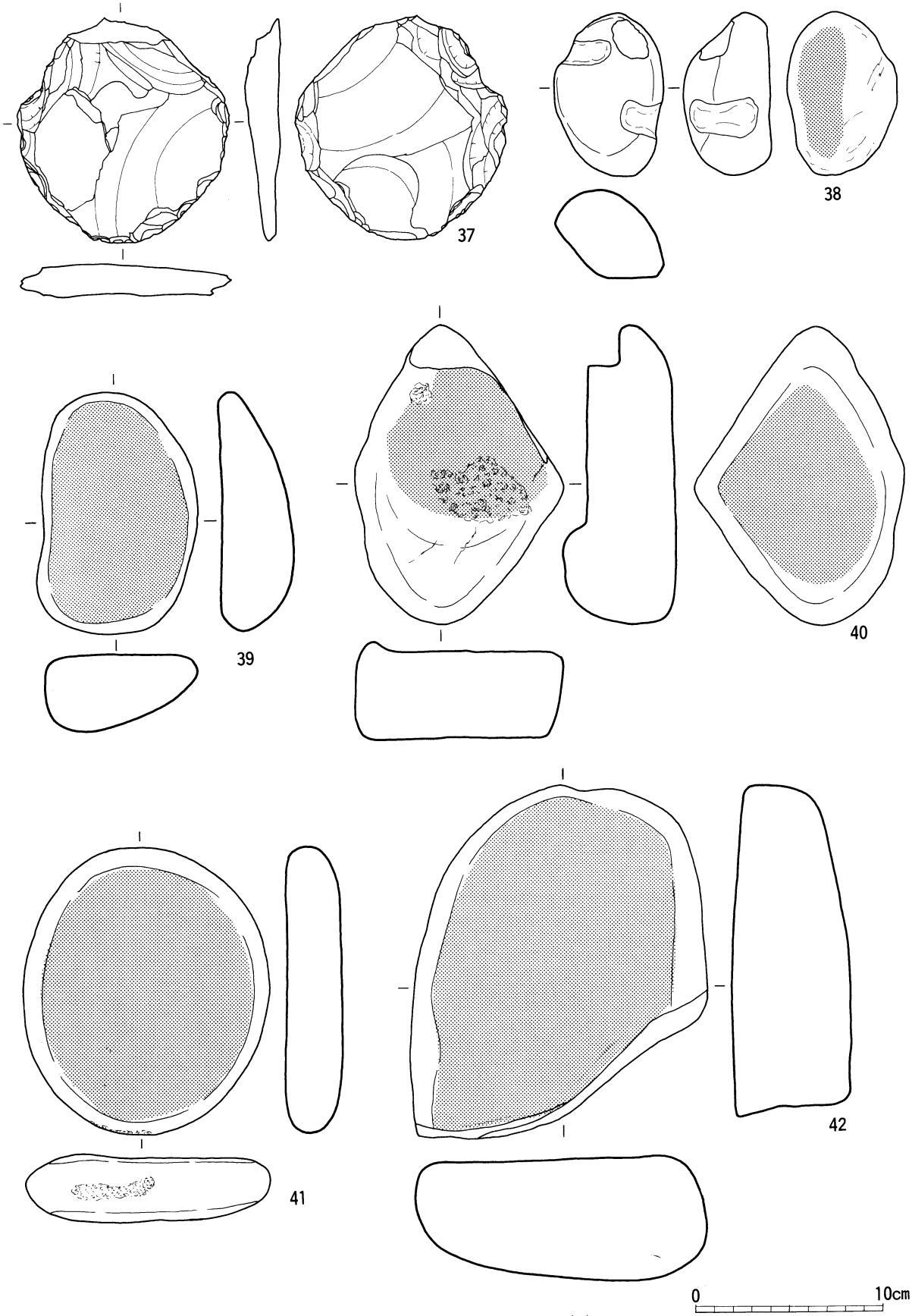
2は，口縁部を逆L字状にし端部を平坦につくってある。口縁屈曲部が若干上向きである。3・4は逆L字の口縁端部がすぼまる。3は口唇部と胴部の突帯に，4は口唇部に刻みがあっただろうが，ローリングを受け明確ではない。5の口唇部は，明確な面取りがみられる。6・7・8は，突帯部分である。3～8の胎土は小礫を含み粗く，調整も粗い。

9～11は，口縁部である。9・10は，口縁屈曲部が上向く。11は，口縁下部に穿孔を施してある。12～15は，甕形土器の突帯部分である。12の突帯に刻みの有無は不明，15の突帯には明確な刻みがはいる。13の突帯は，わずかな隆起で2状以上つく可能性もある。16～19は，壺形土器の突帯部分である。13・16・17・19の胎土は，密で焼成もよい。20～22は底部で，胎土・焼成とも類似している。24は，長頸壺と思われる土器の胴部である。胴部復元径は，21.6cmである。

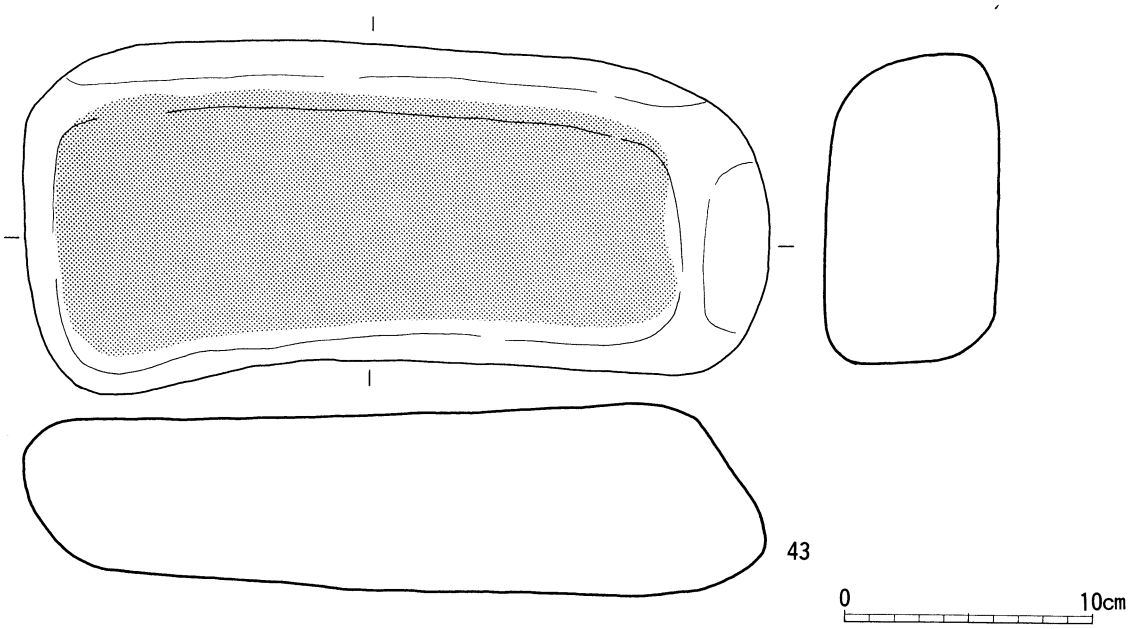
25・26は，平たい粘土紐を貼り付け，その上に2状の沈線を施すものである。

27は沈線を施し，小さい瘤状の突起をもつ土器片である。

28～33は，すべて1トレンチの表層出土の土器である。口縁部の断面が三角形で，肥厚帯に沈線を施すものと無文のものがある。調整はハケを基本とする。



第９図　トレンチ出土遺物(4)



第10図　トレンチ出土遺物(5)

36は，羽釜である。鍔部分より上部が長く，菱形と円状と思われる透かしが特徴である。県内の羽釜出土例としては，鹿児島市加栗山遺跡・鹿児島市鹿児島城跡・横川町横川城跡・姶良町南宮島遺跡・東串良町下伊倉城跡・上屋久町岡遺跡に類例がある。

37～43は，すべて表層出土である。37は，基部の欠損した打製石斧である。38・39は磨石で，39は2条の溝状のくぼみがある。40～42は石皿，43は砥石である。

1は弥生時代前期，2～24は弥生時代中期に比定できると思われる。25・26は，鳥ノ峯遺跡出土の土器に類似しているようにも思われる。28～32は，口縁部が肥厚する上能野式土器である。33は脚部であるが，上能野式土器である。27は沈線で文様を施すが，上能野式土器とは若干ニュアンスが違うように思われる。

第2表　トレンチ出土土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面	内面	備考
第6図	1	5T	表	長石　石英	良	褐色	ハケ	風化	
	2	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒多い	不良	黄褐色	ハケ	ハケ	器面調整は粗い
	3	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒多し	不良	黄褐色	ハケ	ハケ	器面調整は粗い 突帯先端は摩滅
	4	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒	不良	暗灰黄色	ハケ	ハケ	突帯の先端は摩滅
	5	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒	不良	褐色	ナデ	ナデ	
	6	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒	不良	褐色	ハケ	ハケ	突帯の先端は摩滅
	7	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒	不良	褐色	ハケ	ナデ	突帯の先端は摩滅
	8	11T	表	長石　石英　金雲母　砂粒	不良	暗灰褐色	ナデ	ナデ	内外とも多少風化
	9	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒	不良	黄褐色	ナデ	ハケ	
	10	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒	不良	褐色	ナデ	ナデ	

第3表　トレンチ出土土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎　土	焼成	色　調	外　面	内　面	備　考
第6図	11	11T	表	長石　石英　金雲母	不良	黄褐色	ナデ	風化	穿孔
	12	5T	表	長石　石英　金雲母	不良	褐色	ナデ	ナデ	突帯先端は摩滅
	13	11T	表	長石　石英	良	黄褐色	ハケ	風化	
	14	11T	表	長石　石英　金雲母	不良	明赤褐色	風化	ナデ	
	15	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒	普通	褐色	ナデ	ナデ	
	16	11T	表	長石　石英	良	明褐色	ハケ	ナデ	複数の突帯
	17	5T	表	長石　石英	良	浅黄橙	ハケ	不明	
	18	5T	表	長石　石英	普通	黄褐色	風化	風化	
第7図	19	5T	表	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	
	20	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒	不良	黄褐色	ナデ		上底気味
	21	5T	表	長石　石英　金雲母　砂粒	普通	黄褐色	ハケ		上底気味
	22	5T	表	長石　石英　金雲母	不良	浅黄褐色	ナデ		上底
	23	11T	表	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ナデ		
	24	11T	表	長石　石英	良	褐色	ナデ	ナデ	長頸壺
	25	5T	表	長石　石英　金雲母	良	明赤褐色	ハケ	ナデ	
	26	11T	表	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	27	11T	表	長石　石英　金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ	
	28	1T拡	表	長石　石英　金雲母	良	明赤褐	ハケ	ハケ	
	29	1T拡	表	長石　石英　金雲母	普通	明色褐	ハケ	ハケ	
	30	1T拡	表	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ハケ	口唇部欠損
	31	1T	表	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ハケ	ハケ	巾広い沈線
	32	1T拡	表	長石　石英　金雲母	普通	赤褐色	ハケ	ハケ	
	33	1T拡	表	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	風化	
	34	1T拡	表	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ハケ	
	35	1T拡	表	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ		
第8図	36	11T	表	瓦器質　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	羽釜

第4表　トレンチ出土石器観察表

挿図	番号	出土区	層	器　種	石材	長さm	幅cm	厚さcm	重量kg	観察所見
第9図	37	6T	表	石斧	粘板岩	11.9	11.3	1.7	0.26	破損
	38	6T	表	磨石	砂岩	8.8	5.9	4.6	0.23	溝2本
	39	11T	表	磨石	砂岩	12.9	8.3	4.1	0.61	
	40	5T	表	石皿	砂岩	16.0	11.2	6.3	1.2	小型
	41	5T	表	磨石	砂岩	15.2	13.2	3.0	1.6	
	42	11T	表	石皿	砂岩	17.8	15.7	6.7	2.79	破損
第10図	43	5T	表	砥石	砂岩	14.1	30.1	7.7	5.53	

第Ⅳ章　平成７年度の調査

第１節　調査の概要（第２・11図）

営林署宿舎部分及び国有林内の調査は手続き上の問題で協議の結果，平成６年度に実施する計画であった。しかし，国有林の指定解除等の手続きが再び平成６年度内に終了せず，平成７年度まで延期することとなった。

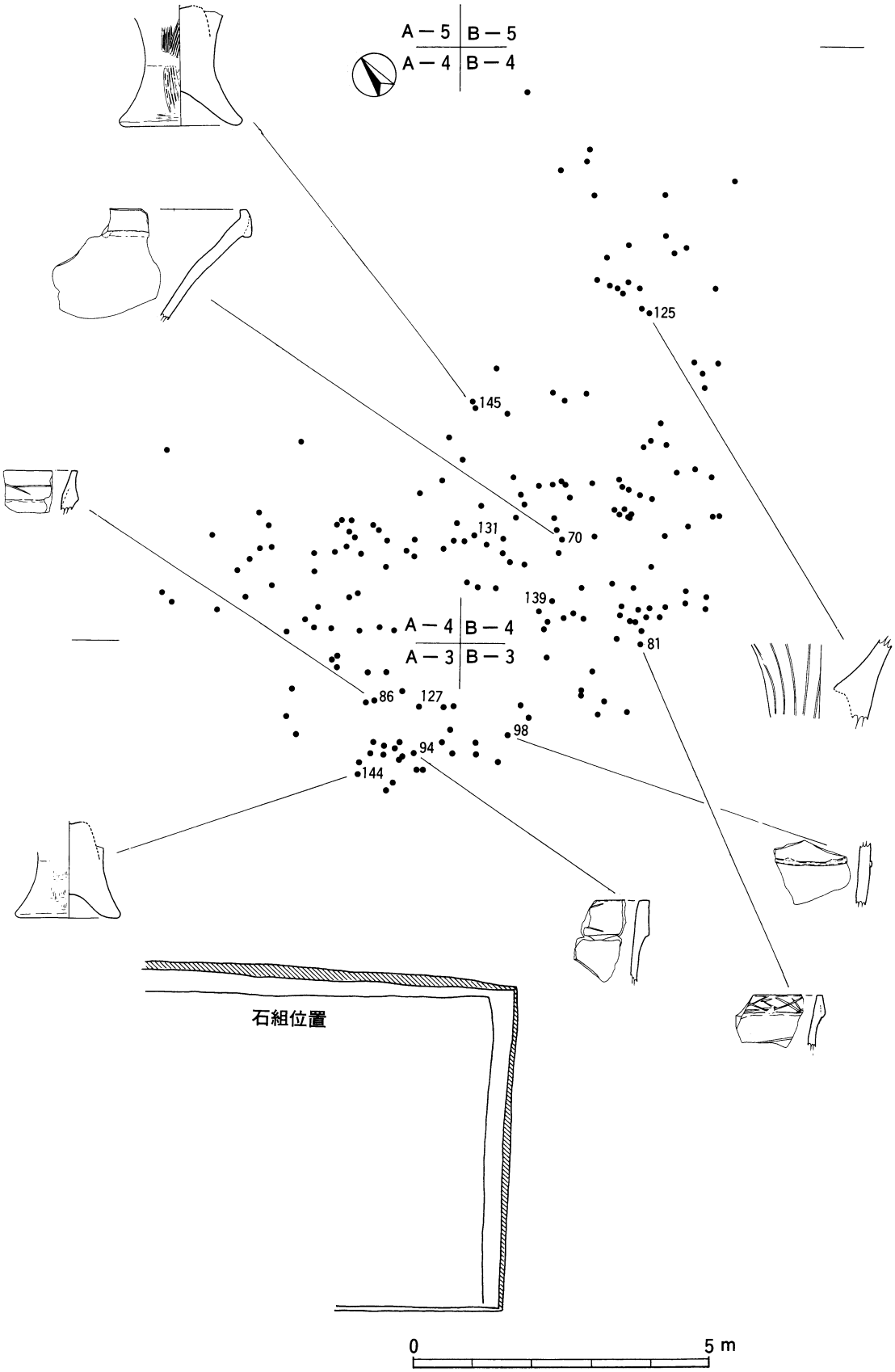
平成７年度は，国有林内の樹木伐採及び営林署宿舎一部立退後に調査を開始した。まず，現砂丘の海側の傾斜地に12～14トレンチを任意の大きさで設定し，人力で掘り下げた。いずれのトレンチも浅黄色砂と灰白色砂の互層で遺構・遺物とも検出されなかった。土層断面も写真撮影のみで実測はしなかった。15トレンチは，営林署宿舎部分の道路側に設定した。その結果，地表面から約30cmの深さに上能野式土器が出土した。平成７年度と平成５年度の確認調査結果をもとに営林署宿舎部分を全面発掘調査することとした。

調査は，調査区の南北の境界線から約50cm控えて，表層を重機で慎重に掘り下げ，排土はトラックで調査区外へ持ち出した。重機による表層の剝ぎ取り後，道路計画図面のセンターNo11とNo12を基準に10ｍグリッド枠を北から南へＡ・Ｂ区，東から西へ１～５区と設定した。人力による掘り下げは，１・２区から行なった。表層下から土器が多く出土したが，掘り進めるに従って陶器類やビン類も出土し撹乱と判断した。包含層と同じ砂で盛り土してあり，撹乱であるかどうかの判断に時間を要した。平成５年度の確認調査で一部検出した石組みは，短辺が東西方向に5.5ｍで長辺は南北へ走り調査区の北側へと続いていた。検出を進めるうちに石組み内より軟式の野球ボールやビニールひもも確認されたために最近の構築物と判断し写真撮影と位置図を作成し実測は行なわなかった。これにより包含層が残存する範囲は，Ａ・Ｂ－３区の中程より西側に限定されることとなった。遺物はⅢ層を中心にⅡ層からⅣ層にかけて出土した。表層からは弥生時代の土器片も出土したが，包含層から出土した土器はそのほとんどが上能野式土器であった。石器は，磨石・敲石・石皿類が多く出土した。Ⅳ層上面で遺構検出を行い，一部黒色化している箇所があり調査した結果すべて樹根であった。また，Ａ－４区の大部分は営林署宿舎敷地の造成時に撹乱を受けていると思われ，撹乱を受けても砂層のため，その判断には手間取った。

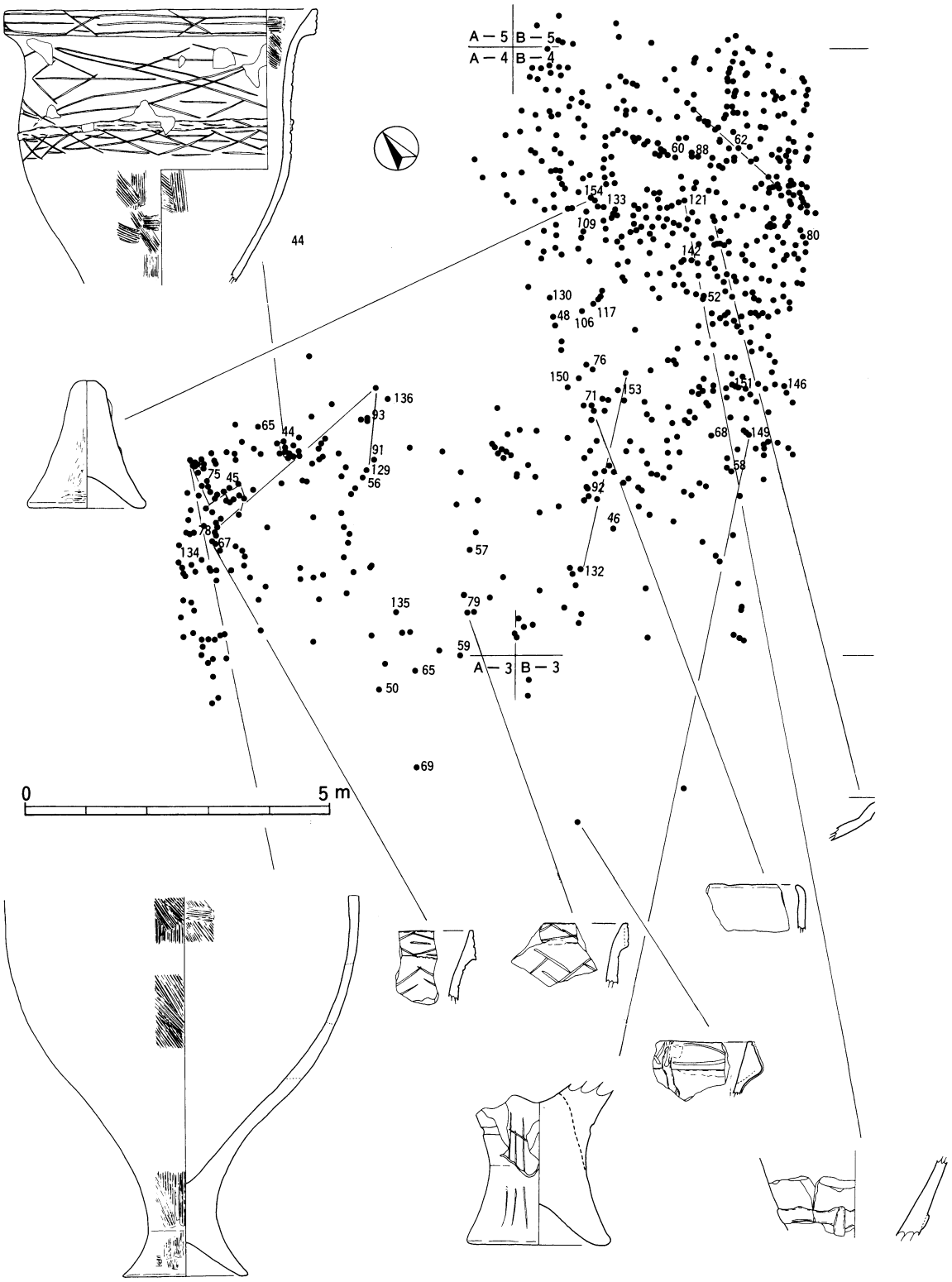
調査期間は平成７年８月29日から９月28日までで，調査面積は445㎡であった。

第５表　トレンチ一覧表(2)

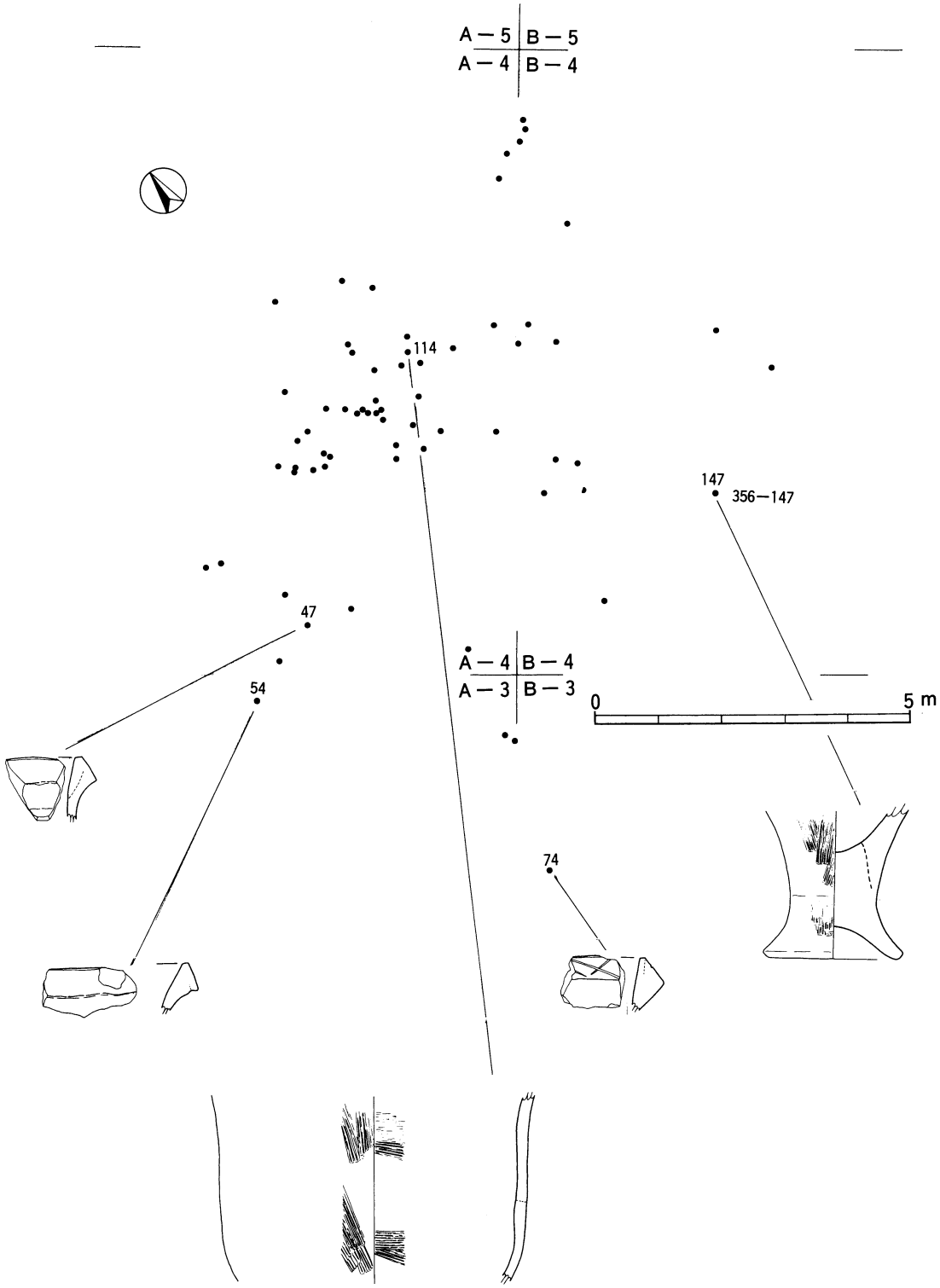
トレンチ番号	調査面積㎡　(m)	遺構の有無	遺物の有無	備　　考
12	49.68（9.2×5.4）	無	無	現海岸線から約30m
13	50　（10 ×5　）	無	無	現海岸線から約50m
14	48.6　（ 9 ×5.4）	無	無	現海岸線から約75m
15	8　（ 2 ×4　）	有	無	現海岸線から約100m　上能野式土器出土



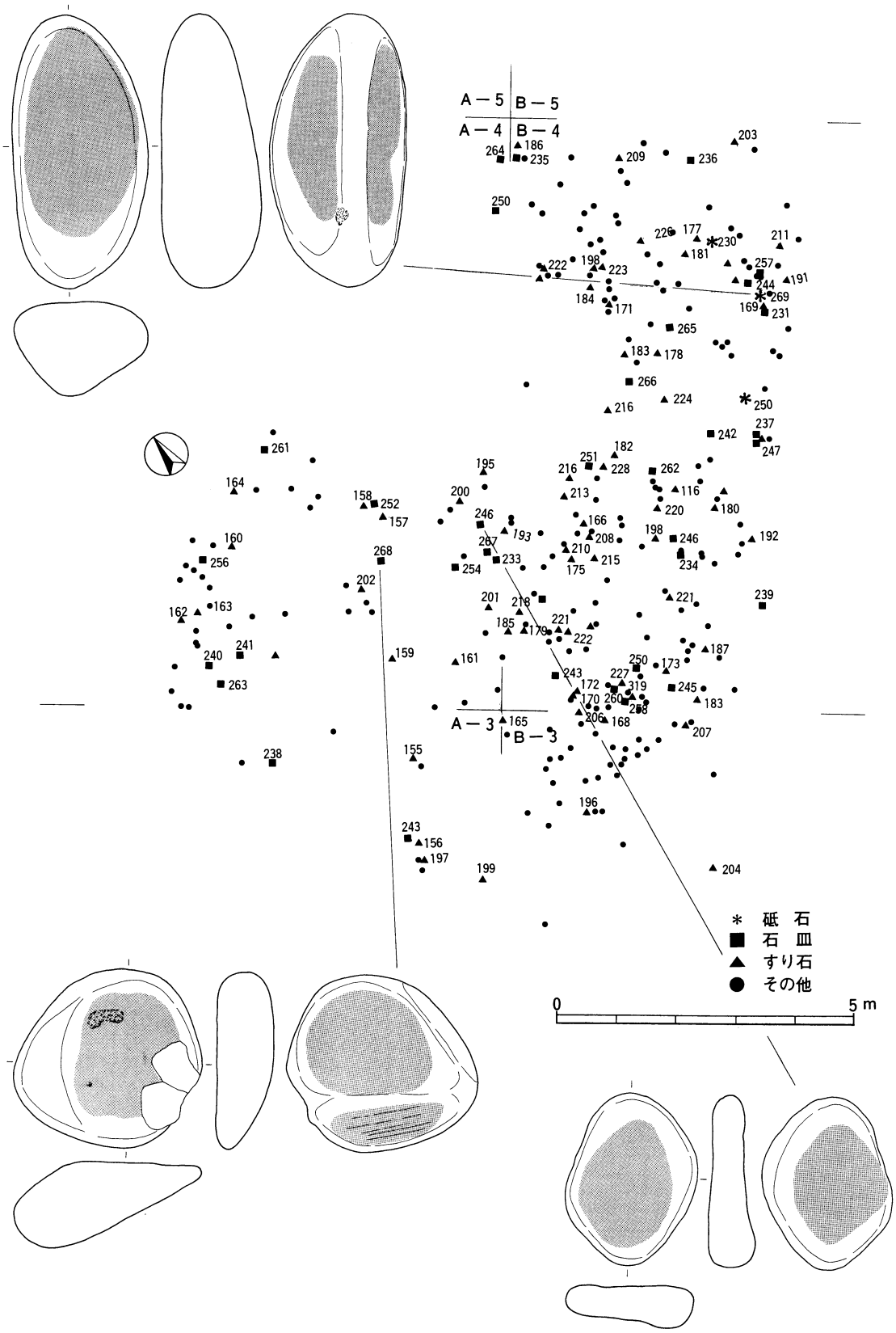
第11図　Ⅱ層遺物（土器）出土状況



第12図　Ⅲ層遺物（土器）出土状況



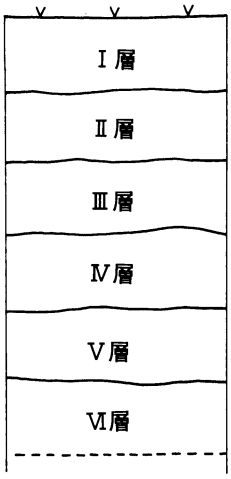
第13図　Ⅳ層遺物（土器）出土状況



第14図　Ⅱ～Ⅳ層遺物（石器）出土状況

第2節　層序

調査区内は撹乱・盛土部分があったり，砂丘地であるためか砂層が連続しなかったりするが，基本的には次のとおりである。包含層は，Ⅲ層を中心にⅡ層下面からⅣ層上面にかけてである。



第15図　基本土層図

Ⅰ層　表層

Ⅱ層　赤褐色砂層～乾くと白くなる。

Ⅲ層　暗赤褐色砂層～乾くと黒みが増す。

Ⅳ層　黄白色砂層

Ⅴ層　明褐色砂層

Ⅵ層　黄白色砂層

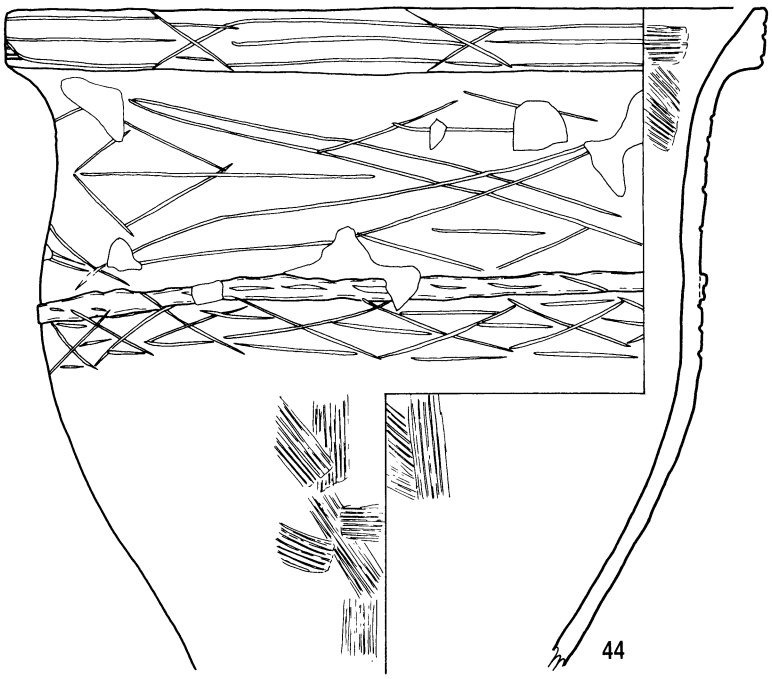
第3節　遺物

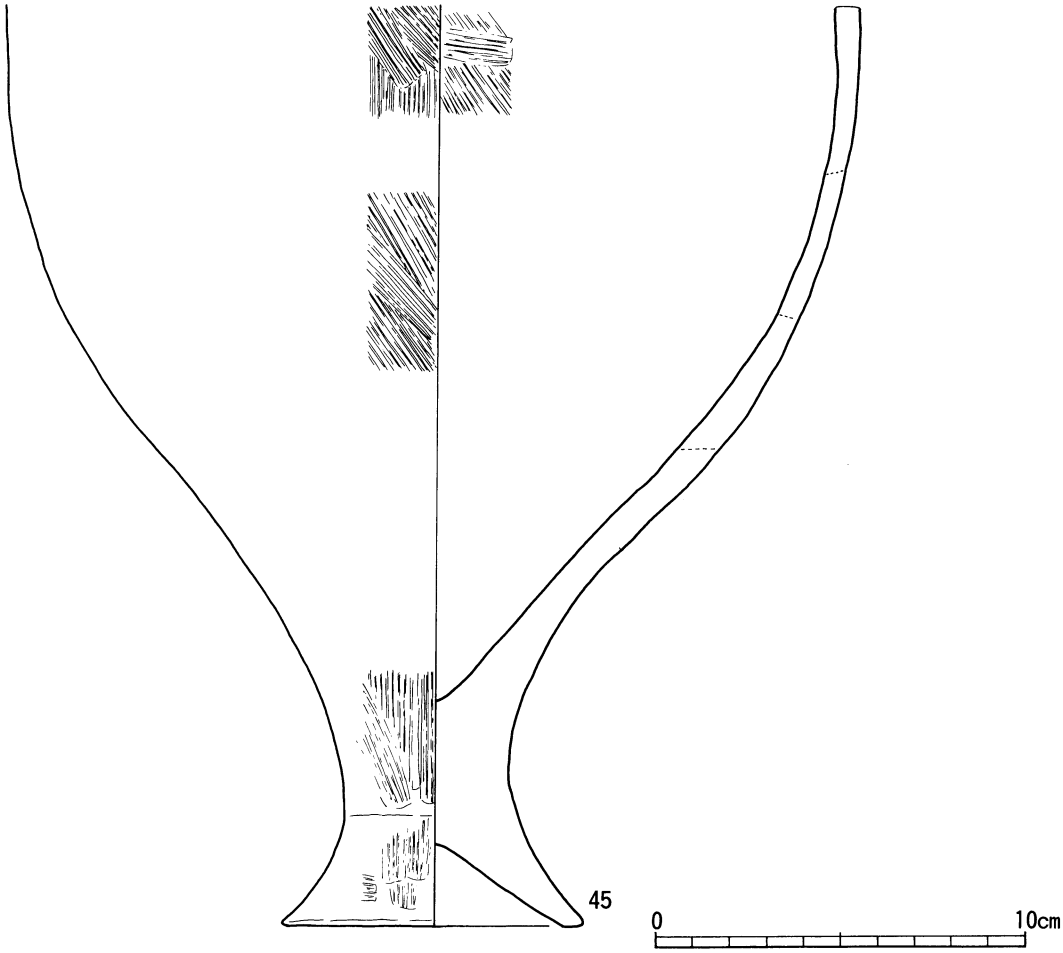
【土器】（第16～25図）

44・45は，今回の調査で出土した土器の中で完形に近いものである。44は，最大径を口縁部に持ち20.4cmを計る。断面三角形に肥厚した口縁部は外反し，口縁端部は平坦に仕上げている。頸部は，少し湾曲しながら胴部へ続く。器壁は5～6mmと薄い。胴中央部には貼りつけ突帯をもつ。文様は肥厚した口縁部から胴中央部の突帯の下まで沈線を施す。調整は内外ともハケ目である。45の上部三分の一は欠損している。釣り鐘状の胴部に小さめの脚がつく。胴部の最大径は23cm，底径は8cmである。器壁は5～8mmである。調整はハケ目による。上部三分の一は接合面で剝離しているが，その面を再度利用した調整痕らしいものがある。

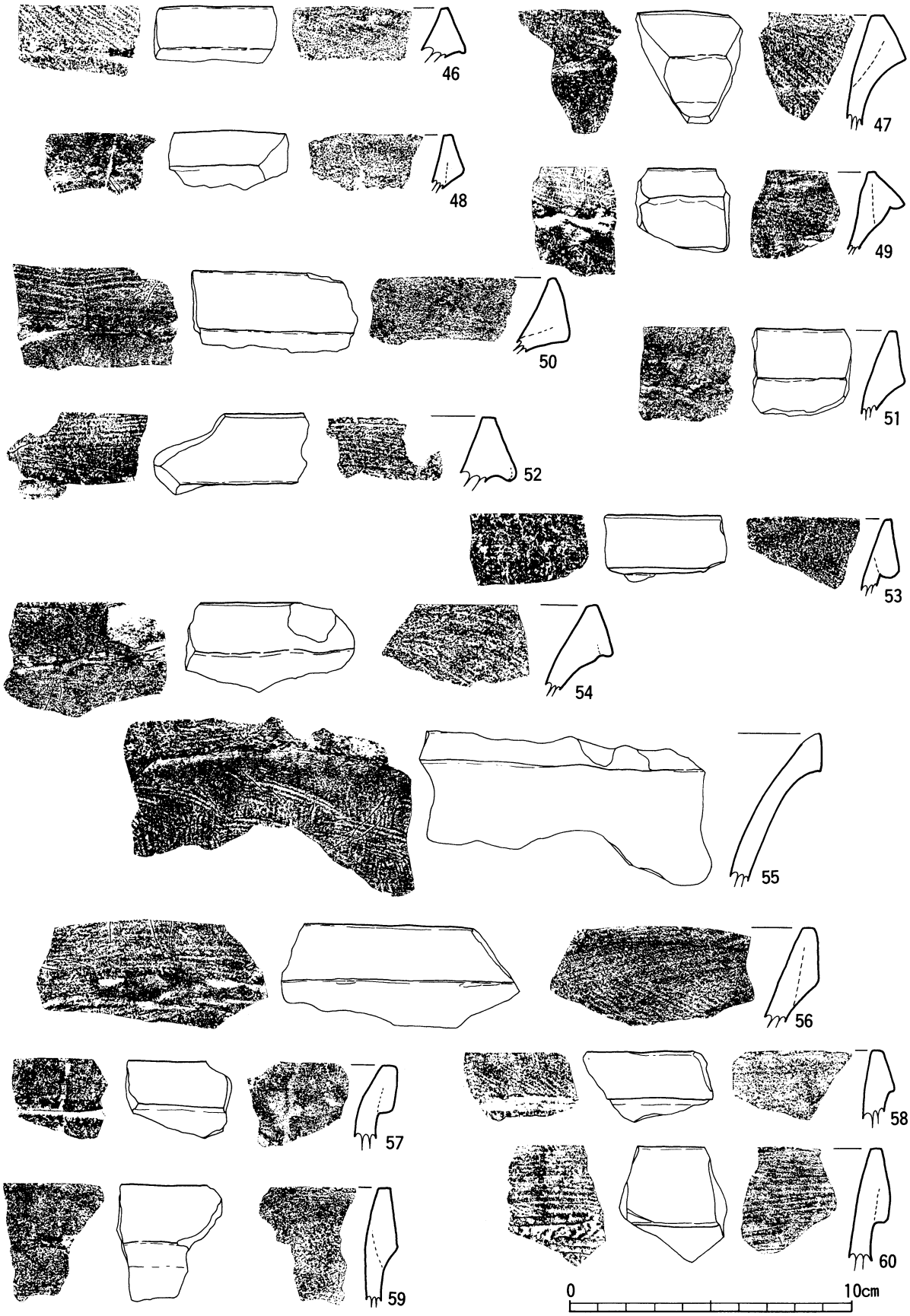
46～72は，無文の口縁部である。口縁部が外反気味か直行するもの（46～64），外反し口縁端部が内側を向くもの（65～70）がある。口縁部の断面については三角形になるもの，間延びした三角形になるもの，四角形に近くなるものがある。また，口縁端部は平坦に仕上げるが，67については丸くおさめている。70は，肥厚帯の断面が四角形となり口縁部は外反する。71は，器壁が4mmと薄く，口縁部に肥厚帯をもたずに直行し端部が内湾する。72は，土師質の土器で，器形的には須恵器の広口の壺の口縁部か蓋の可能性があるが，小片のため断定はできない。

73～97は，沈線で文様を施した口縁部である。ほとんどの口縁部は，外反気味に直行する。口縁部の断面も無文の口縁部と同じように三角形・間延びした三角形・四角形に近いものがある。また，口縁端部は，平坦に仕上げるものがほとんどである。73は，口縁部外側に縦の粘土紐を貼り付け，平坦に押さえ付けた後に沈線を施している。また，口縁部肥厚帯にも交叉する沈線がはいる。

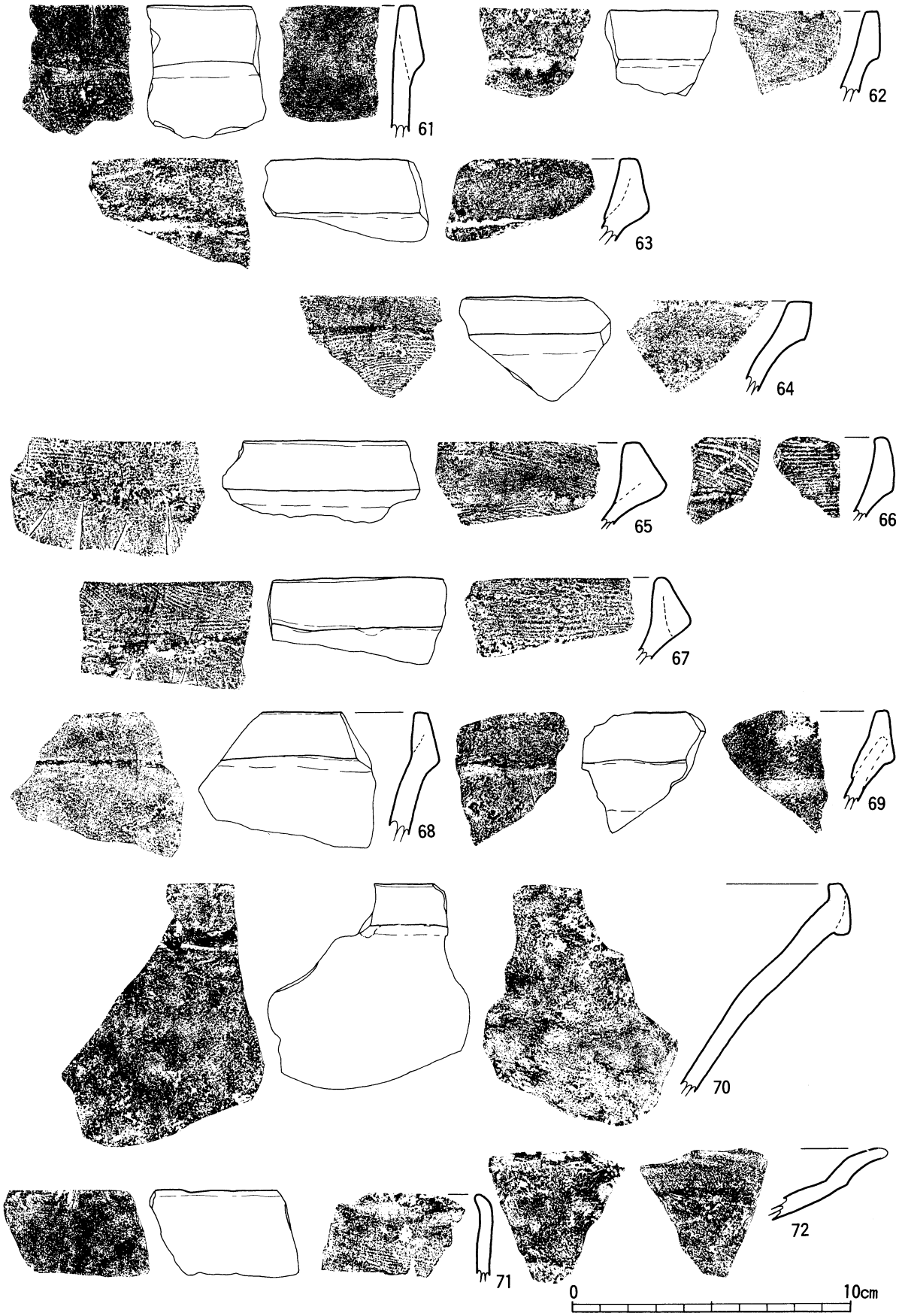




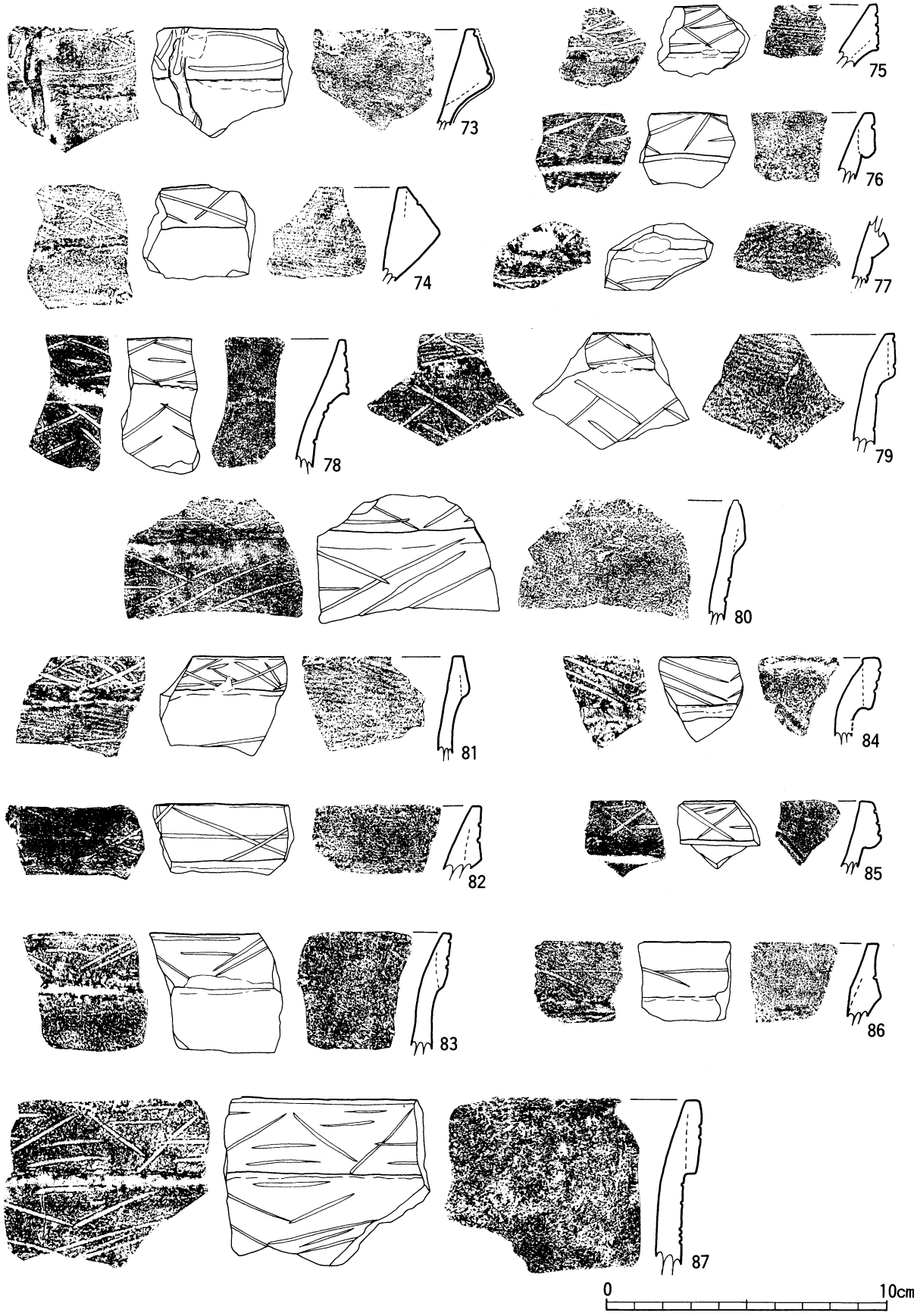
第16図　調査区出土遺物(1)



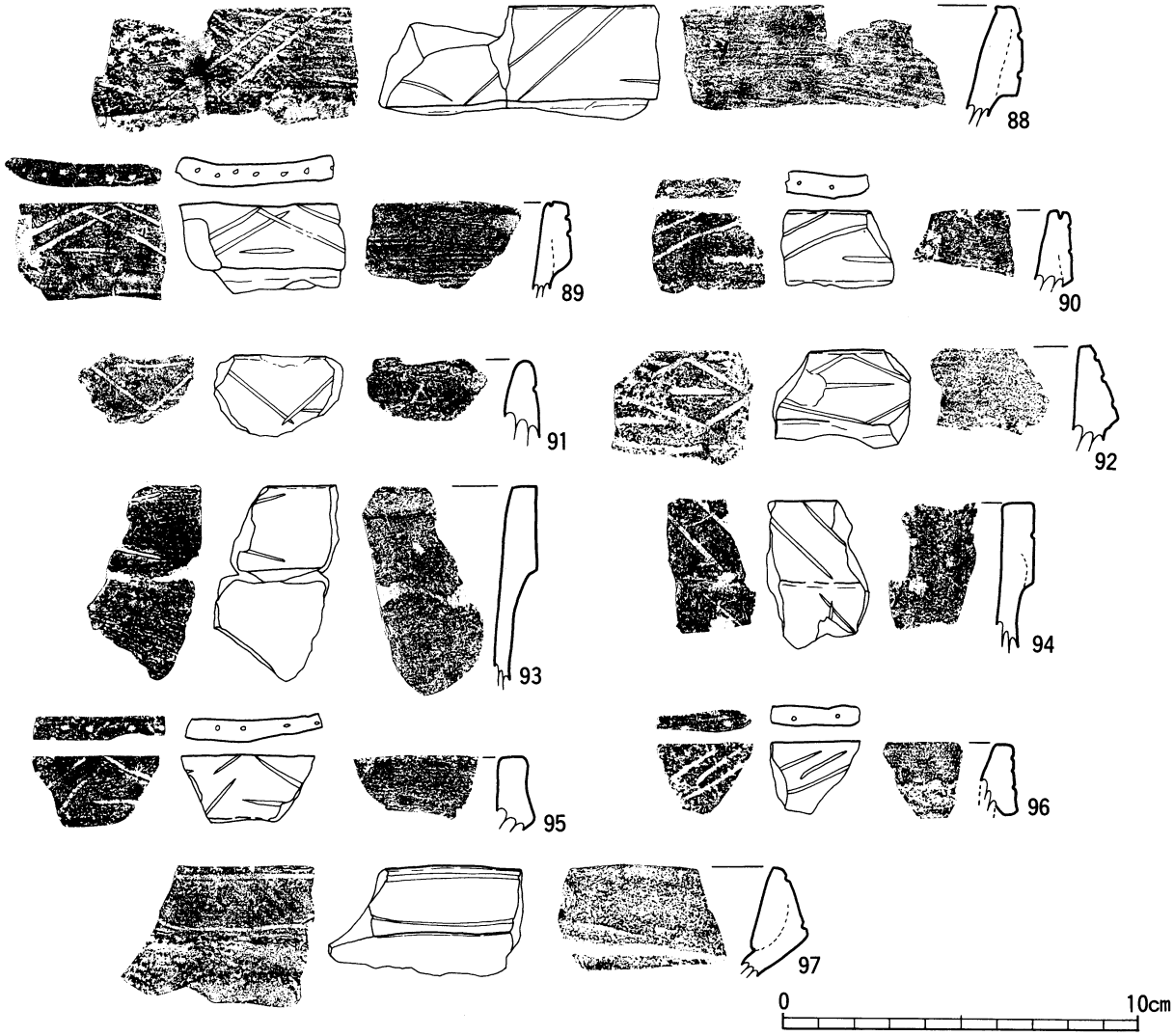
第17図　調査区出土遺物(2)



第18図　調査区出土遺物(3)



第19図　調査区出土遺物(4)



第20図　調査区出土遺物(5)

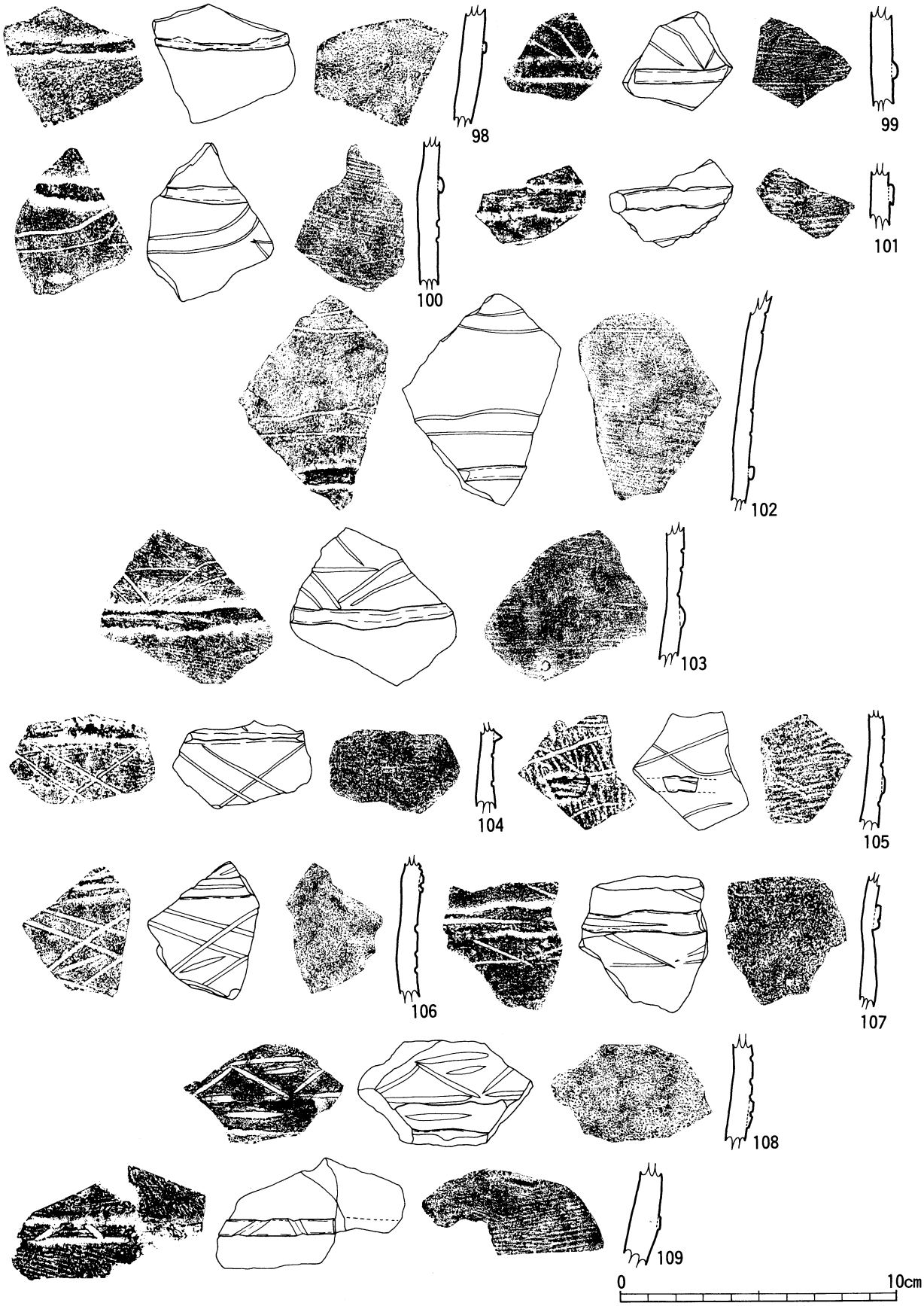
89・90・95・96は平坦な口唇部に刺突を施す。文様は基本的に直線的な沈線を施すが，73・97のように曲線的な沈線も見受けられる。

98～113は，突帯部分である。突帯上に沈線を施さないもの（98～104），突帯上に横位の沈線を施すもの（105～109），突帯上に斜位の沈線を施すもの（108～113）がある。沈線を施すものは突帯を貼り付けたあと，平坦に押さえ付けている。104は，断面が細い三角形となる。

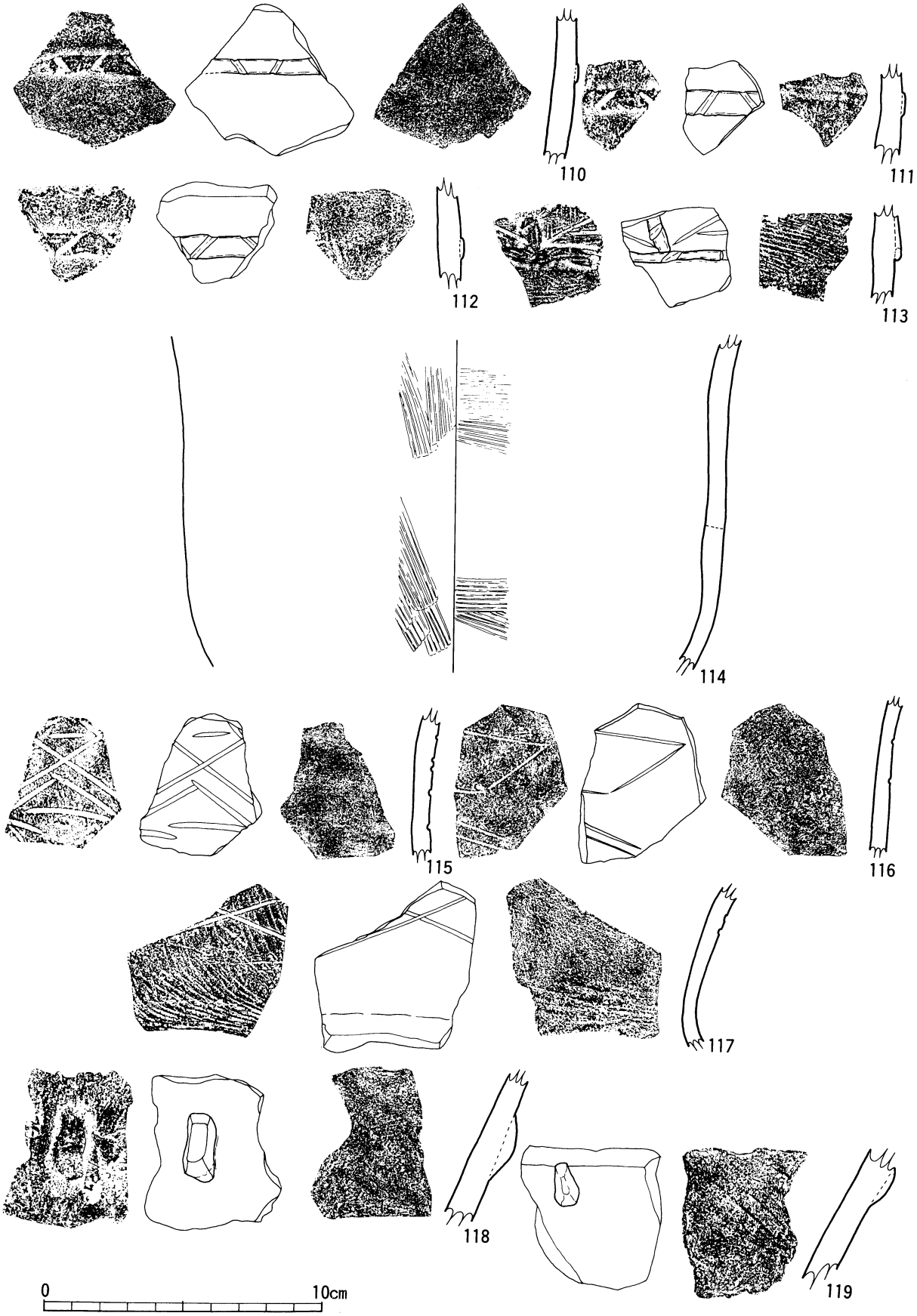
114は，無文の胴部片で，胴部が張らずに頸部へと続く。最大径が，20.2cmである。外側の壁面には炭化物が多く付着する。

115～117は，沈線をもつ胴部破片である。118～121は，胴下部に瘤状の突起をもつものである。119と120は，同一固体と思われる。121は胴下部に一条の突帯を横位にめぐらせ，その上から縦の突帯を脚部方向に貼り付けているが，その終点は不明である。

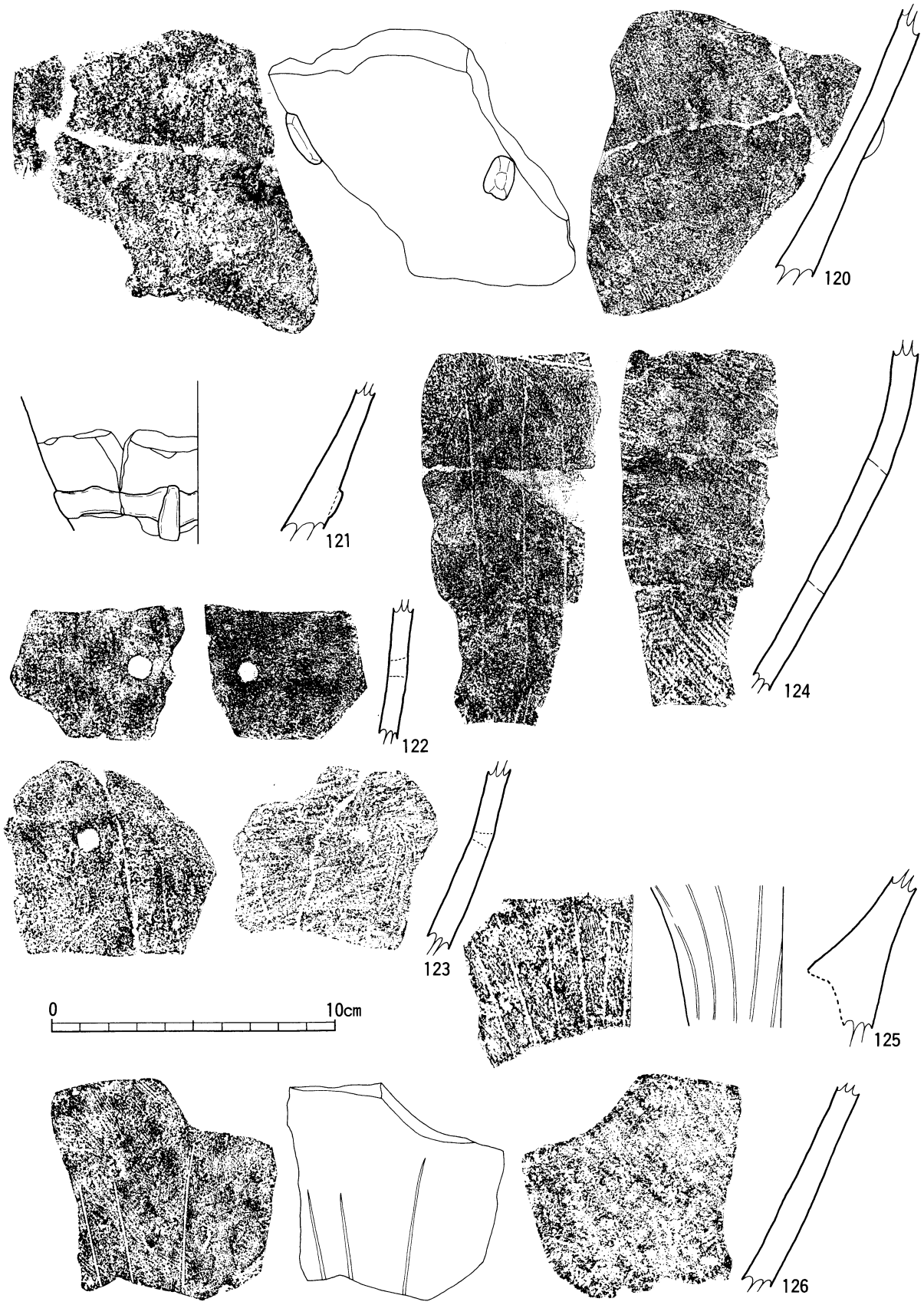
122・123は，胴部の外側から内側にかけて穿孔を施している。124～126は，胴下部に縦方向に沈線が施されている。124は土器片の上部には横方向の沈線が，その直下から縦方向の沈線が施されている。



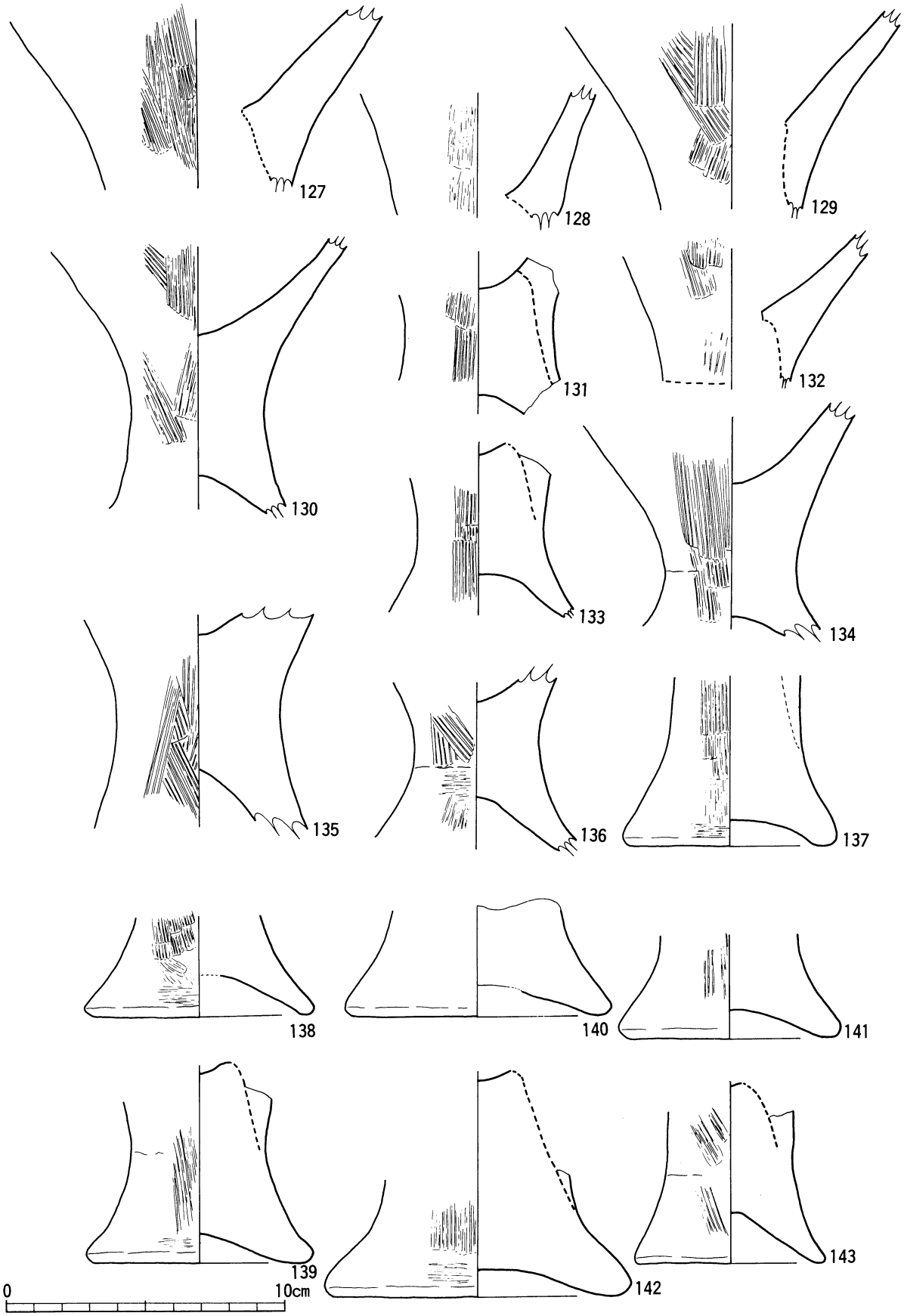
第21図　調査区出土遺物(6)



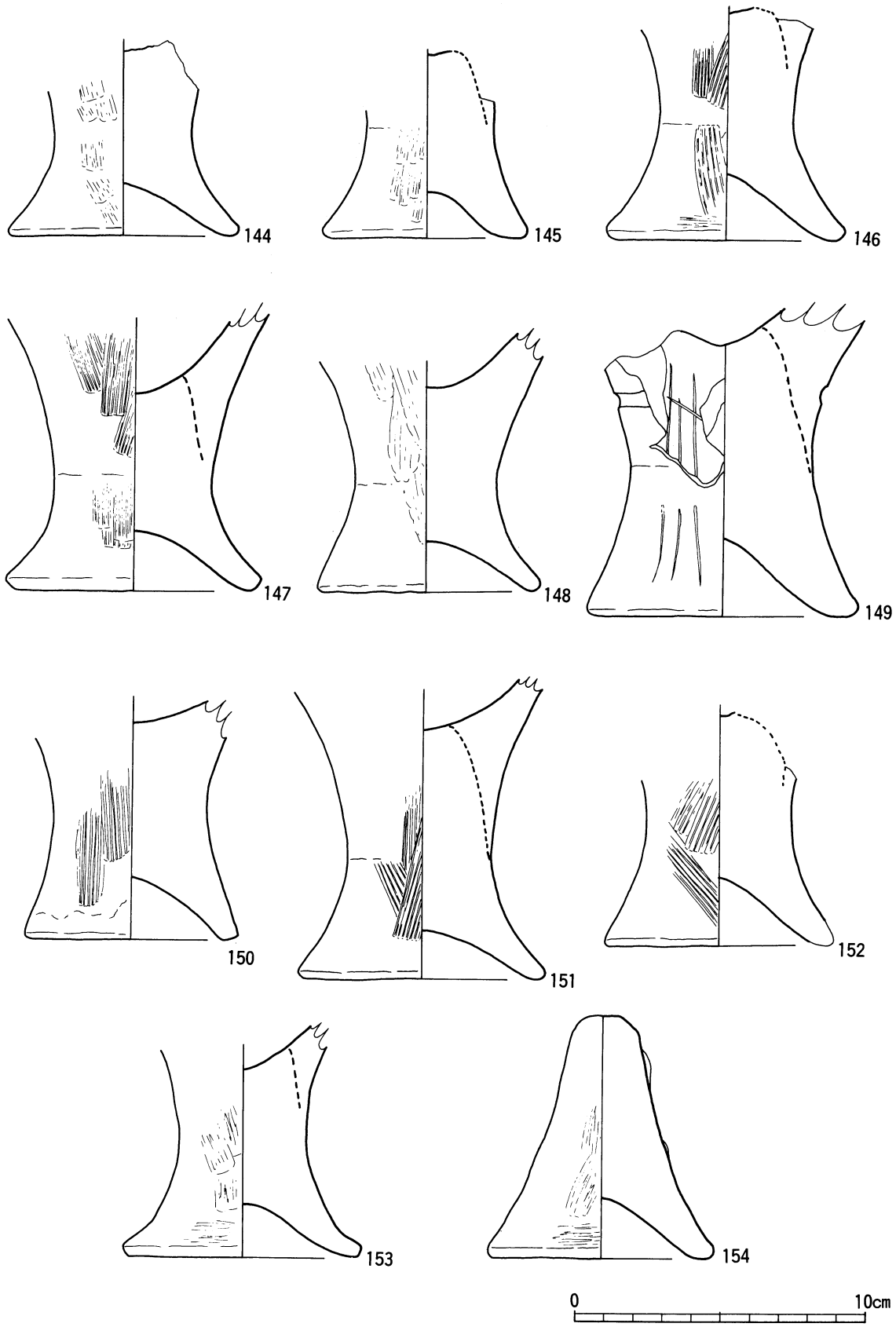
第22図　調査区出土遺物(7)



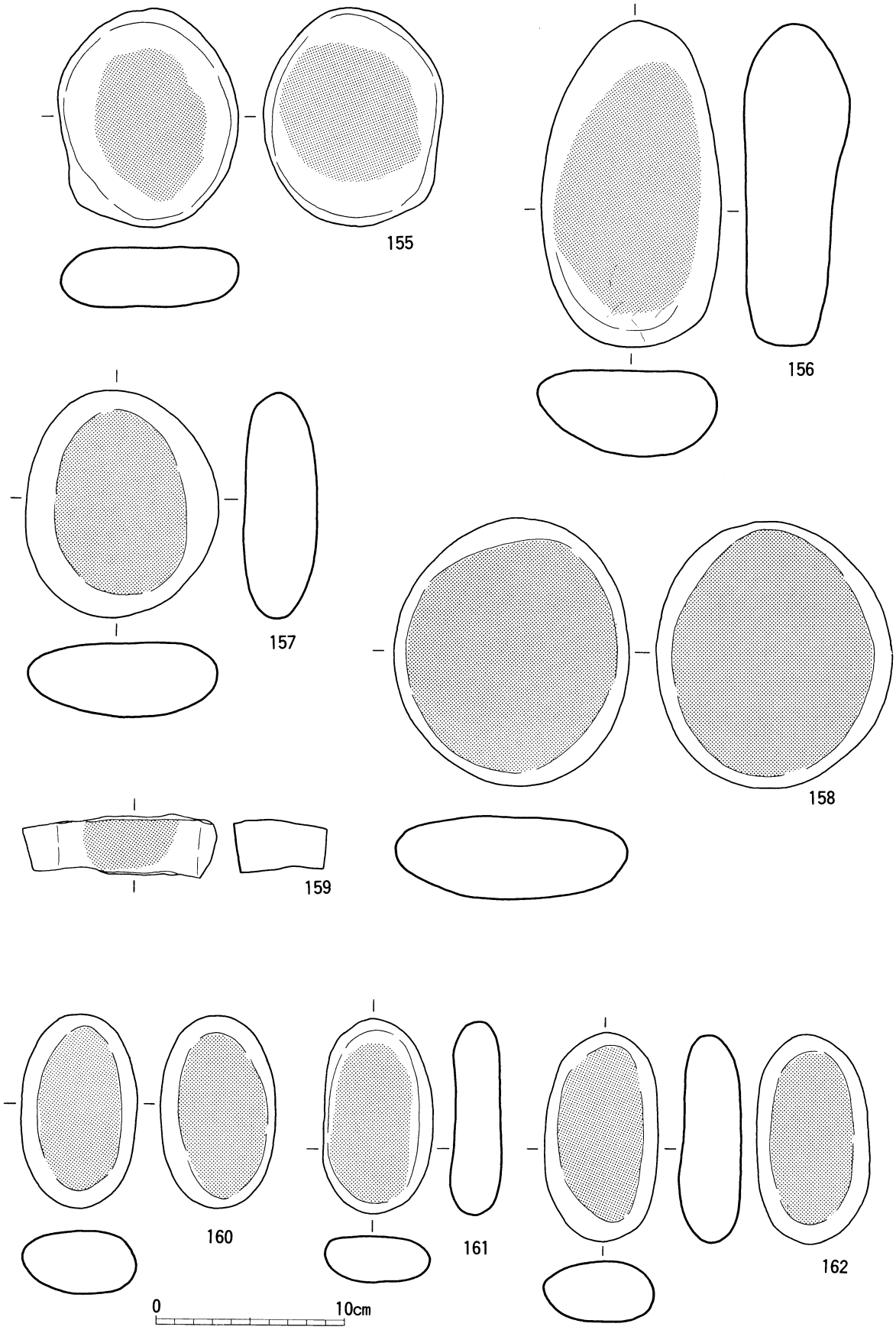
第23図　調査区出土遺物(8)



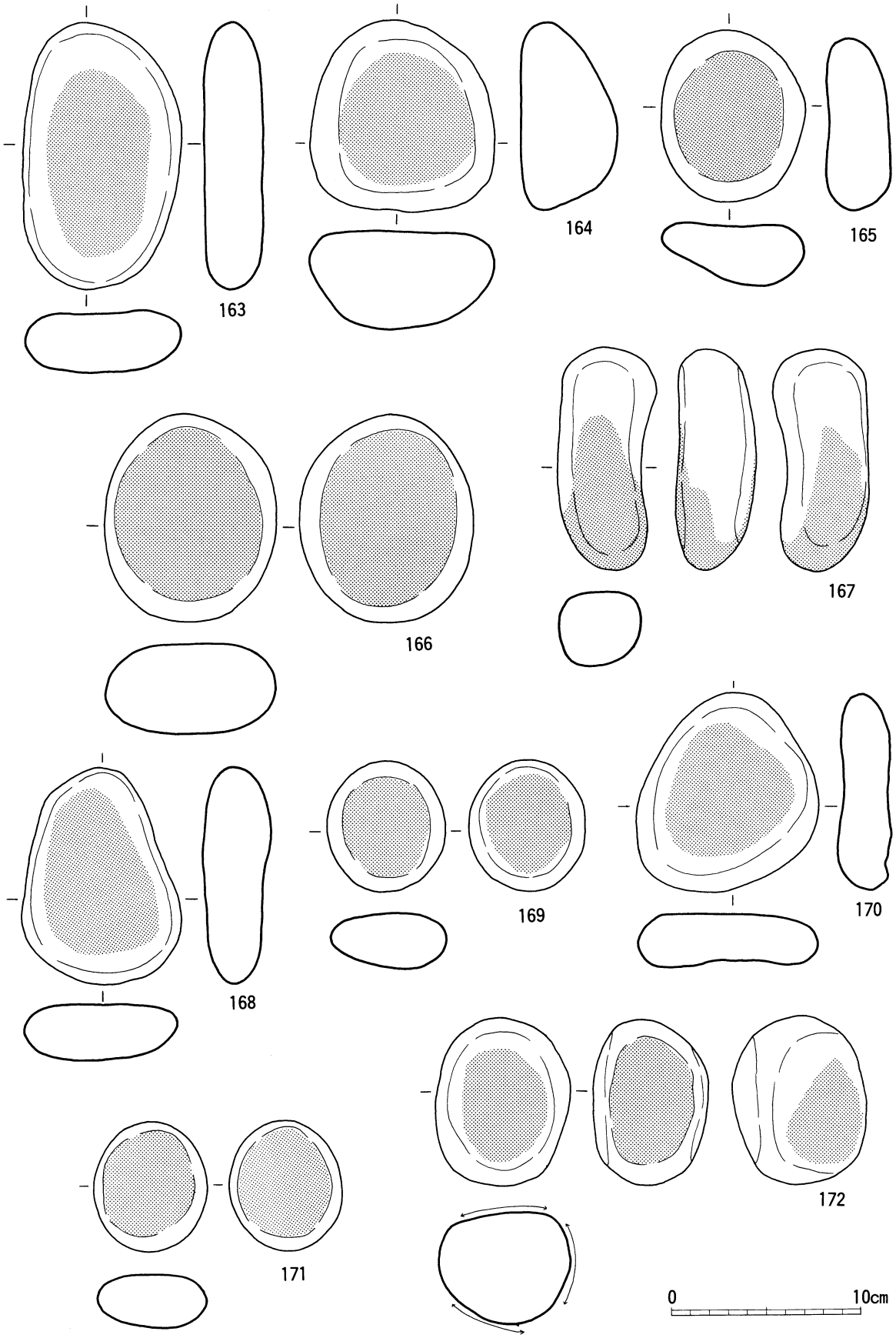
第24図　調査区出土遺物(9)



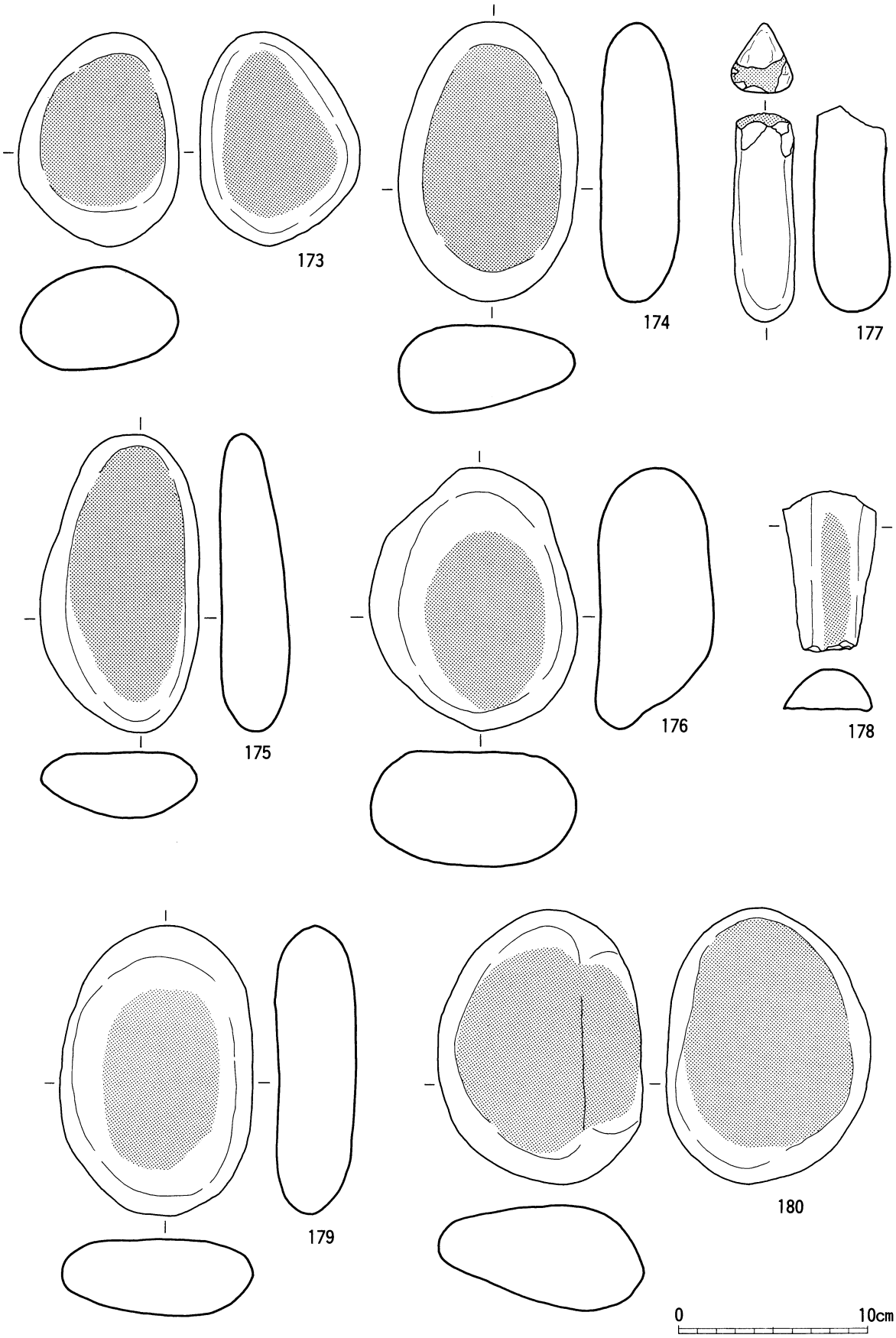
第25図　調査区出土遺物(10)



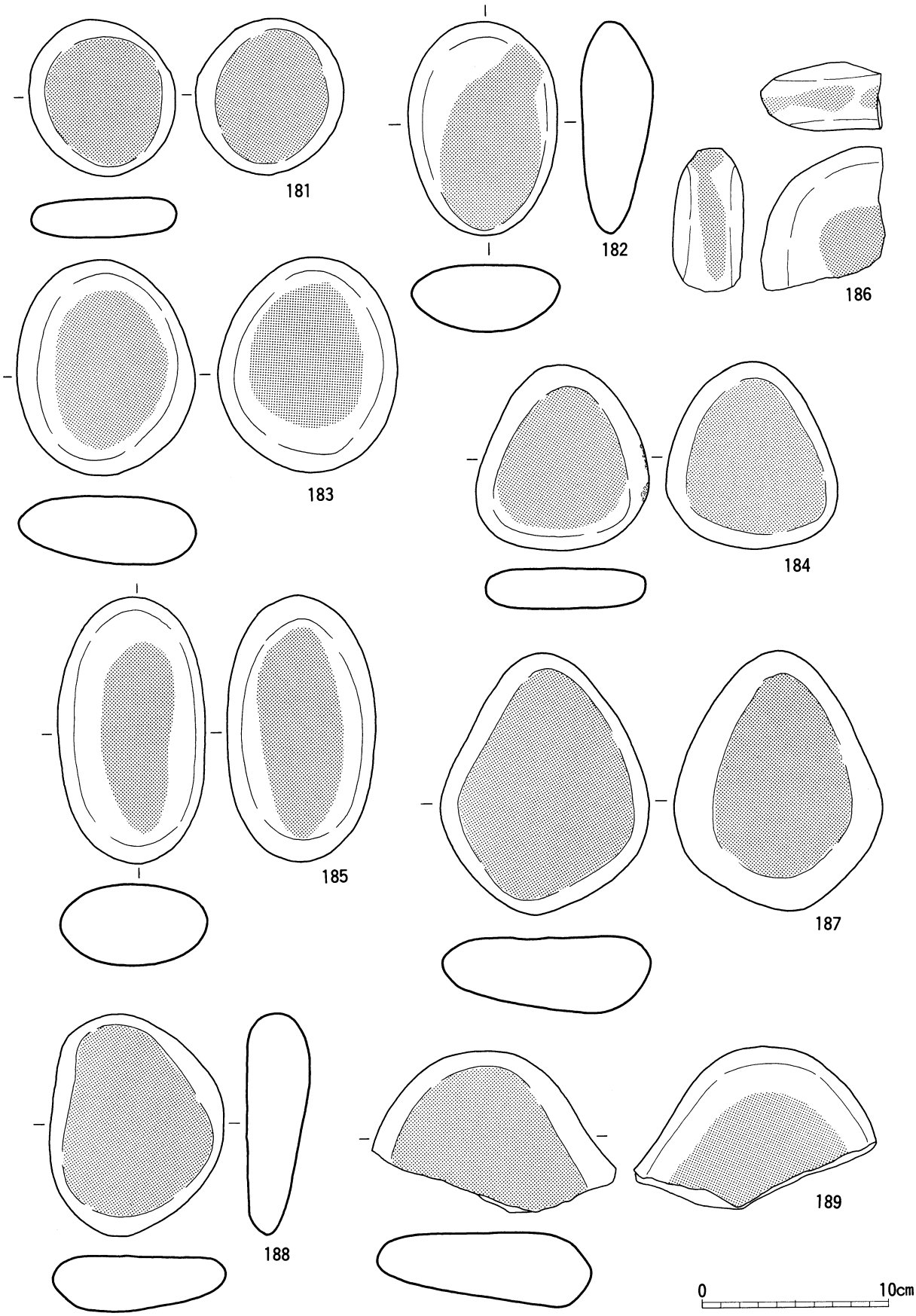
第26図　調査区出土遺物(11)



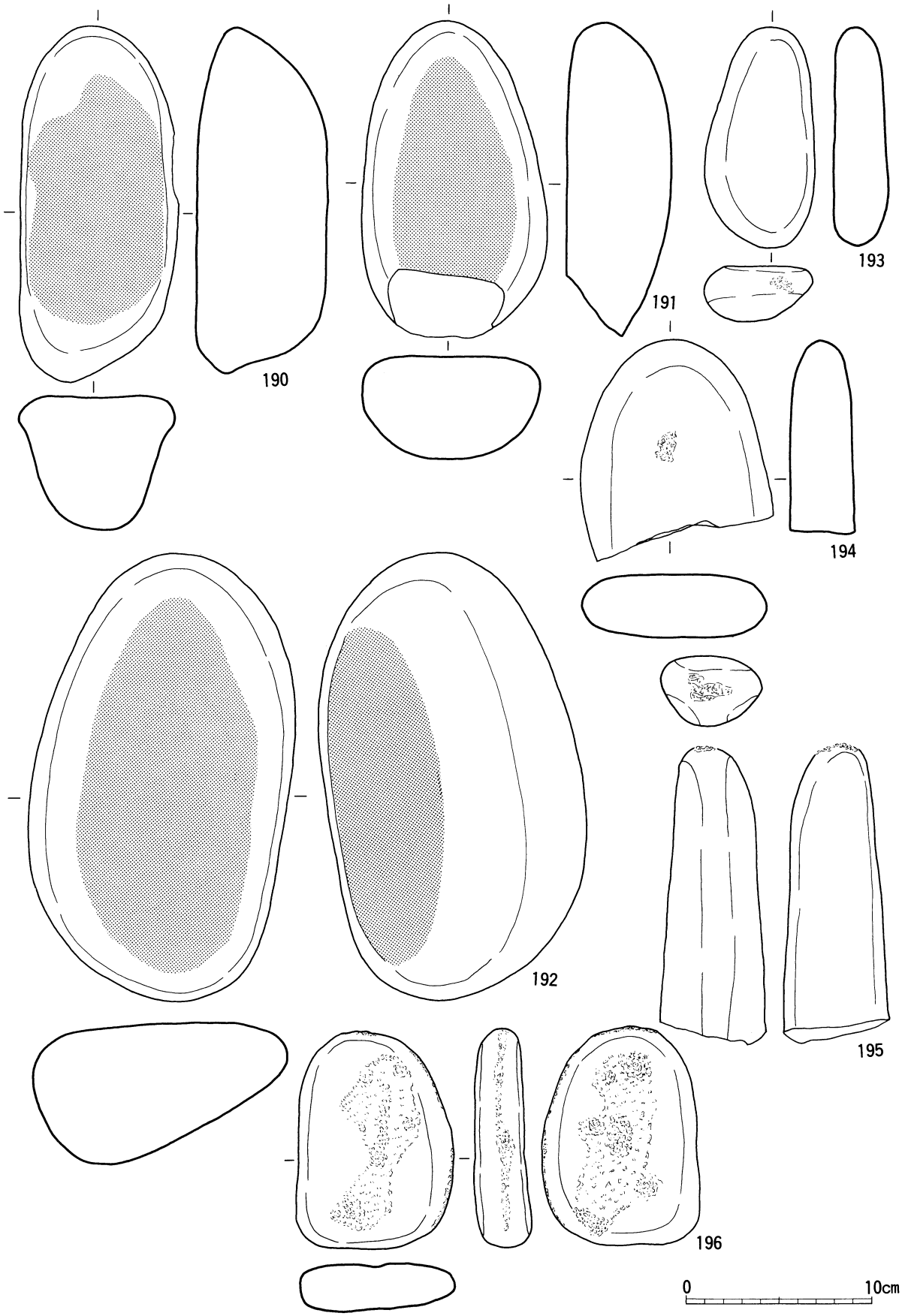
第27図　調査区出土遺物(12)



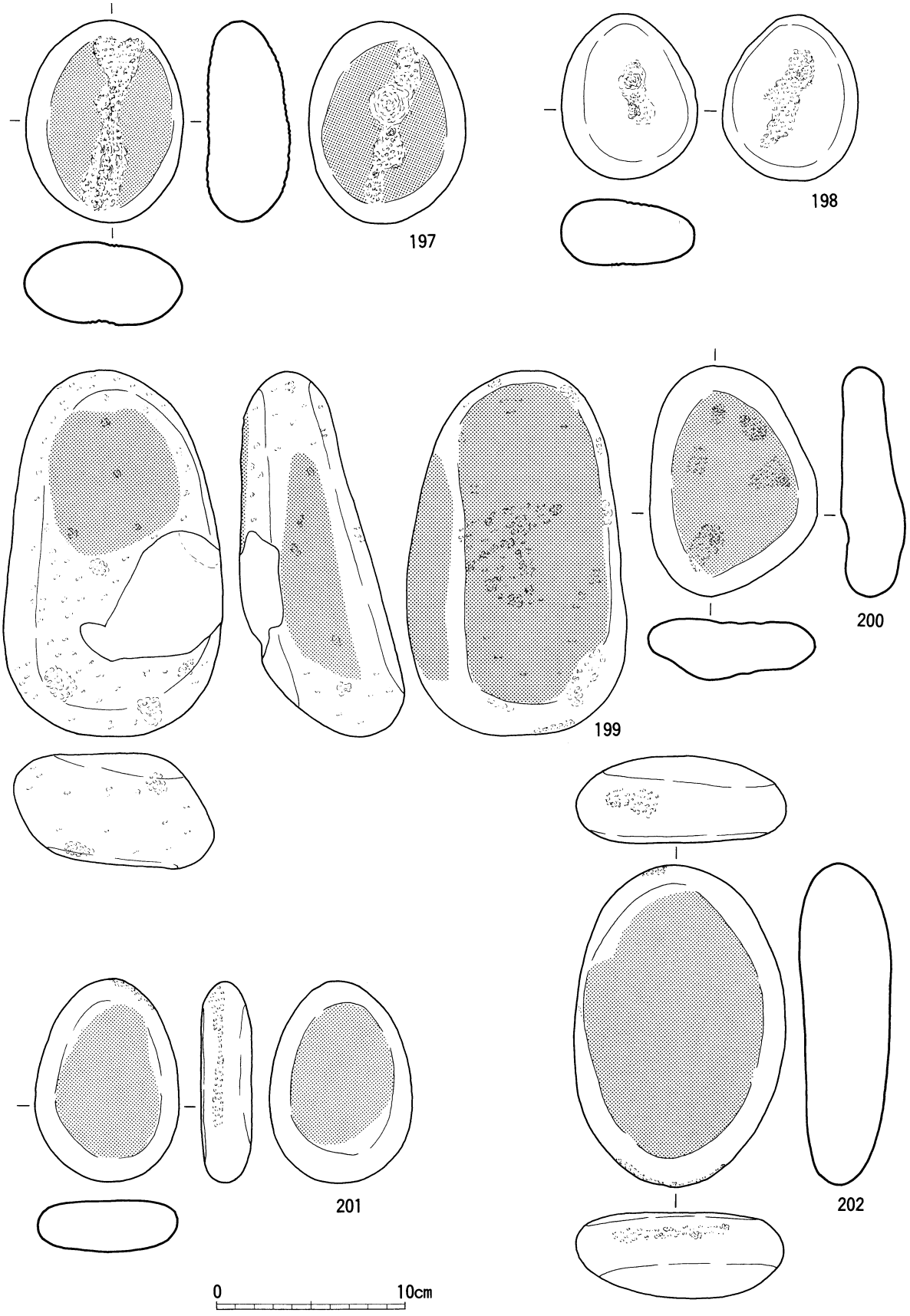
第28図　調査区出土遺物(13)



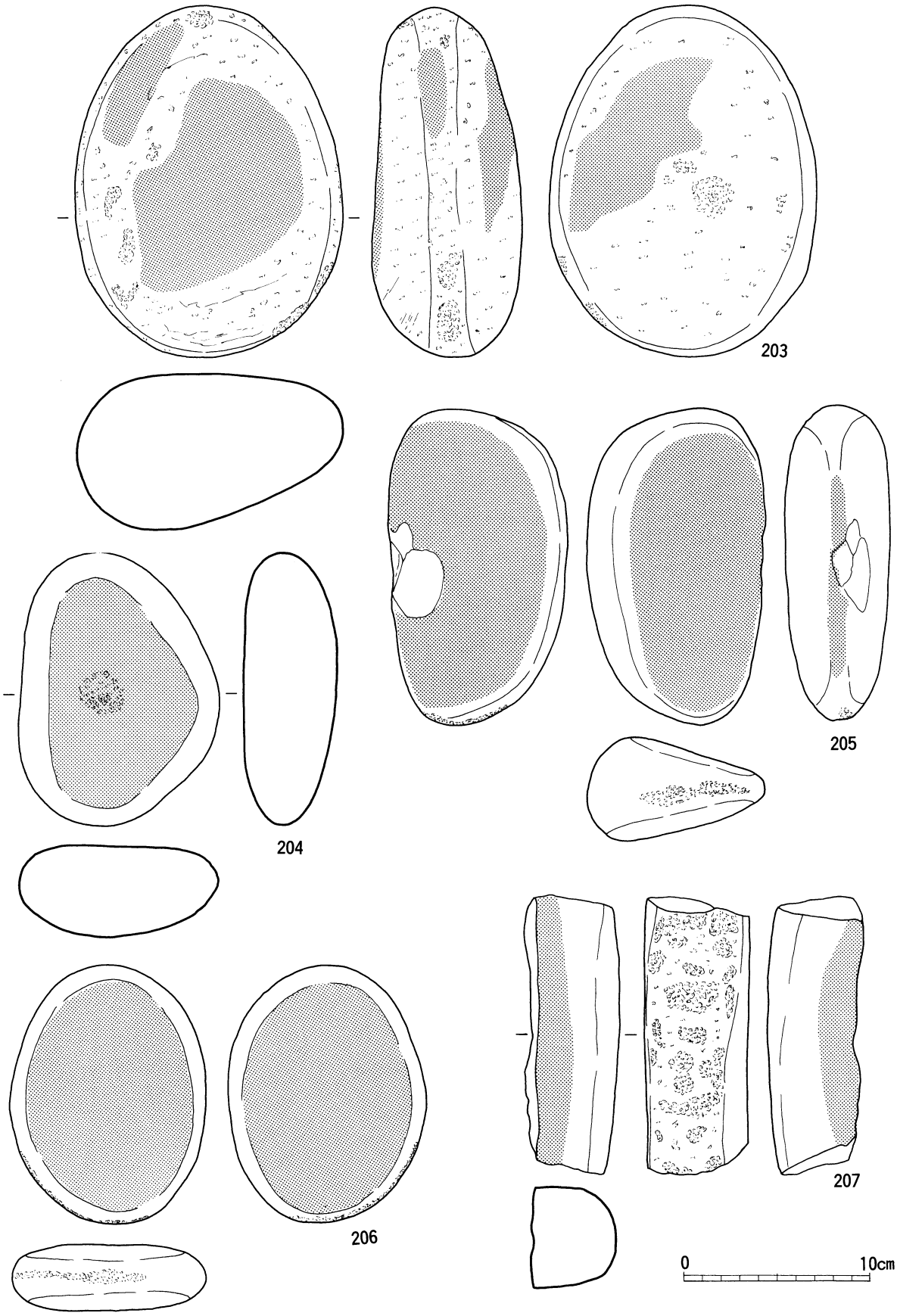
第29図　調査区出土遺物(14)



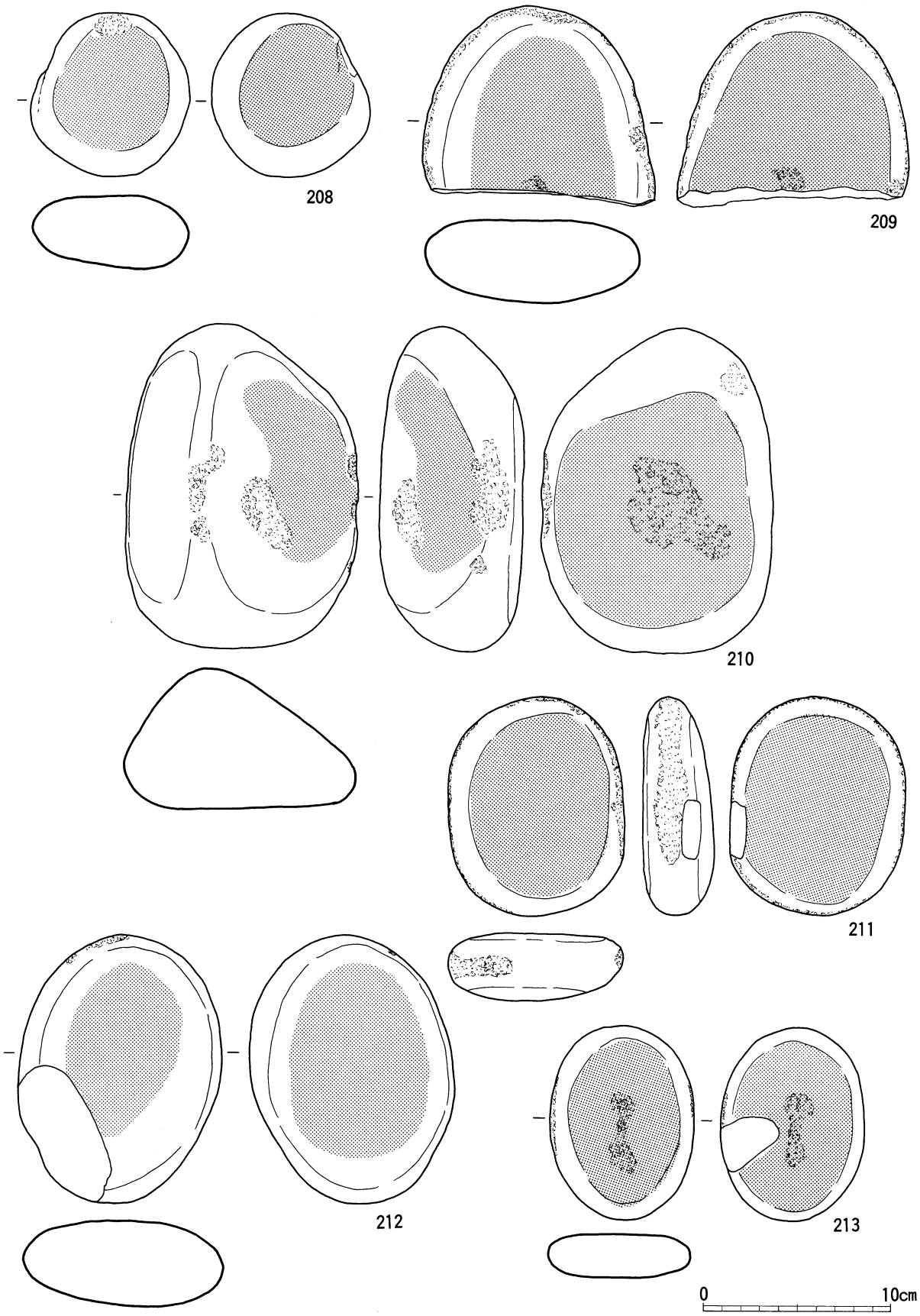
第30図　調査区出土遺物(15)



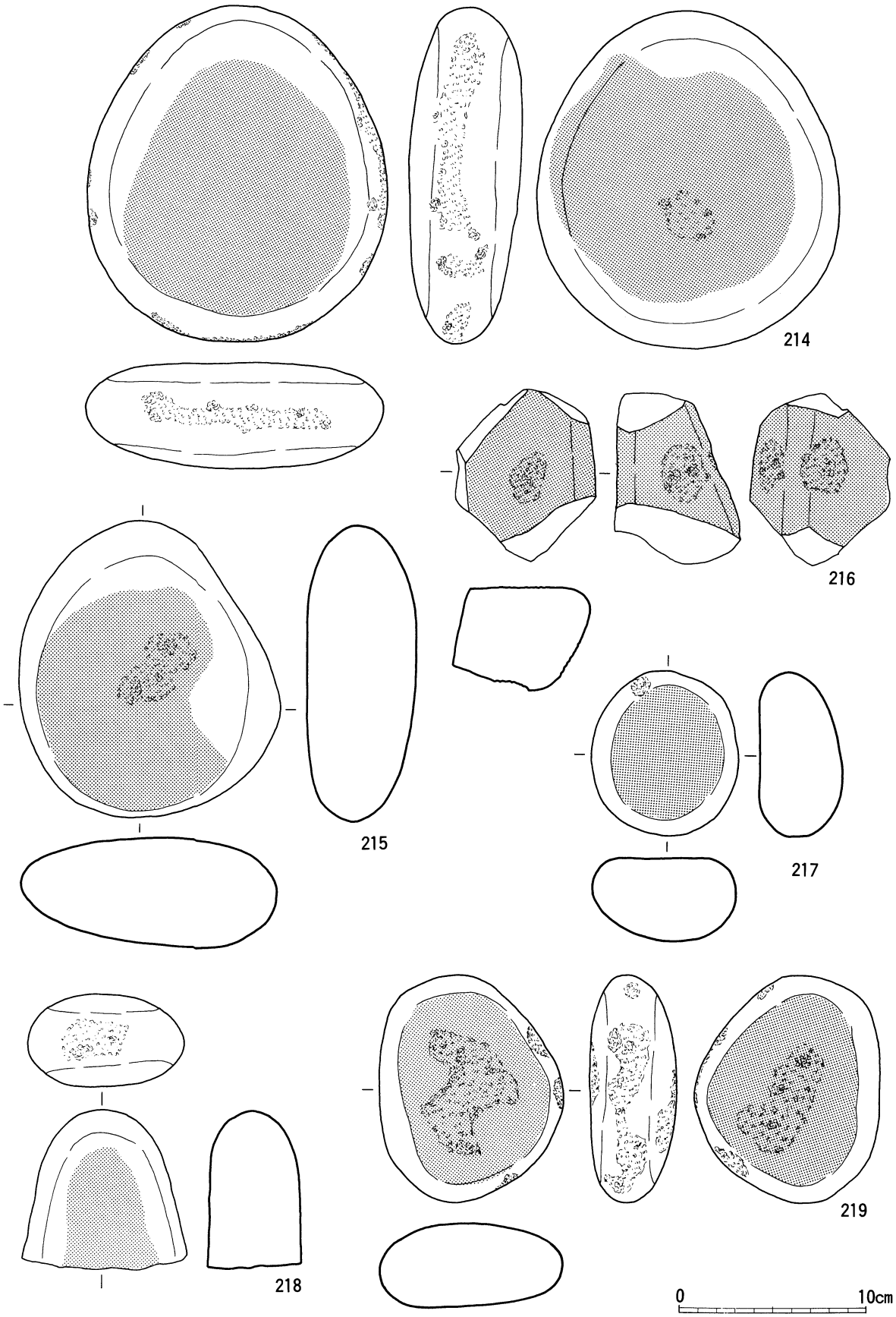
第31図　調査区出土遺物(16)



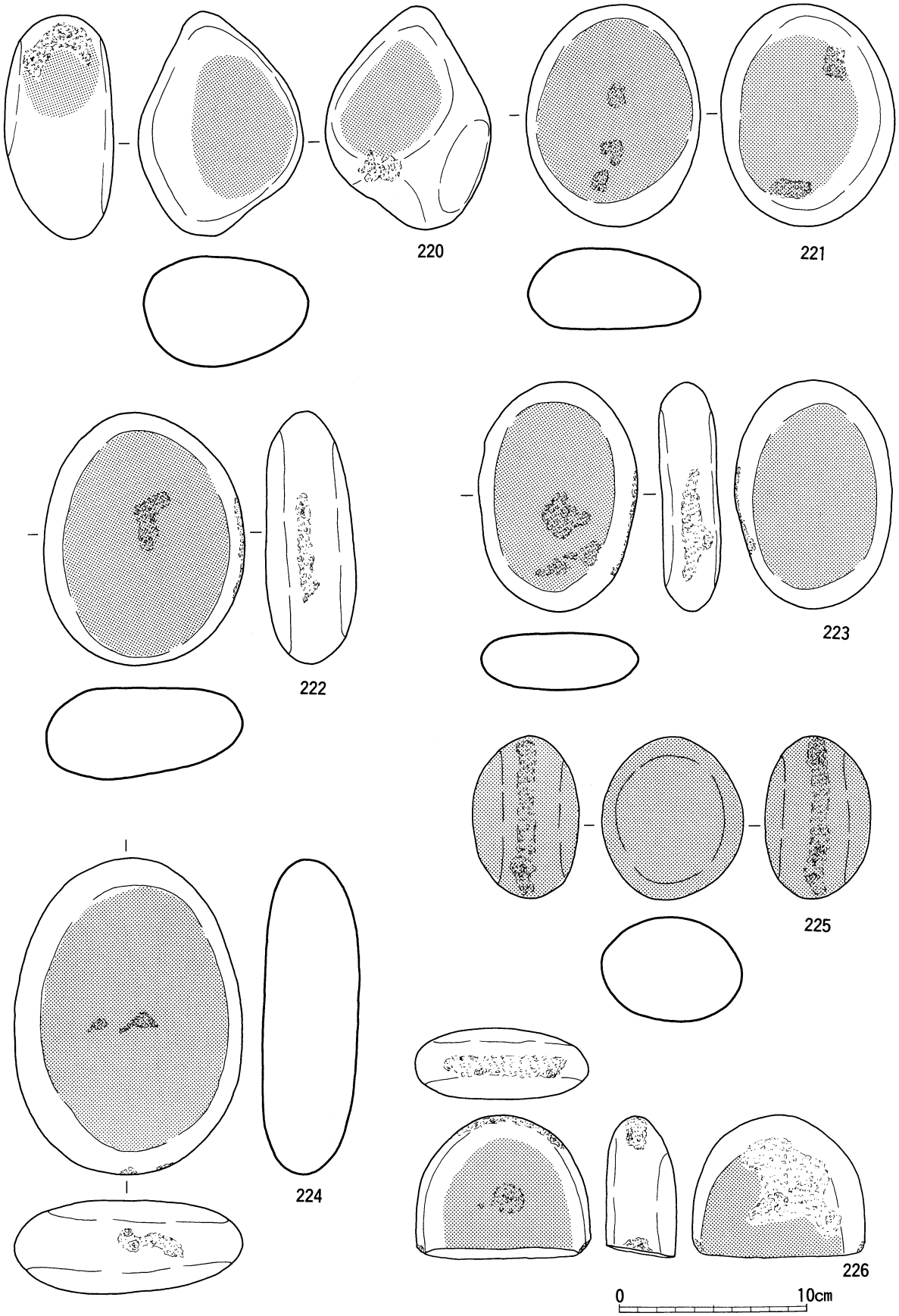
第32図　調査区出土遺物(17)



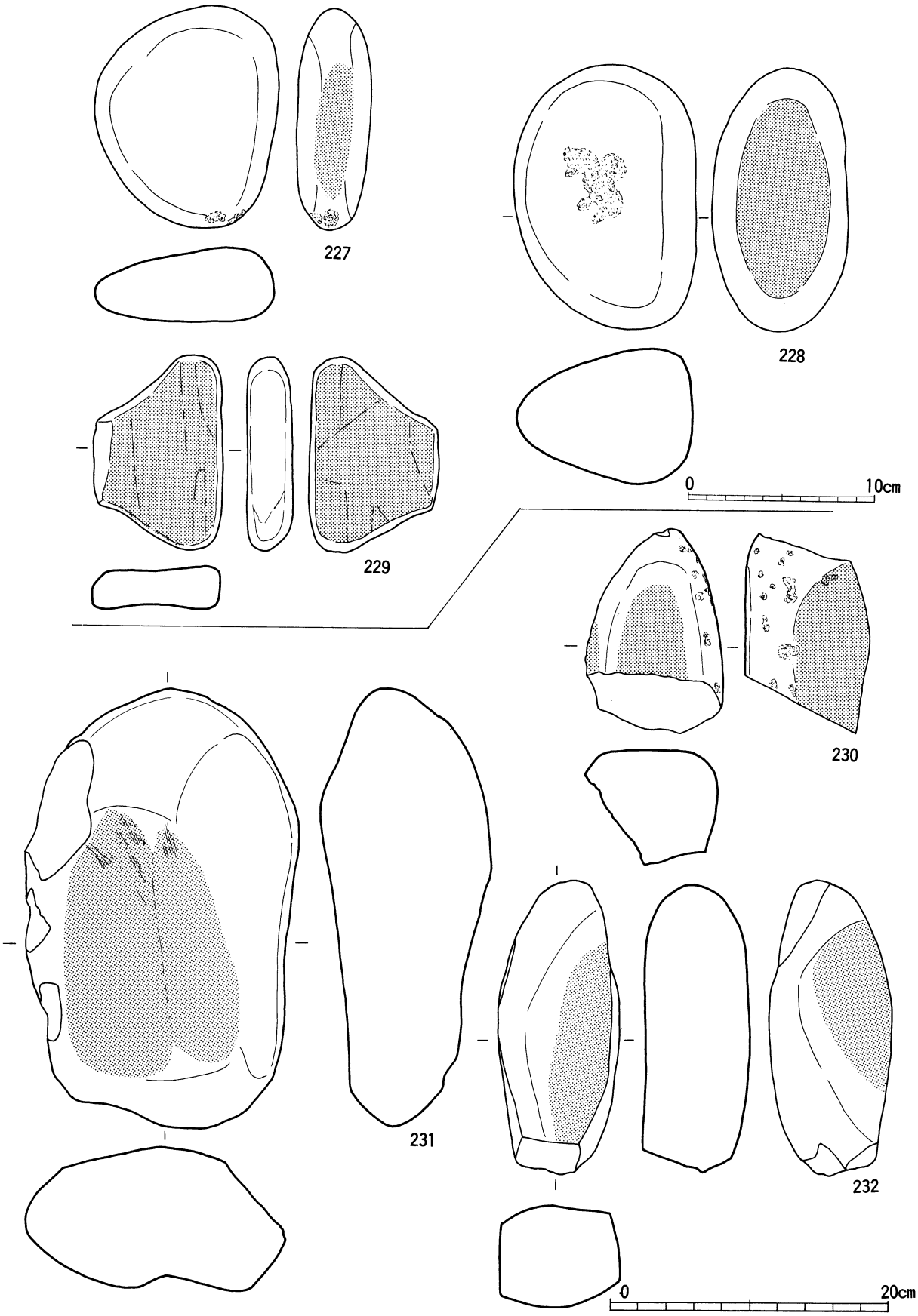
第33図　調査区出土遺物(18)



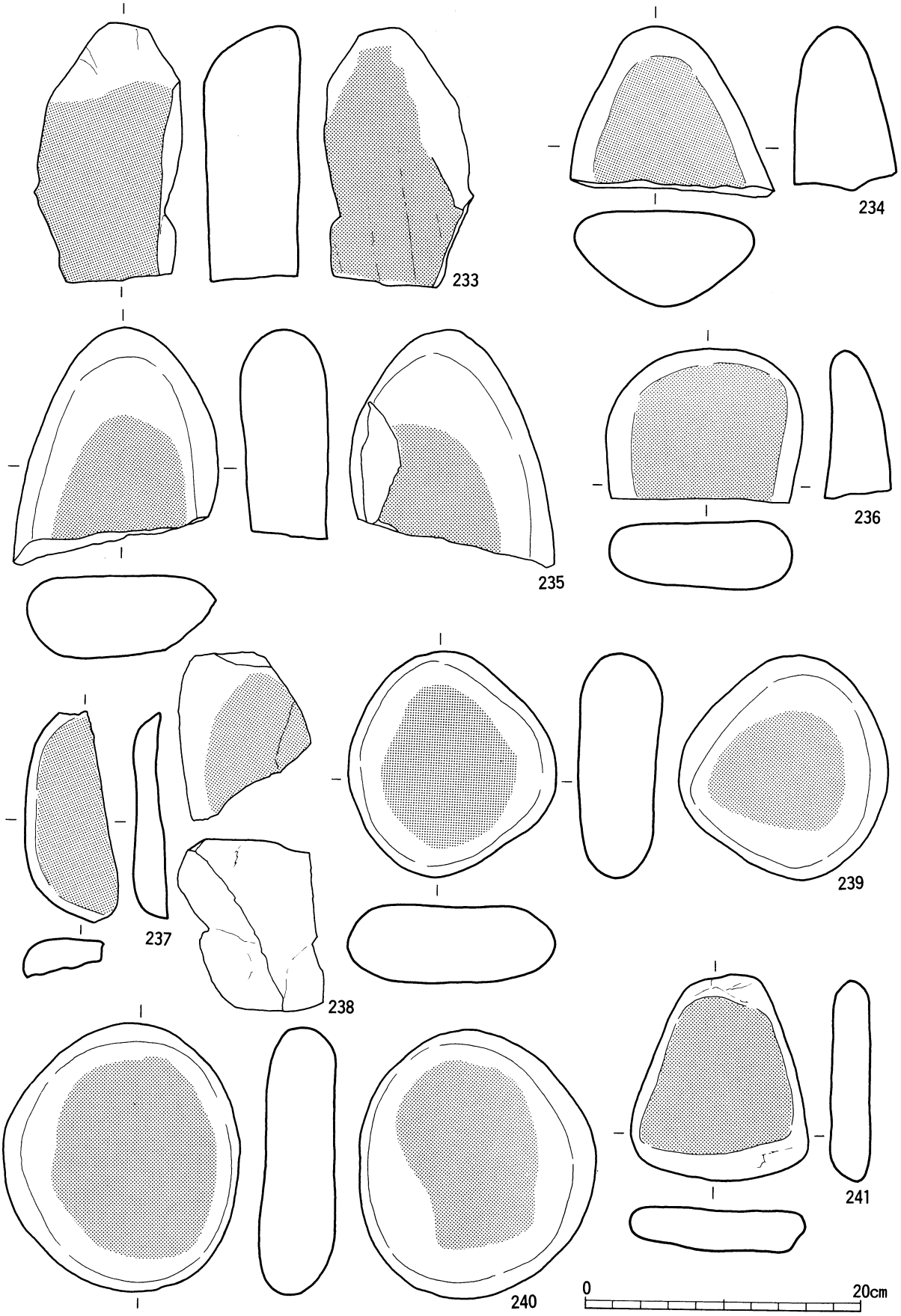
第34図　調査区出土遺物(19)



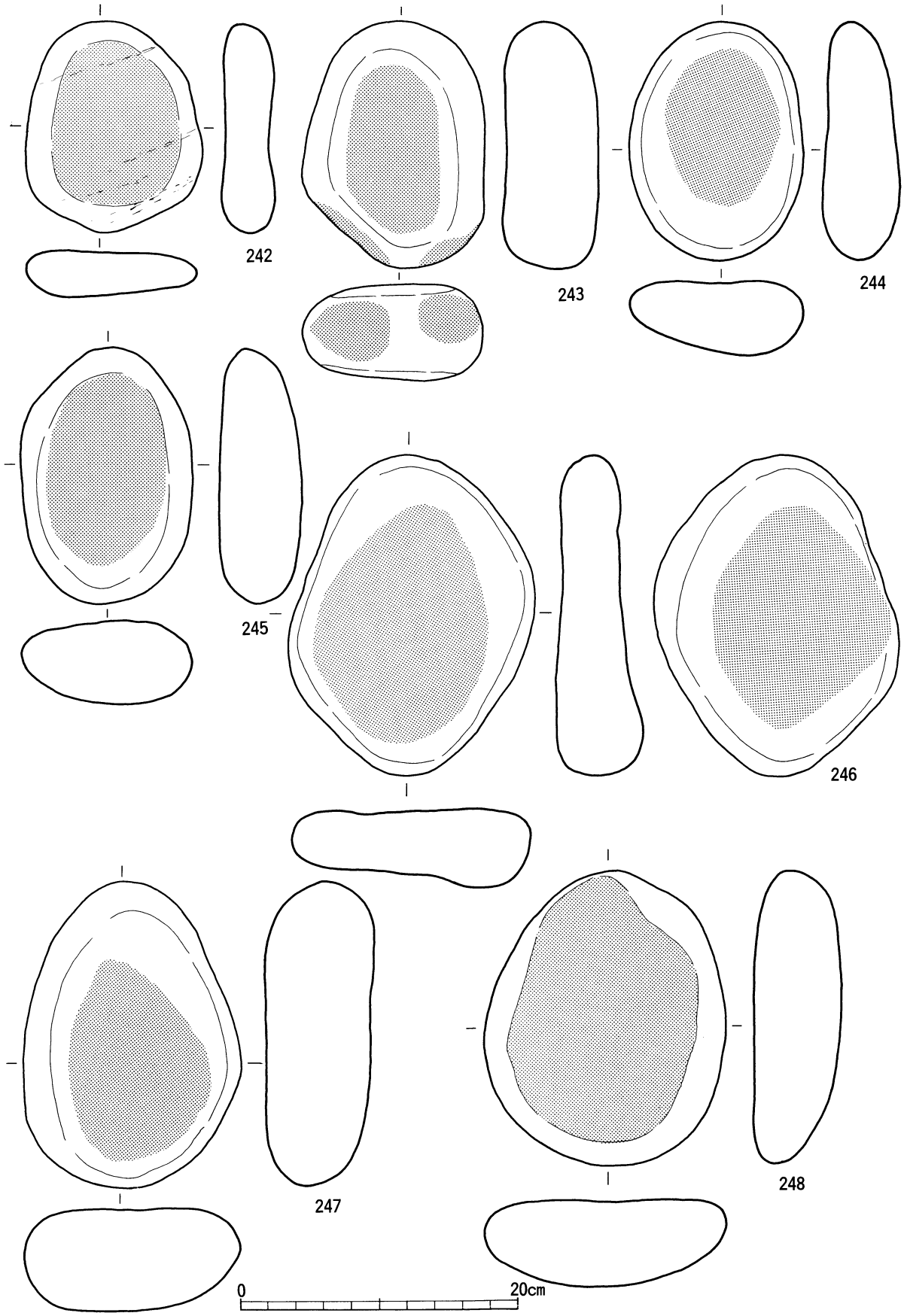
第35図　調査区出土遺物(20)



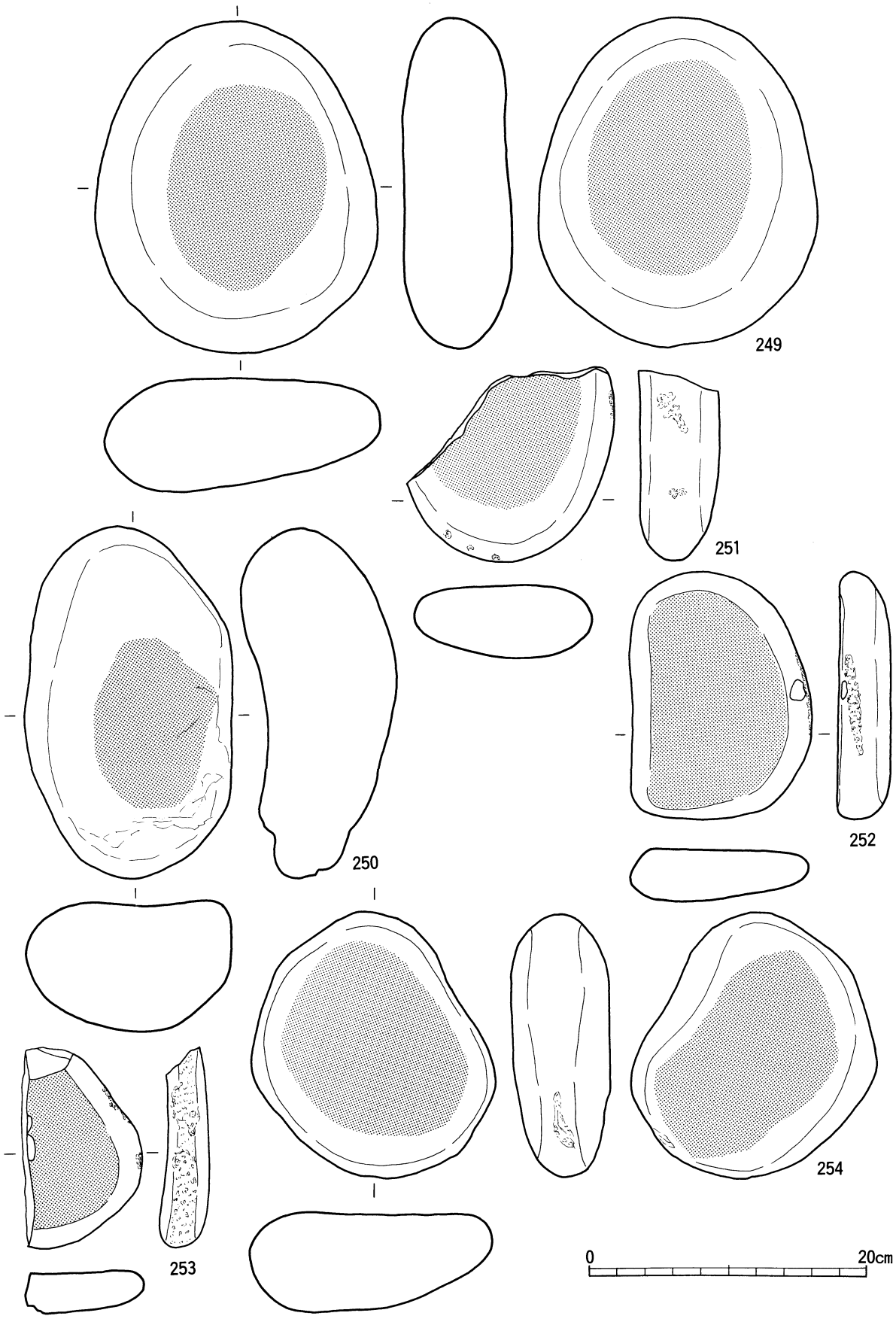
第36図　調査区出土遺物(21)



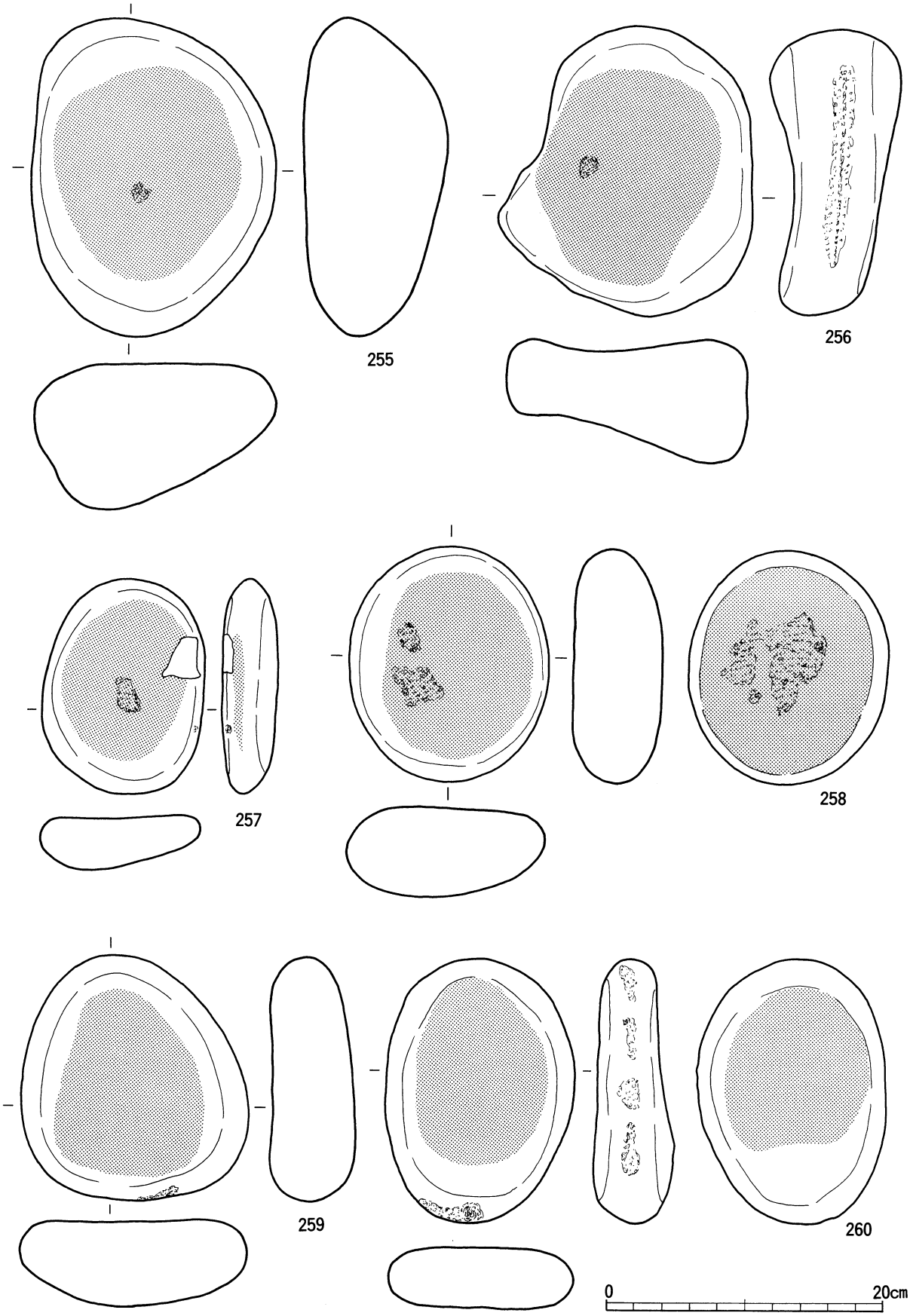
第37図　調査区出土遺物(22)



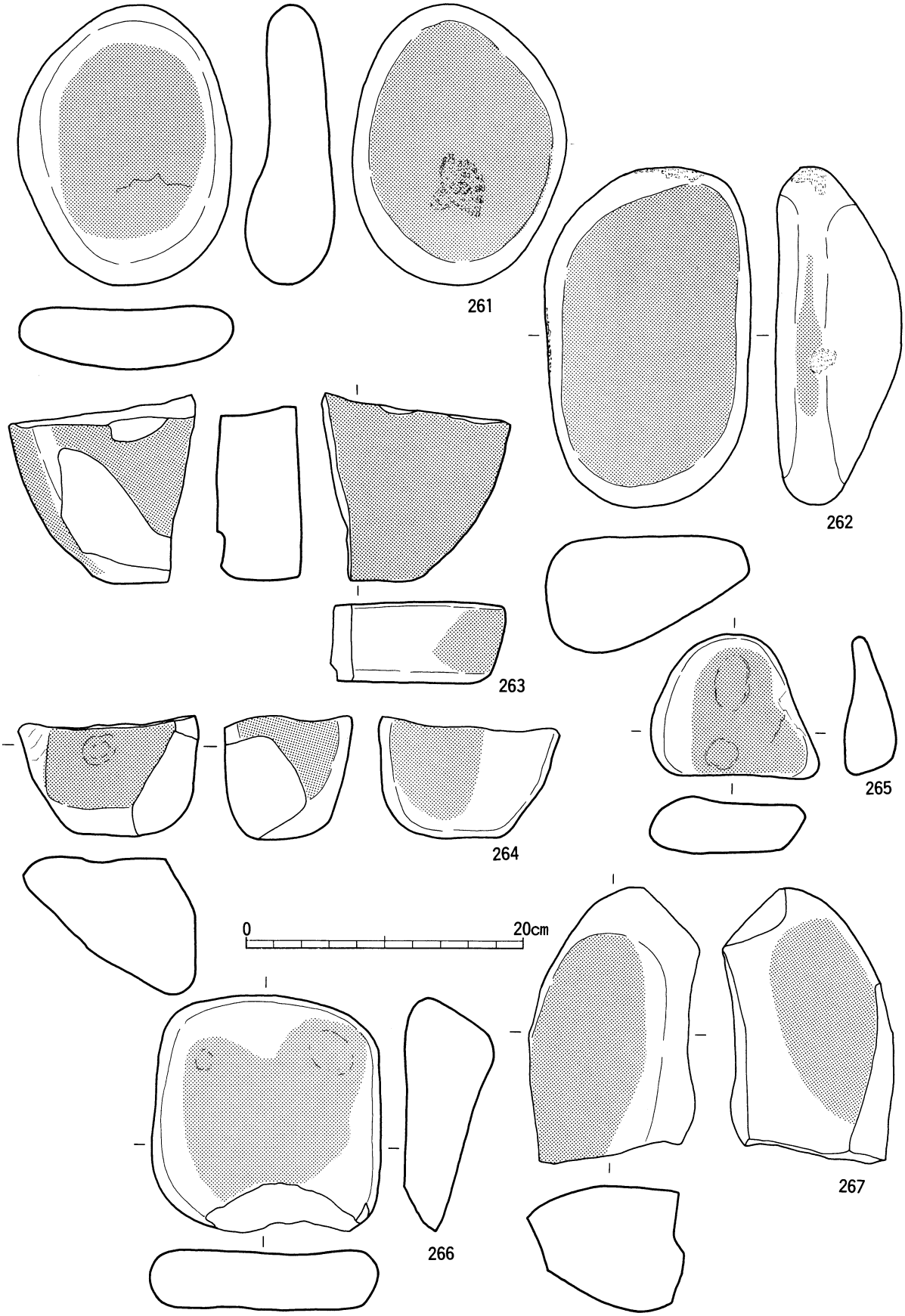
第38図　調査区出土遺物(23)



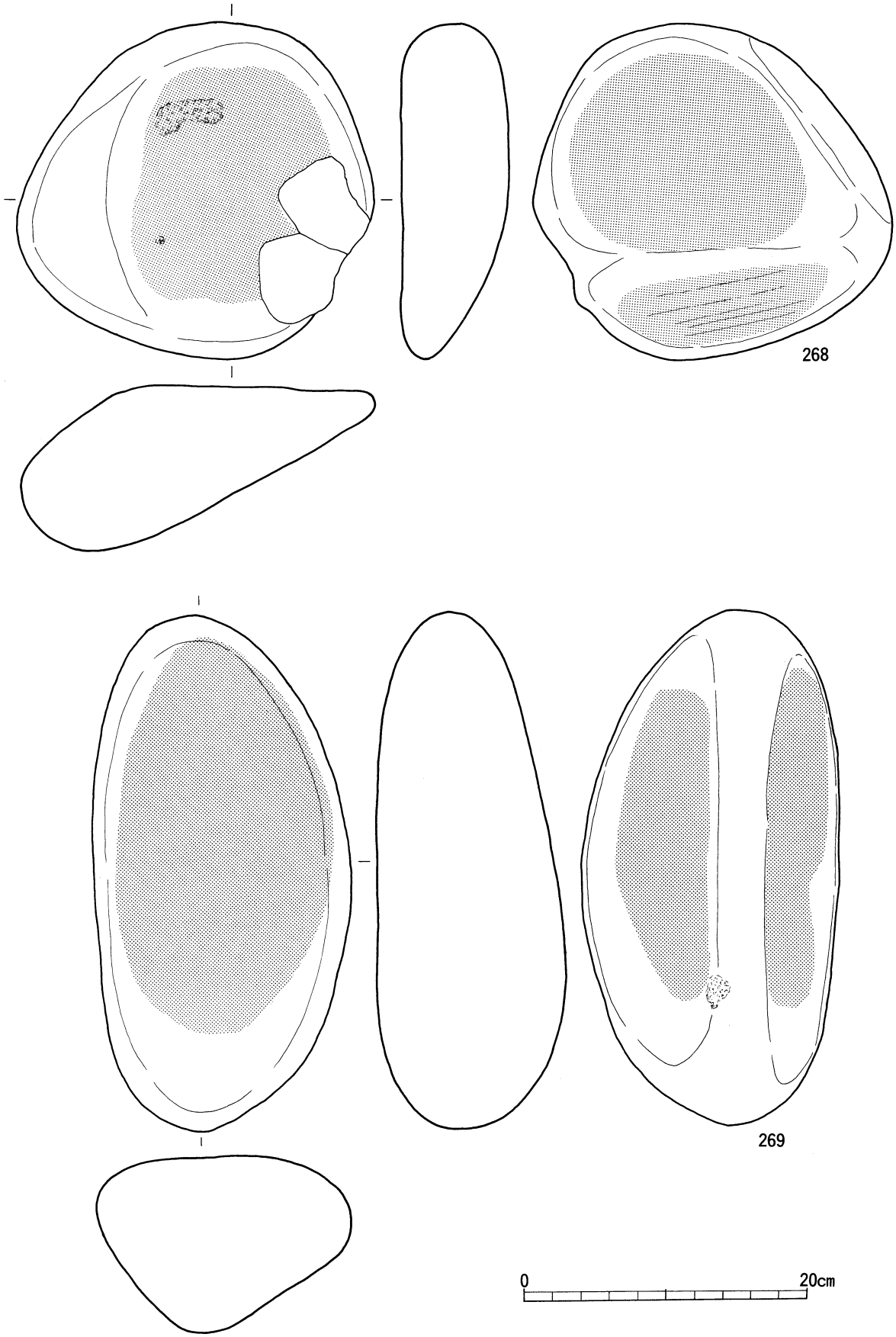
第39図　調査区出土遺物(24)



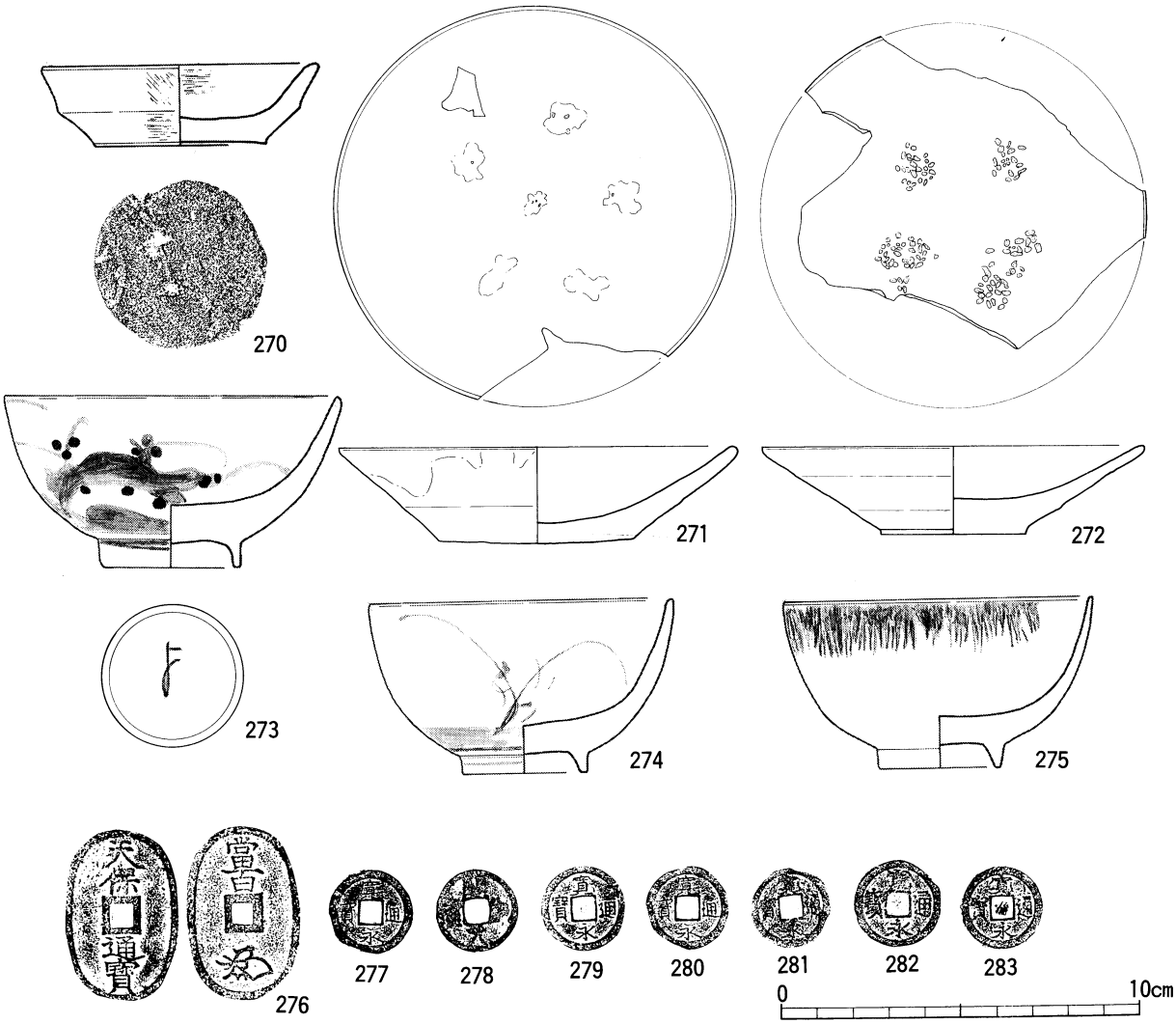
第40図　調査区出土遺物(25)



第41図　調査区出土遺物(26)



第42図　調査区出土遺物(27)



第43図　調査区出土遺物(28)

127～154は，胴下部から脚部にかけての遺物である。127～129・132は，胴下部で脚部との接合痕が明瞭に残る。131・133・137・139・142・143・145～147・149・151・153は，胴部との接合痕が残る。149は胴部と脚部を接合する際の製作過程がよくわかり，脚末端部近くまで縦方向の沈線がはいる。また，脚上部に一条の溝がめぐるが，焼成後に施されたものである。154は，胴部と接合する際の粘土がほとんど剝落した状態と思われる。138は表層出土で，その製作過程に違いがある。また，脚部はすべて上げ底であるが，浅いもの（137～142）と深いもの（143～154）がある。

【石器】（第26～42図）

155～192は，磨石である。172は，三面を使用している。177は，棒状の石の破損面を磨面として使用する。181は，よく使用されている。

193～195は，敲打痕のある遺物である。196～198は，凹石である。197は，両面に磨面をもつ。199～228は，磨面と敲打痕の両方があるものである。そのほとんどの断面は楕円形かそれに近いものであるが，203・205・210・227・228のように断面が三角形のものもある。229～231は，砥石である。229は斜位の磨溝があり，230は破損しているが3面を使用し，231は斜位の擦痕がある。

232～269は，石皿である。欠損したものは別にして，239・240のように小振りのものが多い。

233～250は，一面もしくは二面に磨面だけあるものである。243は，側縁部を磨石としても使用している。251～254・256・259・260は側縁部に敲打痕のあるものである。262の側縁部には，磨面と敲打痕が残る。268・269は石皿と砥石の機能をもったものである。

なお，磨面はスクリーントーンで表してある。

【その他の遺物】（第43図）

270～283は，すべて表層出土である。270は灯明皿で，口縁部には煤が多く付着している。271は釉が口縁部外側に滴れ，272は砂目が顕著に残る。273～275は染め付けで，いずれも焼成温度が低かったためか柚がまわっていない。273の絵柄は稚拙である。271～275は，いずれも薩摩焼きで19世紀初めに比定できる。

276～283は，Ｂ－４区表層出土の天保通宝と寛永通宝である。

第６表　調査区出土土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面	内面	備考
第16図	44	Ａ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	薄手
	45	Ａ－４	Ⅱ．Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ハケ	
第17図	46	Ｂ－３	表	長石　石英　金雲母	良	褐色	ハケ	ナデ	
	47	Ａ－４	Ⅳ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	48	Ｂ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	明赤褐色	ナデ	ナデ	
	49	Ａ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	50	Ａ－３	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	51	Ｂ－３	表	長石　石英　金雲母	良	赤褐色	ナデ	ナデ	
	52	Ｂ－５	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	明赤褐色	ハケ	ハケ	
	53		表	長石　石英　金雲母	良	褐色	ナデ	ナデ	
	54	Ａ－３	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	55	Ａ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ		内面剝落
	56	Ａ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ	
	57	Ｂ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	灰黄褐色	ナデ	ナデ	
	58	Ｂ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	59	Ａ－３	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	60	Ｂ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
第18図	61	Ａ－３	表	長石　石英　金雲母	良	黒褐色	ハケ	ハケ	
	62	Ｂ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黒褐色	ナデ	ハケ	
	63		表	長石　石英　金雲母　砂粒	普通	明褐色	ナデ	ナデ	
	64	Ｂ－３	表	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	65	Ａ－３	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	66		表	長石　石英　金雲母	普通	明褐色	ハケ	ハケ	
	67	Ａ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	68	Ｂ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母　砂粒	良	暗灰褐色	ハケ		内面風化 外面にスス付着
	69	Ａ－３	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	褐色	ナデ	ナデ	外面にスス付着
	70	Ｂ－４	Ⅱ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ナデ	ナデ	

第７表　調査区出土土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎　土	焼成	色　調	外　面	内　面	備　考
第18図	71	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	黒褐色	ハケ	ハケ	
	72	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	明褐色			土師質
第19図	73	B－3	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	明赤褐色	ハケ	ナデ	縦の突帯
	74	B－3	Ⅳ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	75	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	暗褐色	ハケ	ハケ	
	76	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	
	77	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	暗褐色	ハケ	ハケ	肥厚帯外面に凹み
	78	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ナデ	ナデ	
	79	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	80	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ナデ	ナデ	
	81	B－4	Ⅱ	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	82	A－3	表	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	83	A－4	表	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ	ナデ	
	84	B－3	表	長石　石英　金雲母	良	褐色	ナデ	ナデ	口唇部に刺突？
	85	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	明赤褐色	ハケ	ナデ	
	86	A－3	Ⅱ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	87		表	長石　石英　金雲母　砂粒	良	明赤褐色	ナデ	風化	
第20図	88	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	暗褐色	ハケ	ハケ	
	89		表	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	口唇部に刺突
	90		表	長石　石英	良	褐色	ハケ	ハケ	
	91	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ナデ	ナデ	
	92	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ	
	93	A－4	Ⅲ	長石　石英	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	94	A－3	Ⅱ	長石　石英　金雲母	普通	暗褐色	ナデ	ナデ	
	95		表	長石　石英　金雲母	良	黒褐色	ナデ	ハケ	口唇部に刺突
	96		表	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ	口唇部に刺突
	97	B－3	表	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ナデ	
第21図	98	B－3	Ⅱ	長石　石英　金雲母	普通	暗赤褐色	ナデ	ナデ	
	99		表	長石　石英　金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ	
	100		表	長石　石英　金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ	
	101		表	長石　石英　金雲母	良	灰黄褐色	ナデ	ハケ	
	102	B－2	表	長石　石英　金雲母	良	暗赤褐色	ハケ	ハケ	
	103		表	長石　石英　金雲母	良	暗赤褐色	ハケ	ハケ	
	104		表	長石　石英　金雲母	普通	暗褐色	ハケ	ハケ	細い突帯
	105		表	長石　石英　金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ	
	106	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ナデ	
	107	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	褐色	ハケ	ナデ	
	108	B－3	表	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	109	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	暗赤褐色	ナデ	ナデ	
第22図	110		表	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ	

第8表　調査区出土土器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面	内面	備考
第22図	111	B－3	表	長石　石英　金雲母　砂粒	普通	黒褐色	ナデ	ナデ	
	112	B－3	表	長石　石英	良	黒褐色	ナデ	ナデ	
	113		表	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	縦の突帯
	114	A－4	Ⅳ	長石　石英　金雲母	良	緑灰色	ハケ	ハケ	全面薄く外側に煤付着
	115		表	長石　石英　金雲母	良	明赤褐色	ナデ	ナデ	
	116	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ナデ	ナデ	
	117	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	灰褐色	ハケ	ハケ	
	118	B－4	表	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	
	119	B－4	表	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ	
第23図	120	B－4	表	長石　石英　金雲母	普通	明赤褐色	ナデ	ハケ	外面調整は粗い
	121	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ	胴下部に突帯
	122	A－4	表	長石　石英　金雲母	良	暗褐色	ハケ	ナデ	穿孔
	123	B－3	表	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ナデ	ナデ	
	124	B－4	表	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ハケ	ハケ	胴下部に沈線
	125	B－4	Ⅱ	長石　石英　金雲母	普通	明赤褐色	ハケ	ナデ	胴下部に沈線
	126	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	?	胴下部に沈線
第24図	127	A－3	Ⅱ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	
	128		表	長石　石英　金雲母	普通	赤褐色	ナデ	ナデ	
	129	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	内側に炭化物付着
	130	B－5	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	
	131	B－4	Ⅱ	長石　石英　金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ	内底に炭化物付着
	132	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母　砂粒	普通	黄褐色	ハケ	ハケ	
	133	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母　砂粒	普通	赤褐色	ハケ		
	134	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母　砂粒	普通	明赤褐色	ハケ	ハケ	
	135	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	ていねいな調整
	136	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ハケ	内底に炭化物付着
	137	B－2	表	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ		
	138	B－3	表	長石　石英　金雲母	良	黄褐色	ハケ		
	139	B－4	Ⅱ	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ハケ		多少風化
	140		表採	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色			風化
	141	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	明赤黄褐色	ハケ		
	142*	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ハケ		
	143	B－4	表	長石　石英　金雲母	良	褐色	ハケ		
第25図	144	A－3	Ⅱ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ		
	145	B－4	Ⅱ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ		
	146	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ハケ		
	147	B－4	Ⅲ Ⅳ	長石　石英　金雲母	良	褐色	ハケ	ナデ	ていねいな調整
	148	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ナデ	ナデ	内底に炭化物付着
	149	B－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	黄褐色	ハケ		
	150	A－4	Ⅲ	長石　石英　金雲母　黒雲母	普通	黄褐色	ハケ		多少風化

第９表　調査区出土土器観察表(4)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎　土	焼成	色　調	外　面	内　面	備　考
第25図	151	Ｂ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母　黒雲母　砂粒	良	褐色	ハケ		
	152	Ｂ－２	表	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ハケ	ハケ	
	153	Ｂ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ	
	154	Ｂ－４	Ⅲ	長石　石英　金雲母	普通	褐色	ナデ		

第10表　調査区出土石器観察表(1)

挿図	番号	出土区	層	器　種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量kg	観察所見
第26図	155	Ａ３	Ⅱ	磨石	花崗岩	11.5	9.4	3.3	0.55	
	156	Ａ３	Ⅱ	〃	砂岩	17.2	9.6	5.4	1.24	
	157	Ａ４	Ⅳ	〃	砂岩	12.1	10.1	4.0	0.72	
	158	Ａ４	Ⅲ	〃	砂岩	14.2	12.4	4.5	1.14	両面
	159	Ａ４	Ⅳ	〃	砂岩	3.1	10.3	5.3	0.21	破損
	160	Ａ４	Ⅲ	〃	砂岩	10.3	6.2	3.3	0.3	両面
	161	Ａ４	Ⅲ	〃	花崗岩	10.3	5.8	2.5	0.24	
	162	Ａ４	Ⅲ	〃	砂岩	11.0	5.9	3.2	0.32	両面
第27図	163	Ａ４	Ⅲ	〃	花崗岩	14.0	8.3	3.1	0.58	
	164	Ａ４	Ⅲ	〃	砂岩	10.0	9.6	5.2	0.67	
	165		Ⅲ	〃	花崗岩	9.1	7.5	3.4	0.33	
	166	Ｂ３	Ⅱ	〃	花崗岩	10.9	9.0	4.8	0.7	両面
	167		表	〃	砂岩	11.7	4.5	4.1	0.35	
	168	Ｂ３	Ⅳ	〃	花崗岩	11.4	8.5	3.5	0.44	
	169	Ｂ４	Ⅲ	〃	砂岩	6.9	6.1	3.0	0.17	両面
	170	Ｂ４	Ⅳ	〃	花崗岩	10.4	9.5	3.2	0.43	
	171	Ｂ４	Ⅲ	〃	砂岩	6.9	5.9	2.8	0.16	両面
	172	Ｂ４	Ⅲ	〃	花崗岩	8.9	7.0	5.8	0.52	三面
第28図	173	Ｂ４	Ⅲ	〃	花崗岩	11.4	8.4	5.3	0.69	両面
	174	Ｂ４	Ⅲ	〃	砂岩	14.7	9.3	4.9	0.91	
	175	Ｂ４	Ⅳ	〃	砂岩	15.6	8.4	3.7	0.68	
	176	Ｂ４	Ⅲ	〃	花崗岩	14.0	10.9	6.1	1.36	
	177	Ｂ４	Ⅳ	〃	砂岩	11.1	3.3	4.5	0.25	棒状
	178	Ｂ４	Ⅲ	〃	砂岩	8.4	4.9	2.1	0.1	破損
	179	Ｂ４	Ⅲ	〃	花崗岩	15.2	10.2	4.1	1.03	
	180	Ｂ４	Ⅲ	〃	花崗岩	14.5	10.8	6.2	1.28	両面
第29図	181	Ｂ４	Ⅲ	〃	花崗岩	8.3	7.8	2.3	0.22	両面
	182	Ｂ４	Ⅲ	〃	砂岩	11.5	8.0	3.7	0.46	
	183	Ｂ４	Ⅱ	〃	砂岩	11.5	9.6	3.7	0.6	両面
	184	Ｂ４	Ⅲ	〃	花崗岩	10.0	9.2	2.4	0.33	
	185	Ｂ４	Ⅲ	〃	砂岩	14.2	7.9	4.3	0.74	両面
	186	Ｂ４	Ⅲ	〃	砂岩	6.7	6.4	3.5	0.24	破損
	187	Ｂ４	Ⅳ	〃	砂岩	13.9	11.2	4.4	0.87	両面
	188	Ｂ４	Ⅲ	〃	砂岩	12.0	9.4	3.4	0.51	
	189	Ｂ４	Ⅲ	〃	砂岩	8.5	12.0	4.0	0.54	破損，両面

第11表　調査区出土石器観察表(2)

挿図	番号	出土区	層	器　種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量kg	観 察 所 見
第30図	190	B 4	Ⅲ	磨石	砂岩	18.9	8.5	7.5	1.57	
	191	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	16.9	10.0	5.7	1.38	一部破損
	192	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	24.0	14.0	7.9	3.73	両面・断面三角形
	193	B 4	Ⅲ	敲石	砂岩	11.9	5.9	3.1	0.3	
	194	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	10.5	10.2	3.5	0.6	破損
	195	A 4	Ⅳ	〃	砂岩	15.6	5.6	3.8	0.5	棒状
	196	B 3	Ⅱ	凹石	花崗岩	11.7	8.3	2.9	0.41	両面 偏平な石
第31図	197	A 3	Ⅱ	凹石	砂岩	9.4	7.3	3.7	0.36	両面，磨面
	198	B 4	Ⅲ	凹石	砂岩	8.7	7.1	3.6	0.31	
	199	A 3	Ⅲ	敲石	砂岩	19.3	11.5	7.0	2.2	磨面
	200	A 4	Ⅳ	〃	花崗岩	12.2	8.8	3.2	0.47	〃
	201	A 4	Ⅱ	〃	砂岩	10.7	7.5	2.8	0.35	〃
	202	A 4	Ⅲ	〃	砂岩	16.8	11.2	4.5	1.28	〃
第32図	203	A 3	Ⅲ	〃	砂岩	18.8	14.2	8.5	3.08	〃
	204	B 3	Ⅲ	〃	砂岩	16.9	9.5	5.5	1.21	〃 ・一部破損
	205	A 4	Ⅲ	〃	砂岩	14.6	10.7	5.1	1.1	〃 ・断面三角形
	206	B 3	Ⅲ	〃	砂岩	13.8	10.4	3.6	0.8	両面に磨面
	207	B 3	Ⅲ	〃	砂岩	14.8	5.7	4.8	0.68	破損・磨面
第33図	208	B 4	Ⅲ	〃	花崗岩	8.7	8.3	3.8	0.39	両面に磨面
	209	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	9.9	12.0	4.5	0.84	破損・両面に磨面
	210	B 4	Ⅳ	〃	砂岩	17.1	12.3	8.0	2.2	断面三角形・三面に磨面
	211	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	11.6	9.3	3.7	0.63	両面の磨面は，よく使い込まれる
	212	B 4	Ⅱ	〃	砂岩	14.3	10.7	4.5	0.96	一部破損
	213	B 4	Ⅱ	〃	花崗岩	10.3	7.6	2.4	0.29	一部破損
第34図	214	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	18.0	15.8	5.8	2.37	両面に磨面
	215	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	15.8	13.8	5.7	1.76	磨面
	216	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	9.1	7.3	6.2	0.5	破損，３面に磨面と敲打痕
	217	B 4	Ⅲ	〃	花崗岩	8.8	7.9	4.5	0.45	よく使い込まれた磨面
	218	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	8.5	8.7	5.0	0.49	
	219	B 4	Ⅳ	〃	砂岩	12.2	9.8	4.6	0.77	両面に磨面
第35図	220	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	12.1	8.8	5.7	0.8	３面
	221	B 4	Ⅱ	〃	砂岩	11.9	9.2	4.5	0.68	両面に磨面
	222	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	13.4	10.7	4.8	1.01	磨面
	223	B 4	Ⅲ	〃	花崗岩	12.3	8.4	3.1	0.5	両面に磨面
	224	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	16.9	12.2	5.0	1.56	片面に磨面
	225	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	8.8	7.6	5.5	0.47	側縁部に敲打痕，全面に磨面
	226	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	7.1	9.2	3.8	0.39	破損，表裏スリ，タタキ，周りタタキ，両面に磨面
第36図	227	B 4	Ⅳ	〃	砂岩	12.0	9.8	4.0	0.66	側縁部に磨面
	228	B 4	Ⅲ	〃	砂岩	14.2	9.7	7.2	1.4	断面三角形
	229	B 4	Ⅱ	砥石	花崗岩	10.5	6.9	7.0	0.24	両面

第12表　調査区出土石器観察表(3)

挿図	番号	出土区	層	器　種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量kg	観 察 所 見
第36図	230	B 4	Ⅲ	砥石	砂岩	14.4	10.0	9.0	1.29	両面・破損
	231	B 4	Ⅲ	砥石	砂岩	31.5	19.6	11.5	9.3	
	232	A 4	表	石皿	砂岩	21.0	8.8	7.5	2.18	破損後磨石として使用
第37図	233	A 4	Ⅳ	石皿	砂岩	18.6	10.2	7.0	2.08	両面・破損
	234	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	11.7	14.5	7.4	1.42	
	235	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	15.2	14.0	6.7	2.3	両面・破損
	236	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	10.8	14.1	4.8	1.17	破損
	237	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	15.0	6.5	2.8	0.38	破損
	238	A 3	Ⅲ	石皿	砂岩	11.8	9.5	12.8	1.34	破損
	239	B 4	Ⅲ	石皿	花崗岩	16.3	15.1	5.8	2.1	
	240	A 4	Ⅲ	石皿	花崗岩	19.4	17.2	5.5	2.86	両面
	241	A 4	Ⅲ	石皿	砂岩	14.9	12.8	3.1	0.97	偏平な石を利用
第38図	242	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	15.2	12.8	3.8	1.1	
	243	A 3	Ⅱ	石皿	花崗岩	17.8	13.1	6.8	2.53	側縁部に磨面
	244	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	17.2	12.6	5.5	1.7	
	245	B 4	Ⅳ	石皿	花崗岩	18.4	12.5	6.3	2.08	
	246	A 4	Ⅳ	石皿	花崗岩	23.1	17.5	6.2	3.47	両面
	247	B 4	Ⅲ	石皿	花崗岩	22.1	15.7	8.0	4.05	
	248	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	21.2	17.3	6.4	3.36	
第39図	249	B 4	Ⅲ	石皿	花崗岩	23.9	20.3	8.5	5.77	両面
	250	B 4	Ⅲ	石皿	花崗岩	25.3	15.0	11.0	5.46	
	251	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	13.4	13.8	5.7	1.58	破損・側縁部に敲打痕
	252	B 4	Ⅳ	石皿	砂岩	17.8	13.0	3.8	1.47	側縁部に敲打痕
	253	A 4	Ⅳ	石皿	砂岩	14.5	8.7	3.1	0.55	破損・側縁部に敲打痕
	254	A 4	Ⅳ	石皿	花崗岩	19.0	17.5	7.2	3.26	側縁に敲打痕
第40図	255	B 4	Ⅳ	石皿	砂岩	22.7	17.5	10.4	5.45	上面に敲打痕
	256	A 4	Ⅲ	石皿	砂岩	20.8	18.2	9.7	4.38	上面と側縁部に敲打痕
	257	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	15.5	11.6	3.9	1.12	上面に敲打痕・側縁部に磨面
	258	B 4	Ⅳ	石皿	砂岩	16.9	14.4	6.6	2.3	両面・上面下面に敲打痕
	259	B 4	Ⅳ	石皿	砂岩	17.5	16.5	6.7	2.83	側縁部に敲打痕
	260	B 4	Ⅳ	石皿	花崗岩	19.0	13.5	5.8	2.1	両面・側縁部に敲打痕
第41図	261	A 4	Ⅲ	石皿	砂岩	20.0	15.4	6.3	2.43	両面・下面に敲打痕
	262	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	24.2	14.8	8.5	4.34	側縁部に敲打痕と磨面
	263	A 4	Ⅲ	石皿	砂岩	12.7	13.3	5.9	1.56	破損・両面・側縁部に磨面
	264	A 4	Ⅲ	石皿	砂岩	8.1	13.0	9.6	1.27	破損３面
	265	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	10.0	11.9	4.0	0.62	
	266	B 4	Ⅲ	石皿	砂岩	17.0	16.4	6.8	2.51	一部破損
	267	A 4	Ⅳ	石皿	砂岩	18.8	11.6	9.6	3.29	両面
第42図	268	A 4	Ⅳ	石皿	砂岩	23.9	25.3	11.1	7.67	上面に敲打痕・下面に磨溝
	269	B 4	Ⅲ	砥石	砂岩	36.9	18.3	13.3	11.8	３面

第V章　まとめ

資料化されたものの少ない上能野式土器が出土した今回の調査結果は，この時期の解明のために貴重な資料をもたらした。ここでは，上能野式土器を中心に火ノ上山遺跡の調査成果をまとめることとする。

遺跡の範囲について

火ノ上山遺跡は，弥生時代前期から古墳時代にかけての遺跡である。昭和50年代に，本遺跡の主体部と思われる宮浦中学校の校庭造成作業が行われた。この造成作業に参加した方々の話によると，地形は平坦ではなく起伏に富んだ砂丘地で，多量の土器片が出土したらしい。今回の調査区域は現砂丘の後背地に立地していることから，それ以前に形成された砂丘の後背地に人々が生活を営んだことは予想される。このことから遺跡の主体部は，宮浦中学校の校庭でその造成時にすでに破壊されたと思われる。しかし，現砂丘の後背地である今回調査を実施した付近にかろうじて遺跡が残存すると思われる。しかし，周辺は住宅等の建設と旧地形が不明なことから確定はできないが，調査区の南北，海岸線と平行な現砂丘の後背地に広がる可能性がある。今後の開発の際には注意が必要である。

本遺跡出土土器の特徴について

上能野式土器の標式遺跡である上能野貝塚の発掘調査は，昭和47年に実施されている。その概報に「・・・この土器は中形の釣鐘形で，充実した脚台をもっている。底部中心部がわずかに凹み，あげ底風になっているのが特徴である。・・・文様はするどい箆によって胴部以上に描かれ，直線と曲線を組み合わせた特色のあるもので，二並行線を基本文様として，山形又はその変形で構成され，間に二並行線間を斜線で充めたものである。口縁部外面と頸部には粘土紐をめぐらし，口縁部は肥厚して断面は三角形を呈する。・・・」と上能野式土器を述べている。本遺跡の包含層出土の土器はそのほとんどがこの型式の範疇に含まれるものである。ただし，71は口縁部が肥厚しない無文の土器であるが，胎土・調整とも他の土器と同じである。72は，土師質の土器である。71が上能野式土器の範疇に含まれるかについては不明で，72は明らかに異なる。

本遺跡出土の上能野式土器の出土量は，さほど多くはないが，その中での特徴を述べる。

器形は，釣り鐘形で脚台をもつ甕形土器であるが，壷形土器はない。

口縁部形態には有文無文を問わず，外反するもの・直行するもの・頸部から口縁部にかけて外反して口縁端部が内側を向くものがあるが，全体的には外反するものが多い。口唇部を平坦に仕上げるものがほとんどであるが，丸く仕上げるものも数点ある。また，口縁部肥厚帯の断面では三角形・多少間延びした三角形・四角形に近いものがある。断面が四角形のものも胎土・焼成・文様等から上能野式土器の範疇に含まれる。

突帯は胴部以上に付き，突帯上に沈線を施すものとないものがある。なかには121のように突帯が胴下部に付いたり，120のように瘤状の突起つくものもあるが，胎土・焼成とも上能野式土器の範疇に含まれると思う。

底部については，小振りの脚台がつくが，上げ底の度合いの浅いものと深いものがあると前述した。

文様については，その全容をつかめるものが44の１点しかないが，基本的には１条もしくは２条の直線的な沈線で×印もしくは山形とその間をうめる横位の沈線で構成されている。文様は胴部以上に描かれるが，中には胴部以下や脚台に縦方向の沈線を施すものもある。

土器の製作については，胴部と底部の接合にその特徴が顕著に現われる。例えば132の胴部と154の底部を作る。そして，それらをはめ合わせ，胴部と底部の外側接合部分に粘土を塗付けている。その際の調整は極めて雑である。そのために出土する底部は接合のための粘土が剝落しいわゆる「芯」が剝出しになる。また，接合のための粘土を底部の接地面まで伸ばすこともある。表層出土の138の底部は「芯」を持たず，明らかにその技法に違いが見られる。139・142・145・146のように底部の上部先端は内底の一部として利用される。中には接合する粘土がよく接着するために入れたと思われる沈線が施されている。

口縁部の肥厚帯は粘土を内側に折り曲げるか貼り付けるもの，外側に折り曲げて貼り付けるもの，粘土を内側から外側に貼り付けるものがある。

他の遺跡出土の上能野式土器との比較

上能野式土器は，先の上能野貝塚の他に西之表市の横峰遺跡・椎ノ木遺跡，及び平成５年に調査が行われた嶽野中野遺跡での報告がある。横峰遺跡と椎ノ木遺跡は出土点数が数点と少ないが，断面三角形に口縁部が肥厚し，ハケによる調整，沈線での施文は本遺跡出土の土器と同じである。ただし，椎ノ木遺跡の報告書に掲載されている土器１は，口縁部肥厚帯に沈線ではなく斜位の刻みが施されている点が相違している。また，嶽野中野遺跡の出土土器との比較では，口縁部肥厚帯の断面が本遺跡の資料では三角形を呈するものが約半数あるが，嶽野中野遺跡ではそのほとんどが四角形を呈するという相違がある。文様構成についても，本遺跡では直線的な沈線が多いのに対して嶽野中野遺跡では曲線的な沈線が見受けられる。

これらの特徴を本遺跡の地層により類別することはできない。また，この特徴が地域差及び時間差を示すものかについては，現時点では出土例や資料が少なく言及することはできない。今後の資料の増加を待ちたい。

上能野式土器の時期について

上能野式土器の時期については「上能野貝塚」では弥生時代後期と位置付けている。「馬毛島埋葬址」「横峰遺跡」の報告書でも同様に扱われているが，中園聡氏は本型式を「７世紀に下る可能性は少ない」と位置付けている。また，嶽野中野遺跡の粘土層より採集された土壌の放射性炭素を年代測定し，その結果は1880±120ｙ．Ｂ．Ｐ：Ａ．Ｄ．（Ｇａｋ－18196）であった。本遺跡の調査結果からその時期等について述べなければならないが，鳥ノ峯遺跡・輪ノ尾遺跡・上能野式遺跡等の調査が概報のみでその全容が明らかになっていない現状では難しい。また，包含層から出土した土器で本報告書に掲載したものは，71・72の土器片を除いては上能野式土器と思われる。72はⅢ層出土の土師質の土器であるが，出土点数がわずか１点と少なく，同時性を示す共伴関係にはなり得ない。したがって，本遺跡においては時期を決定するような共伴がないため，確定的なことは言

えないが遺跡の立地条件等から考えてその可能性を探ってみたい。

遺跡の立地からみると，時間的な幅をもった遺跡が連続した砂丘に存在する場合，主体的に出土する遺物は海岸に近づくほど新しくなる傾向にある。本遺跡と同町にある一湊松山遺跡では，平成６・７年の調査では縄文時代前期の遺物が主に出土し，これよりも約50ｍ海岸に近づいた地点を昭和55年に調査しているが，この時は縄文時代後期の遺物が主に出土している。また，笠利町の東海岸でも同じ例がある。

また，現砂丘の後背地に立地する県内の遺跡を概観すれば，そのほとんどは古墳時代の遺跡である。屋久町の東宮原遺跡，上甑村の江石遺跡，鹿島村の小牟田遺跡，下甑村の大原・宮薗遺跡，頴娃町の塩取口遺跡等は現砂丘の後背地に立地する古墳時代の遺跡である。

そして本遺跡の立地をみると，海岸線から約250ｍの地点に設定した５トレンチからは流れ込みの遺物ではあるが，弥生時代前期から中期と思われる土器と図化し得なかったが中津野式と思われる成川式土器の胴部片が出土し，上能野式土器の出土は見られない。また，海岸線から約100ｍの今回の調査区表層からは弥生時代の土器片は出土するが，包含層からの出土は見られない。このようなことから本遺跡も砂丘の形成とともに広がりを持つようになり，現砂丘の後背地には上能野式土器を製作し使用した人々が生活したと考える。あくまで推論ではあるが，現時点では中津野式以降の古墳時代としたい。ただし，その下限については不明である。

参　考　文　献

「横峰遺跡」	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(5)	1977	鹿児島県教育委員会
「馬毛島埋葬址－西之表市椎ノ木遺跡」		1980	熊本大学文学部考古学研究室
「一湊松山遺跡」	上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書	1981	上屋久町教育委員会
「上能野貝塚発掘概報」		1973	河口貞徳
「大原・宮薗遺跡」		1974	下甑村教育委員会
「鹿児島サンオーシャン・リゾート地域埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ」	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(68)	1994	鹿児島県教育委員会
「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅳ」	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(69)	1995	鹿児島県教育委員会
「嶽中野遺跡」	西之表市埋蔵文化財調査報告書(8)	1994	西之表市教育委員会
「土器様式の動態」	人類史研究　第７号	1988	人類史研究会

図　　版

図版 1

発掘作業風景

石組み検出状況

B－4区遺物出土状況

図版 2

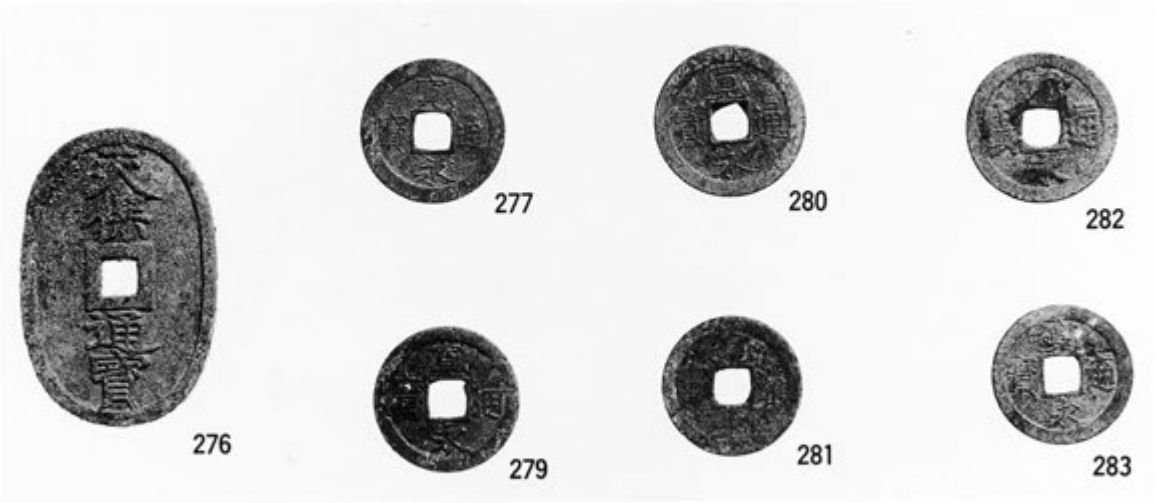
遺物出土状況(No146)

遺物出土状況(No45)

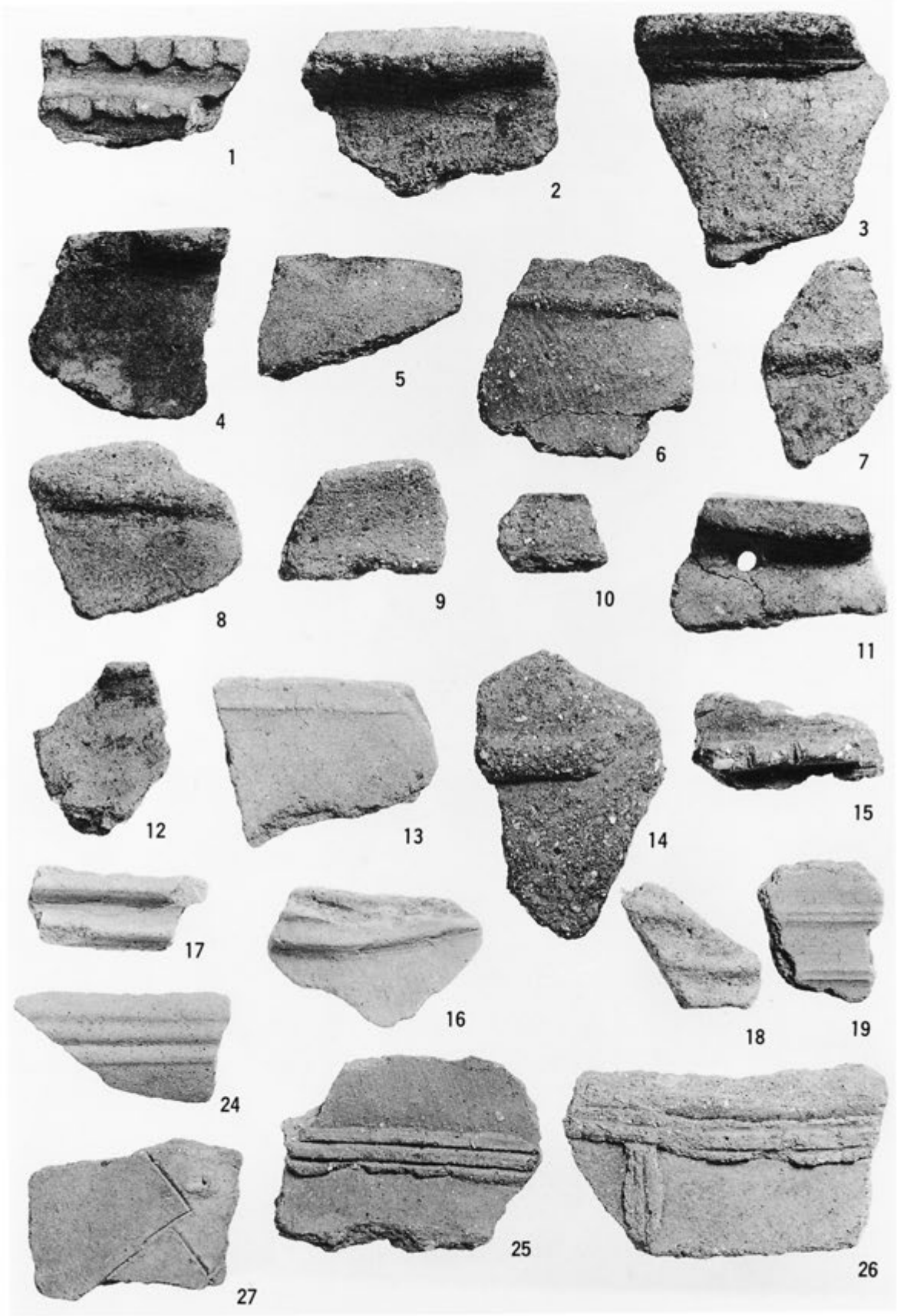
調査区西側土層断面

出土遺物(1)

図版 4

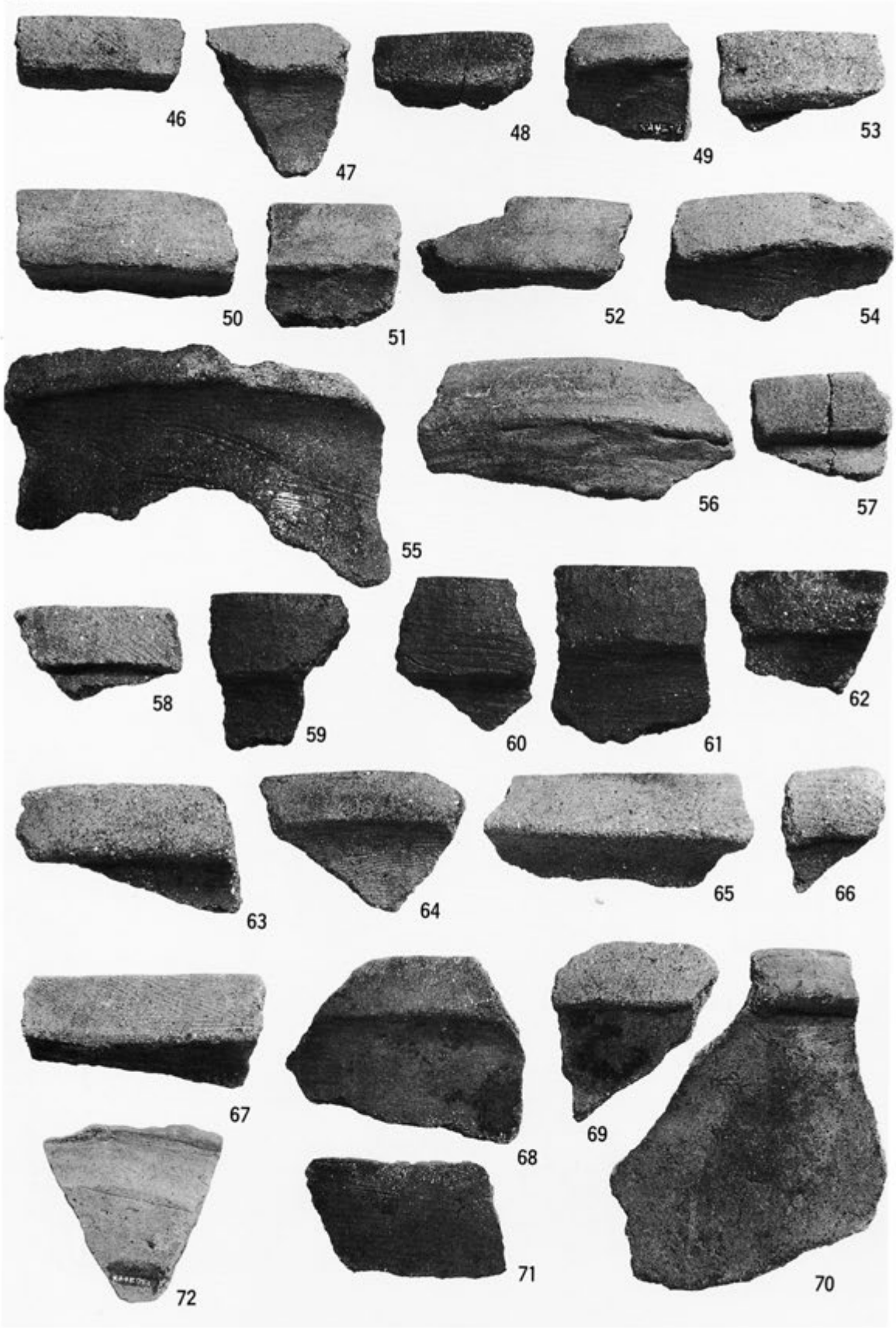


出土遺物(2)

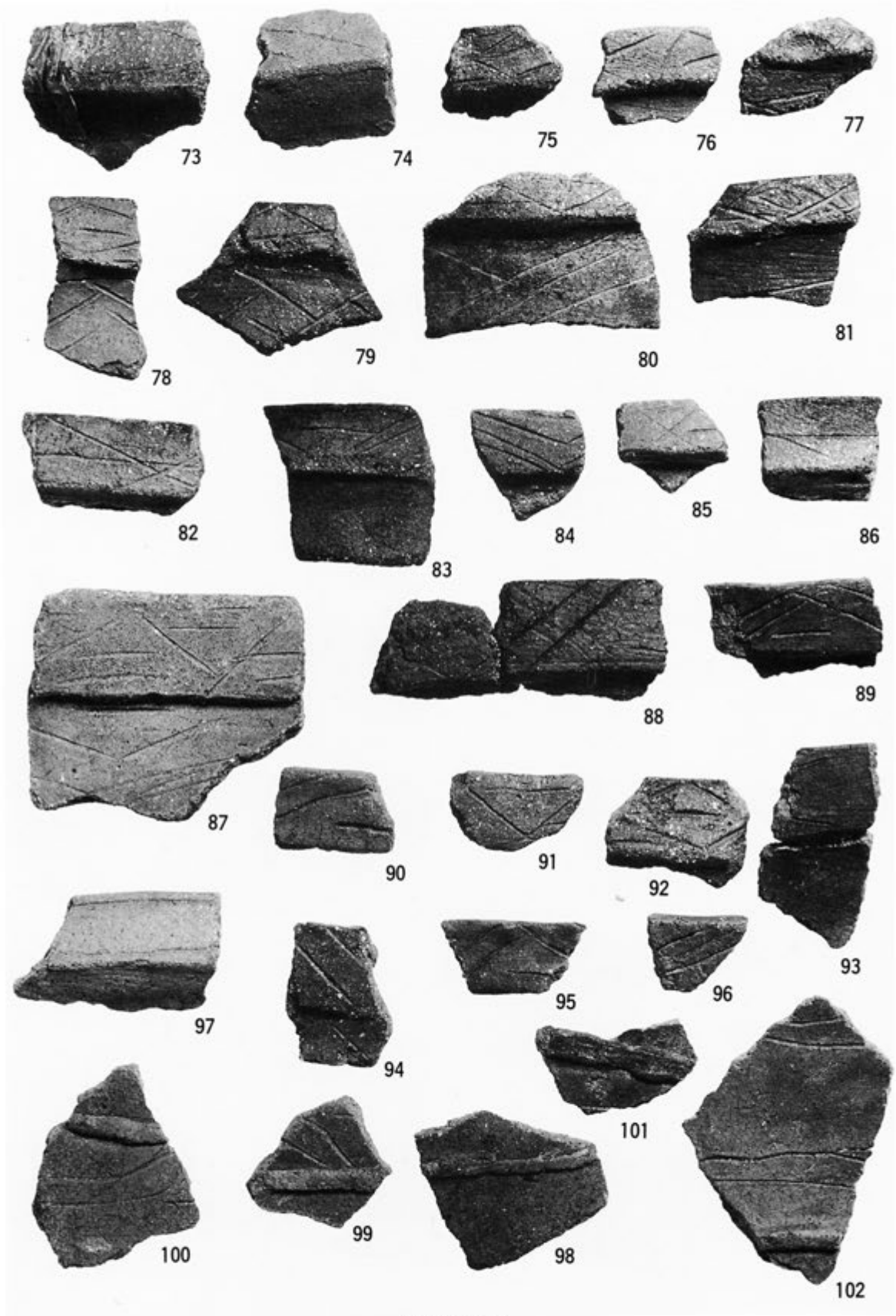


出土遺物(3)

図版 6

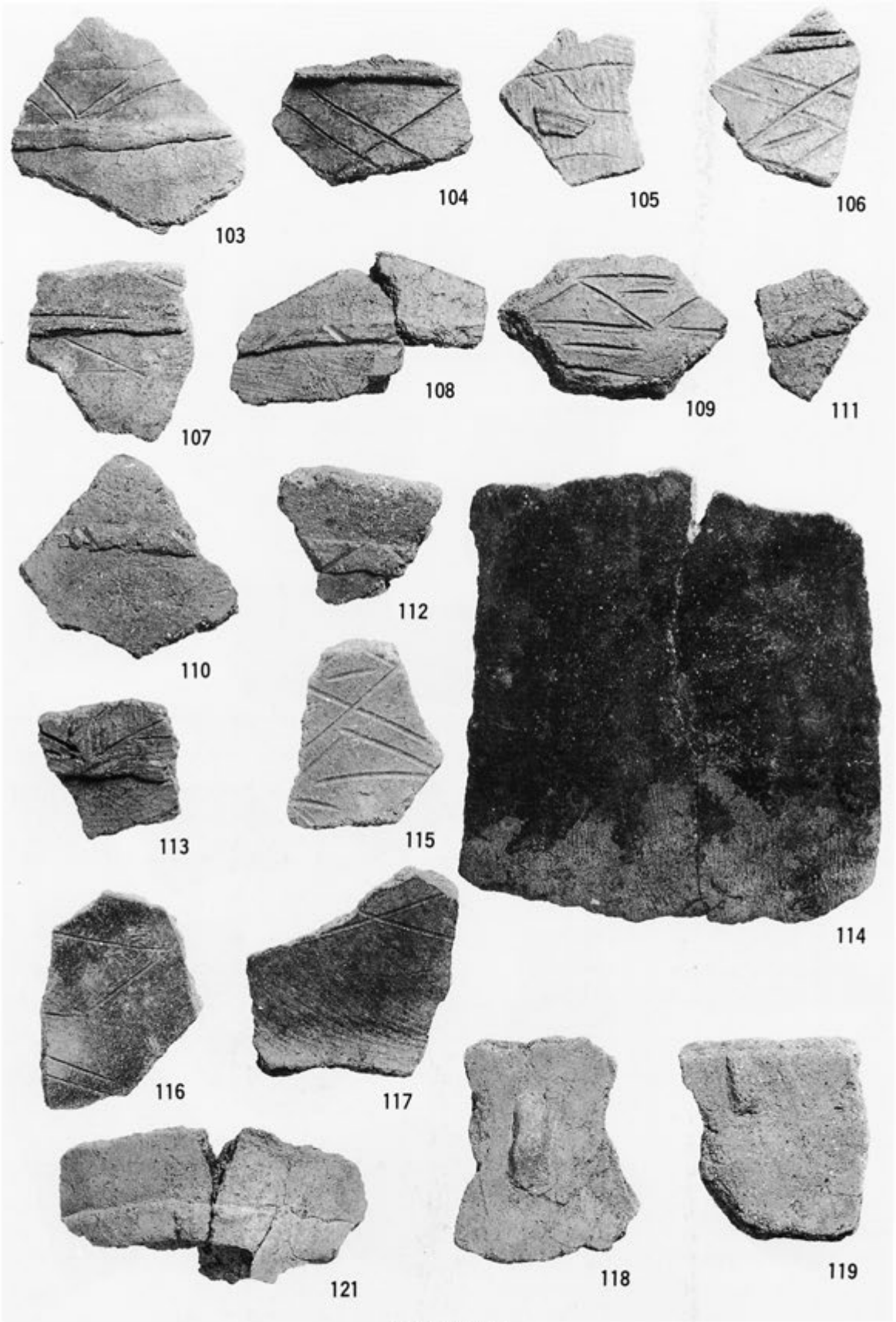

46
47
48
49
53
50
51
52
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72

出土遺物(4)


73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102

出土遺物(5)

図版 8


103
104
105
106
107
108
109
111
110
112
113
115
114
116
117
121
118
119

出土遺物(6)

出土遺物(7)

図版10

出土遺物(8)

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(17)

火ノ上山遺跡

発行日　1996年3月31日
発　行　鹿児島県埋蔵部文化財センター
〒899－56 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地
印　刷　鹿児島市上荒田町854－1
株式会社　朝日印刷
TEL　099－251－2191